

Prologue

エルシアンはほの暗い早暁の底辺に一人、座り込んでいる。何かに縋りたくて伸ばした指先が、ふ と明りのランプに触れて反射的に手を庇った。

灼熱を感じるより痛みのほうが強かった。だがそれも体を焦がす理解できないものへの恐れと脅え に焼き捨てられて、まるで自覚にならないほどのものだ。

何故、と小さく呟いた。喉嗄れてそれもひどく辛かった。ランプの炎がはぜるほのかな音で、しんとした静寂が刹那破れた。

音に引き戻されてはっとするが、それも一瞬のことに過ぎない。脳裏を潮騒がぐるぐると渦を巻いて、自分の身に起こったことを反芻しようとしている。やめて。

顔を伏せる。思い出したくない。

(やめて、やめて!)

思い出したくない。

(い、いや、いやだ、いやだ、) 考えたくない。

(どうして、何故、いやだって)

忘れ捨ててしまえるのなら何でもする。それがどんなにそれがあざとい事であっても構わない。目

て夢だったような気がして顔を上げた。

覚めて消える浅い眠りの浅い夢、それほど綺麗に溶けて流れてしまえと思い、ふと今までのことが全

カーテンの被さったレースから強い光が差し込んでいる。夏は涼をとるために薄いカーテンを重ね 引く。その合わせ目が僅かに開いていたのだろう。

あれは夢だったのか。そうに違いないのか。エルシアンは自分の手首に残された指の跡を見る。赤くくっきりと残った強い力の残骸が目を焼くほど痛々しかった。

くくっさりと残った強い力の残骸が日を焼くはと痛々しかった。 顔を手で覆った。涙は出なかった。隙間から部屋を浸食していく朝日は明るく健康的で、初夏の空

気のまま、同じほどに澄んでいる。そこに放り出されているのがやけに可笑しくて、エルシアンは喉を鳴らした。この身に起こったことを一体どうして理解したらいいのだろう。愛だって? ——そんなの、嘘だ!

エルシアンは呻いてゆっくりとその身を床に折った。ごろりと転がると黒い髪が一面に広がる。夏 用の、木を編んだ床敷の青い香りがむせかえるようだ。だが清涼な香りの中にいてもそれよりも強い 、烙印のように消えぬ別の臭いがエルシアンの喉を塞いで呼吸を緩慢に止めようとする。

――気分が、悪い。

胃の辺りで渦巻いている吐き気をこらえるために口に手をやるが、手首にくっきり残ったその跡が 目に入った瞬間、我慢ができなくなった。駆け上がってくるものを宥めすかして中庭までよろめき出 たところで限界だった。

大まか吐き戻してからエルシアンは大地に拝礼するような恰好で後ろを振り返る。開け放した中庭

と部屋をつなぐ扉を風が通ったせいかカーテンが僅かに揺らめく。肩で呼吸をしながら口もとを拭う とエルシアンは顔を上げた。

澱みが流れ出すのが見えた気がした。頬にふれる生温かな空気は室内のものだろうか。それを思っ

たのに反応するように、胃がまた絞まった。

今度は喉に引っかかるような酸いものしか出なかった。吐き切れない残留感を喉で鳴らし、エルシアンは何度も咳をする。

消耗しつくして崩れ落ちそうになるのを手をついて支えるが、自分の吐瀉物と中庭へ降りる大理石の石縁に滑って倒れた。

べしゃっというぬるい音がした。エルシアンは喘ぎながら身を引きずり、部屋へ戻る。

中に入った途端にまた嫌な記憶を引きずり出す、濃い腐臭がした。目の前が一瞬くらむ。膝をつく 。立っていられない。

寝台へは戻りたくなかった。呼吸が楽になるまでは殆ど動けそうになかった。床の上で丸くなりながら、エルシアンは長い夜を記憶から消そうと躍起になる。

目覚めれば苦痛が消えていればいいのに。体の隅々まで軋む痛み、それ以上に心の真奥まで浸食する、言葉にならない苦役、こんなもの、欲しくなかった......

ぎゅっと目を閉じると悪夢が呼び戻ってくる。エルシアンは掠れた声を上げてどうにか顔だけを中庭との境目まで動かした。外気を吸いたかった。

荒く呼吸しながら視線を不意に動かすと、硝子扉に移った自分の顔が見えた。床に垂れた黒い髪に 比して明らかに顔色は白く、表情はそれ以上に強張って蒼白だった。

違う、とエルシアンは呟いた。これは自分じゃない。俺はこんなに虚ろな顔をしない。こんな凍りついたまま死にかけたような顔をしない。……今までは。

その言葉が頭に浮かんでエルシアンは面を歪めた。そうすると硝子の中の少年も顔を同じくする のだった。

これが自分だ。

全ての末端が一点で切り変わったように、裏返ったようにこの長い夜を越えて新しくなった――なってしまった。黒い髪に暗紫色の瞳もここ数年で急激に伸びた背丈も変わらないのに、中身だけがすり変わってしまった。

エルシアンは再び顔をしかめた。硝子の中の自分の顔がひき歪み、ひどく醜く見えた。直視できずに床に面伏せる。ひんやりした床の温度がほんの僅かに胸の波立ちを押さえてくれるようで、漏らした溜息は長い。

床に押しあてる格好になった耳に堅牢な響きが伝わってきたのはその時のことだった。かつん、という足音のように聞こえた。 エルシアンは飛び起きる。一旦おさまりかけていた動悸が跳ね上がって心臓がきりきりと痛みだし、思わず自分の胸倉を掴む。 ——気分、悪い……

エルシアンは力なく床へ崩れ落ちた。足音がする。規則正しい律動が床を踏んでいる。ぞくっと体が冷えた。床に倒れて起き上がることもままならない。

くそ、とエルシアンは知らず握りしめていた拳で床を叩いた。それもあまりに弱い暴力であった。 気の抜けた音がして、固い床の感触の反動で手首の軋みが再び悲鳴を上げる。

足音が近づいてくる。エルシアンは震えながらやっと身を起こし、やはり消耗と眩暈で床へ沈み込んだ。

.....怖い。

この足音を、どこかで聞いた。いつだ。いつ、どこで。

エルシアンは目を閉じた。――多分、と最初に見えたらしき兆候を記憶はついに探り出す。

それは、ほんの五日ほど前。このシタルキア王国の支配者であり、エルシアンの父親である国王の 、生誕の祝賀の席。 ……曙光が青紫にくすむ山々の稜線から溢れ出してきたのと同時に、鐘が一つ打ち鳴らされた。音は重く厳質であった。鐘声はようよう響き渡り、空気を細かく震わせ、余韻を長く引きながら次第に消えた。誰からともなく安堵のような嘆息が漏れ、すぐに歓声に変わった。

王族しか身に付けることを許されていない純白の衣をまとった一団が立ち上がり、一段高い場所 へ座っている登極者へ礼を取った。

「王紀、正祝、多祥清明、万祥万歳を許す」

重々しい声が言うのを待ち兼ねたように、一斉に国王陛下万歳の三唱が起こった。王がこの日、四 七才を迎えたのだった。既に壮年期にある王だが、眼光にはまだ十分な力がある。ゆったりと頷く様 は威圧を放ち、峻厳であった。

三唱が終わると場は急に緊張を弛めて和やかになった。日の初声の鐘を聴くために中断されていた音楽が流れ出し、ざわめきが戻ってくる。群れまとまっていた王族も散会し、貴族たちもそれぞれ歓談を再開し始めた。

エルシアンは肩から力を抜いて首をゆっくり回した。いつものことではあるが儀式は疲れる、と溜 息になる。王宮ではやはり国の筆頭としての格式に見合った儀典が多く、その度に列席を義務づけら

処女雪の色をしたマントを肩へ掛け直すとエルシアンはひっつめていた黒く長い髪をようやく解き 流した。基本的に髪は長く伸ばすのが礼だ。王宮では更にそれを一つにまとめるのが作法というもの

だが、年若い貴族には無造作に後ろへ流している者も多い。エルシアンがまとめ髪を解いたのはひと

えに侍女がむきになってきつく髪を止めたせいで、最初の父王の言葉を待つ間ですっかりこめかみに 鈍い頭痛を覚えたせいだったが。

れて正直、面倒で仕方ない。

髪をほどくと急に頭が軽くなった気がした。こめかみの部分を指の腹で押していると、遠くから父の随従の声が自分を呼んでいるのが聞こえ、自分の番なのだと悟ってそちらへ歩く。父である国王に 誕生日の祝いの挨拶をしなくてはならない。それもまた、自発ではなく義務であった。

「父上にはご壮健をお喜び申し上げます。暦年を重ねられますよ

う、万祥万歳の祈願をお許し下さい」

わなくなる。

腰を折りながら万歳、と呟く。決まり切った口上を口にしてしまえば他には何もなかった。元々父との縁は限り無く薄い。私人としての父との絆は恐らく妃である母親の所を訪れた際に築いていくものなのだろう。

エルシアンには母親がいない。即ち両親の揃った光景を見たことがない。成人するまでは先王の正 妃であった皇太后エレイナの膝元で育ったが、エレイナと父王がそれほど懇意でなかったせいもあっ て殆ど父と言葉を交わすこともなかったし、成人してしまえば後宮に自室を与えられるから、尚更会

強固な血縁と言うべき他人はこの父だけのはずだが、まるで心に落ちつかなかった。

照回は血豚と音 アドゥ 他人はとの文だりのは 9 たが、 よる C 心に冷り フがながった。

やはり父王も彼と同じく文言を低く呟いただけであった。はい、とエルシアンは軽く会釈をした。

沈黙はひどくぎこちなく、いたたまれなかった。

「そなたにも万祥の輝きがあるように」

エルシアンは父に聞こえないようにそっと溜息を落とす。決まった言葉を与えるのと同時に王は実 子達には何かしらの祝辞があるのが慣例だった。だが言葉は紡がれず、徒に時間が過ぎる。

自分たちの間には何も無いのだと思うのはこんな時だ。微かに開いた間隙さえ、埋める術をお互い に分からない。

だがエルシアンが本当に悲しいと思うのは、埋めたいと思う心さえ興らないことの方だ。ひどい衝撃に痛覚が麻痺したようにか、父のことになると平静に、ともすれば冷ややかに眺めてしまうことをエルシアンは否定出来なかった。

それを僅かに嫌悪する心も父に対する好意の問題ではなく、自分自身の内側へ向けた内省というべきだ。

異母兄の声が父上と促すのを聞いたのはそんな感傷にぼんやり浸っていたときだった。お時間を、という声の主をエルシアンはちらりと見る。異母兄と視線があって、今度は気まずさなどではなく俯いた。

......この兄こそがエルシアンには唯一の肉親と思える相手であり、何よりも揺るぎない自信に支えられた彼の全てを心底から敬愛する相手でもあった。

その名をアスファーンという。彼もまた、後楯を殆ど持たない王子であった。それが万難を乗り越 えて王太子に指名されているのだから、とエルシアンは微かに頬が上気するのを感じる。

俯いてしまったのはアスファーンが嫌いだからとか苦手だからということではなく、ただ眩しかっ たのだ、とても。

それは直視できぬ太陽に似て、いつでも圧倒的だった。エルシアンにもどうやら自らと同じ不遇の 痛みを見ているのか、何くれと気を掛けてくれる。それがはやり立つほど嬉しかった。

時間、というのは助け船だったのかもしれなかった。父とエルシアンがお互いに意味の無い会話を するほどに相手を知りたいと思っていないのを敏感に察したのだろう。無駄に模索するより理由をつ けて打ち切ったほうが遥かに良かった。

適当に挨拶だけをして、エルシアンは王前から退出する。真実これで解放されて肩の荷が下りた。 父王が席を去るまでは部屋へは戻れないが、その間は好き放題に飲んでいればいい。

元々母親が知れないことで後援の貴族を持たないし、将来の萌芽を自分に見出すほど目の利かない 貴族もいないらしく、大抵エルシアンはぽつんとしている。それでも良かった。アスファーンのよう に王の側を離れても始終他人に囲まれて、見え透いた追従を流していくには自分はまだ子供なのだ。

その自覚はある。

、言葉も砕けて乱暴だ。

他の王子達の側には侍従がいるが、エルシアンには侍従はたった一人しかいない。それも主従であると言うよりは友人だった。エルシアンはリュードという名の同い年の侍従を、配下だと思ったことがなかった。リュードのほうもエルシアンを主人だとは思っていないらしく側にいないことが多いし

もっともその中に時折覗く気遣いや優しさを汲み取れないほどエルシアンは鈍感でも子供でもなかった。

リュー、とエルシアンは溜息になった。今この場に彼がいるなら二人で飲みながら時間を潰せる のに、とそんなことを思うと苦笑が漏れる。リュードは今王都にいるがエルシアンの側にはいない。 ほんの十日ほど前にさる貴族の奥方との情事が明かるみに出て謹慎中なのだ。それもまた、リュード に言わせれば

「だってさ、あっちから誘ってきたんだよ? たまには腹の出たオヤジじゃなくて、俺みたいな美少年を食いたかったんじゃないの? うーん、ヤな女じゃなかったけどそうね、中の下」

自分で言うだけあってリュードは線の細い、繊細で端麗な美貌を持っている。エルシアンと並んでいるとどちらが王子なのか分からないと言われたことさえあって、仄かな気品と造形の美しさには捕

近衛騎士の庶子であるリュードと貴族の間には広大な身分差があり、通常姦通の罪を問われても仕方がないが、謹慎で済んだのはともかくリュードの言った通り「誘ったのはあっちのほう」であることがどうやら事実だったからで、軽い叱責で済むはずをそうなったのはリュードの素行の悪さのせい

彼はこの手の問題を起こすのが初めてではなかった。エルシアンの侍従として後宮へ上がってもう 三年半が経過しているが、知っている限り、明かるみに出たのが七回目なのだった。

一応王族であり王の二十二人目の子にして十三番目の男子なのだからエルシアンはリュードをもっと庇う事も出来るだろうし、ある程度強く押せるのだろう。そんな言い方をするとそれが事実だけに 偉そうに聞こえる、とエルシアンは苦笑になる。

だが現実王太子には既にアスファーンが立って責務を務めこなしているし、有力貴族を母に持つ異母兄弟たちも多い。そんな中に埋もれてエルシアンなどは王族の中でものけ者――除け者というより無視されていて王宮の勢力図などとは至って無縁であるし、これから先にも縁があるとは思えない。それに王子であることを意識させられるのが元来苦手だった。

いつものように目につく酒瓶を取って広間の端で飲み始める。

らえ所がなく、猫科の生き物と形容されているのだった。

と、いうことらしい。

だろう。

エルシアンは酒には強かった。酩酊するにはかなり量を飲まなくてはならない。この場で飲むことの出来るほどの量では微かに酔いが回る程度でしかなかった。

そうしてしばらく窓の外の払暁を眺めながら飲んでいると、後ろから名前を呼ばれた。エルシアンは慌ててもたれかかっていた長椅子から身を起こし、振り向きざま立ち上がる。

……皇太后からの誕生日の贈り物は剣の下げ緒とマントの止め金だった。それぞれ黒耀石と色の深い紫水晶で飾られている。エルシアンの髪と瞳の色に合わせてあるのだ。つけてみるように言われてエルシアンはマントを止めるピンを引き抜き、もらったばかりのそれを同じ場所に当てた。

「よく似合うわ。お前は本当に着飾りがいがある子だね」

皇太后エレイナは上機嫌のままに背後に立つ侍女を振り返る。

ねぇ、と同意を求められて侍女は深く頷いた。ろうそくの灯に侍女の白金の髪の光が淡く揺らいだ。 。エルシアンは侍女と僅かに視線を合わせて笑う。

「ありがとうございます、おばあさま。大切に使います」

「間違ってもあの子にやってしまっては駄目よ」

念を押されてエルシアンは苦笑になる。あの子というのはこの場合リュードのことだ。リュードは

宝飾品を好きで集めているが、エルシアンも何度か巻き上げられているし、女に貢がせるし、無軌道 を絵に描いたようだった。

「おばあさまからだと言えば少しは自重するでしょうよ」

エルシアンは肩をすくめる。だが口で言うほどリュードを戒めようなどと思っていないのはエレイナにも分かっているようだった。本当かしらと笑っている。

したのかは定かでない。母親がいない、のは死別したからではなくて不詳だからなのであった。

この日エルシアンは十八才の誕生日を迎えた。父王から遅れること二日だが、本当にこの日に生誕

誰だか分からない女の子供だと一笑に付されても不思議ではないが、父は自分を息子だと認めはし たのだ。

「お前も十八になるのね、本当に早いこと。ここへ来た頃はこんなに小さくて可愛らしかったのに」

エレイナは椅子のひじ掛けあたりに手を置く。エルシアンがエレイナに引き取られたのは一才を越 した頃で、それまでは侍女や女官の手を右往左往して育ったと聞いていた。彼女の死んだ息子にエル シアンが似ていたからと聞かされてはいたが、既に絆は固く結ばれ、今更理由などどうでも良かった

大切なのは、とエルシアンは思う。エレイナは祖父王の正妃で父王は側腹の王子、二人の間に血縁

関係はない。エレイナから見れば父王は夫が他の妃との間に作った子供である。つまりエルシアンと エレイナは他人なのだ。

だが、エルシアンを育ててくれたのはこの他人であるはずの老女であった。深く絡んだ絆の強さと 深さだけが自分たちをつないでいる。そう思うと尚更に大切にしようという気持ちになる。

ー血の繋がらない祖母から貰った贈り物を、丁寧にマントから外してエルシアンは髪をほどく。普段

は王宮の作法など適当に聞き流して髪は結ばずに流しているが、今日はエレイナとの多少改まった夕 食だったからさしあたって準拠してみた。その可笑しさはエレイナにも伝わっていたようで、今日は

きちんとした格好で来たわねと笑われたものだ。 下げ緒の両端にも黒耀石と紫水晶の飾りがついている。下げ緒自体は白金と金を細く糸状にして寄

これは学院へは持っていけないな。エルシアンは溜息になる。

りあわせたもの、これ一本でどうやら田舎の別荘が買えそうだ。

エルシアンが王子であることは隠されているわけではないが喧伝しているわけでもない。実際、友人たちは自分が貴族であることを知っていても王族であるとは思っていないだろう。儀式や礼典のときに使うものにはまた細かな定めがある。王宮の中にいるときに髪をまとめる飾り紐として使うのがいいかも知れない。やっと使い道を見出してエルシアンは苦笑した。

夕食を終えてしばらくエレイナと歓談してからエルシアンはこの館の自室へ戻る。成人するまでは ここで暮らしていたのだ。

王宮は国政の中心として機能する太陽宮と呼ばれる部分と、王族の私生活の場である蒼月宮に分かれているが、エレイナの館は蒼月宮の更に深み、王宮全体の真奥に位置している。この時間になると夜の庭を抜けて近道を回っても帰るのは億劫だった。

王族は基本的に自分の居場所をいかなる場合にも明らかにする義務があり、エルシアンが今夜ここへ泊まるのは既に蒼月宮を管理している部署へ連絡してある。不便だが仕方がない。平民たちよりは随分贅沢な暮らしをさせてもらっているのだから、多少の不便は受け入れなくては――それに。エルシアンは自分がいた頃のままの部屋で衣服を弛めながら口を苦笑にゆるめる。

……大体、それは「何かあったときに責任を負う立場の王族」のための制度だ。今までも何度 かリュードと口裏を合わせて外泊を重ねているが、ばれて叱られたことは一度もない。それにあぐら をかいているのも良くないと分かっているが、緊張した空気のときは外には出ないでおこう、程度の

小さく扉が叩かれたのはその時だった。いいよ、といってやるとするりと音なく滑り込んできたのは先ほどエレイナの側にいた侍女だ。結いまとめられていた髪は今はゆったりと解かれており、眩しい白金の色味の薄さが清楚で胸に響く。

ナリアシーア、とエルシアンは呼んだ。こくりと頷く仕種が愛しく、仄かに笑った唇が愛しい。ほっそりとした体の上にのっているのは何よりも美しい、絶対の美貌だ。どんな地上のものよりも神々に愛された宝石のように輝いている。

ナリアシーアは窓際に立っていたエルシアンの側へ寄り添うとその場に座った。エルシアンもつら れるように椅子に腰を下ろす。細い声が殿下、と言うのが聞こえた。

「お誕生日おめでとうございます」

認識に落ち着いていた。

うん、とエルシアンは穏やかな返事をしてナリアシーアの髪に触れる。ゆるい波を描く美しい絹糸がさらさらと手の中で音を立てた。これ、と差し出された包みはエレイナに比べて相当小さい。受け取って包装を解くと、中は髪をまとめるための飾り紐と髪飾りだった。同じ意匠をこらしてあるから揃いで使えるものだ。これがナリアシーアからの贈り物だった。材質は絹だろうか。

「陛下のに比べると、恥ずかしいんですけど……」

「比べるのはおかしいよ。それに君がくれるなら何でも嬉しい」 それは偽りない気持ちだった。

ナリアシーアの家格は貴族の中でも低いほうから数えるのが早く、また門閥の係累などでもなかった。経済的に豊かとは思えなかった。ナリアシーアに出ている侍女としての給金は家に入れていると聞いたことがある。彼女の細々とした小遣いあたりで買うのがやっと、なのだ。物よりもそれをしてくれる心のほうがエルシアンには何倍も嬉しい。

急にエルシアンは立ち上がった。ナリアシーアが驚いたように彼を見上げた。エルシアンはゆるめていた衣服の襟を多少戻しながら空を見る。満天の星、輝く月、雨は降っていないようだ。

「ちょっと部屋、行ってくる」

蒼月宮のですか、とナリアシーアが聞き返した。エルシアンは頷いた。エルシアンの部屋は太陽宮に程近い、他の王族たちと分けて使っている居宮の一角になる。蒼月宮という言い方自体がいわゆる後宮の総称であって、実質はこうした居宮や小宮を温室や回廊で繋いでいる建造物群だ。このエレイナの館は蒼月宮と一般に呼ばれているあの建物の森からは庭園を抜けて丘を越え、更に馬場や池などを挟んでいて遠い。エルシアンは近道を知ってもいるが距離があるのは否めなかった。

「すぐ戻るよ。ここで待っておいで」

エルシアンは言ってバルコニーへ通じる硝子戸を開いた。丁度良い位置に植えられている木の枝を つたって下へ降りてしまうのだ。帰りも同じ道筋を通って自室に戻る。昔からこの順路で夜中、よく 池まで泳ぎに行ったものだ。夜の池は人の気配がなくて涼しい。

ナリアシーアが外してあったエルシアンの夏向きのマントを取った。夏とはいえまだそれは始まったばかり、夜露が降りれば肌に寒い。マントを受け取って腕に巻きつけ、エルシアンはもう一度ここで待っているようにと言った。

学院が休みに入ってからリュードと一度王都の市街へ「補講だから」という名目で遊びに行ったときに、彼女の為に買っておいた夏向きのレースのショールがある。

ナリアシーアにちょっかいをかけるんじゃありませんよと最初に彼女に出会ったときにエレイナに 釘をさされているから、祖母の前で女物の贈り物をぶら下げて歩けず持ってきていなかった。

それに見つかってしまえば「お祖母さまに」と差し出さないわけにゆかないだろう……それは勘弁

地上へ降りて一度自分の部屋を振り返れば、ほのかな明かりを背にしてナリアシーアが小さく手を 振り、声を立てずに何か口を動かしている。気をつけて、だろうか。

エルシアンは軽く手を挙げて夜の庭を急いで渡り始めた。

夜の蒼月宮はひっそりと静かだった。既に王族が部屋に引き取り私人としての時間を過ごしているはずで、一部の侍従や召使いを除いてはもう休んでいるに違いない。

蒼月宮に入るには太陽宮から続く門を通らなくてはならず、それ以外に出入り口はないから警備上の心配はない。だがやはり人の気配のない回廊の空気は昼間の解放感とは違っていた。植え込みの花たちや茂みがざわめく度に夜の意思のような物に包まれている気がして気味が悪い。さっさと用事を

済ませて帰ろうとエルシアンは足を速めた。

堅牢な足音が遠く響いたのはその時のことだった。エルシアンはその音に驚いて思わず振り返った。 。胸が突然激しく打ち始める。

規律正しいその音は次第に近くなってきて、エルシアンはつい後ずさった。

何か、怖いものが来る気がして仕方がなかった。見えぬ圧迫に押されてエルシアンはごくりと息を

飲み、それから自分の憶病さに面を歪めた。馬鹿馬鹿しいことであった。

遠い回廊の向こうに灯火が揺らめいた。太陽宮のほうから誰か来るのだ。それが人であったことだけでエルシアンは急な安堵にふれ、吐息を落とした。ぼんやりとした明かりがエルシアンの前で止

けでエルシアンは急な安堵にふれ、吐息を落とした。ぼんやりとした明かりがエルシアンの前で止 まる。王族の足元を照らすように灯火を持った侍従が膝をつき、エルシアンに深く頭を下げた。主人 はアスファーンであった。

相変わらずの落ち着いた低い声にエルシアンは頷き、物を取り に来ただけですからと答えた。

「兄上は……お仕事ですか?」

「今日は皇太后陛下のところと聞いていたが?」

が幾つか揺れたのを、見た気がしたからだった。

アスファーンは苦笑と共に曖昧に肯定した。良く見ると夜着の上から軽くガウンを羽織っているだけだったから、アスファーンも一度は休んでいたのだろう。ラジールがな、と呟いて溜息をついたから戦が始まるようだった。

ラジールというのはこのシタルキアの西を流れる大河で国境を別つ隣国で、領土と利権の問題はど

ちらかが滅びるまでは解決しないと思われた。それが河を越えて侵入してきたのだ。

もっともそんなことはこちらも頻繁に行っているからあちらを一方的に非難するのはおかしなもの

だとエルシアンは思う。だが、政治というのはそれを真顔で言うものだ。……自分が大人になって、

そういうことにためらわなくなればアスファーンの側で国政に携わることも出来るだろうか。実はエ

ルシアンの希望は国政に関わることではなく、この異母兄の信頼を得ることなのだ。

アスファーンが早く帰りなさいと促して自らも回廊の奥に消えていくのを見送り、エルシアンは自 室へ歩き出した。アスファーンの重い足音がやがて聞こえなくなり、灯火の僅かな蜜柑色が視界から

至へ少さ出した。アスファーフの重い定首がやかて聞こえなくなり、灯火の僅がな蛋相色が視界がら 消えると再び静寂が帰った。

だが、その静穏な闇は今度は安堵だった。不安が急に解け消えてなくなっているのにエルシアンは 気付いた。夜中の蒼月宮など出歩くものじゃないと心に刻みながら自室へ入る。

包みを衣装部屋から持ち出すと蒼月宮を後にし、丘の中腹あたりまで来て振り返る。目の端に灯火

案の定、アスファーンを照らしていたのと同じような灯が幾つか回廊を行き来している。ラジール

との戦役が開いたのを知って、主要な王族の招集がかかったのだろう。エルシアンには呼び出しは来ない。エルシアンの立場も握っている力も無いに等しいもので、今夜決まったことを明日の朝からの 王族会議で了承するだけだ。拒否など出来るものではないし、結局は多数決であるから無意味でも ある。

それが悲しいとは思っても、権力を手にしたいかというとそうでもなかった。自分の手に余るということは考えなくても分かる。自分はそんな器ではないのだ。

館へ戻るとナリアシーアは起きて待っていた。エルシアンは手にした包みを先に彼女へと放り投げ 、木をよじ登って部屋へ上がった。ナリアシーアは湯を沸かしていたようだった。外はまだ少し寒い

でしょうから、と言いながら茶をいれている。

差し出されたカップを取りながらエルシアンは自分からの包みを開けるようにナリアシーアに言 った。ナリアシーアは少し笑った。その笑顔の優しさがランプの明かりに馴染んで柔らかい。綺麗な

笑顔だとエルシアンは思った。美しいのは彼女の外側の造形ではない。内気がちではなるが優しくた おやかで、しなやかな芯の強さと気性の良さを持っていることが、真に美しいのだ。多分、もうこん

な女には巡り会えない。

包みを開けたナリアシーアが微笑む。エルシアンは茶のカップをおいて自分の送ったショールを手 に取り、ナリアシーアの肩にかけた。思った通りに良く似合う。元々持っている清楚な輝きにしっく りと収まった。

「ありがとうございます、こんな......」 「君の誕生日には会えなかったからね」

王族としての義務に基づき、この春は父王のシタルキア東沿海部の新港視察に随行している。ナリ

アシーアの生まれは春早い時節なのだった。

視察の随行から帰ってきてからその埋合せにと一度王都で会っているが、ナリアシーアは何を見て

も絶対に「欲しい」を言ってくれなかった。ナリアシーアに何かを贈るには押しつけるしかない、と

エルシアンは悟ったものだ。けれど喜んでくれるならそれでも良かった。彼女のことを今自分の持っ

ている何よりも大切に考えている。

でも輝くような美貌。

エルシアンはまばゆいものを見るように恋人を見つめた。出会った頃声をかける度に脅えて震えて

いた面影は既に薄く、微笑まれると胸の奥にざらめく喜びがある。

エルシアンはナリアシーアの隣に腰を降ろした。名前を囁きながら細い手首を掴み、引き寄せる手

で抱き込みながら軽く唇を触れ合わせる。ナリアシーアの唇はいつでもしっとりした甘みがあって、

める。冷えた唇を、血の気の薄いその体を、やわく溶かしてやりたくなる。膝を開いてエルシアンは その中へナリアシーアを収め、後ろから肩を抱く。

微かに冷たい。その冷たさに相反するように、触れていると体の奥から炎のようなものがかぎろい始

似合うよ、とエルシアンは言った。ナリアシーアは微笑んで自分の肩のショールに触れた。触れる

指の細さ、丁寧に手入れされた爪の優美さ、何よりもその手を持っている彼女自身の薄暗い部屋の中

もう付き合い始めて一年に近い。……急ぎすぎるのは良くないと今まで先送りにしてきたけれど、

そろそろいいかな......

ナリア、と呼びながら首筋へ唇を移動させると腕の中のナリアシーアがぴくりと緊張するのが分か った。駄目? そう聞くと、僅かな間があってから小さく首が振られる。エルシアンは内心でほっと溜

息を落としながらナリアシーアの細い体を背後から抱きしめた。彼女の髪にはいつでも花の香が入っ ている。その匂いにつられるように、どこまでも遠く落ちてもいい。今までの恋愛など軽いものに見

えてくるほど彼女を愛している。一生に一度の相手というなら確かにナリアシーアしかいなかった。

エルシアンは軽いキスを繰り返しながらナリアシーアの体に触れる。女の体はいつでも驚くほど柔らかい。ふわふわしている。

肩を掴んで正面を向かせると、ナリアシーアは苦役に耐えるようにぎゅっと目を閉じ、微かに震えているようだった。

エルシアンはゆるく、そして小さく吐息を落とした。女に触れるのが初めてでなくて本当に良かったと思った。

「怖い、ナリア……?」

ナリアシーアは首を振る。けれど少しも弛緩しない表情でそれが嘘だとすぐに分かった。エルシアンは今までの多少の執拗さを無理に手つきからそぎ落としてナリアシーアの頬を撫でた。

「いいよ、急がないから。もっと、君が……君が俺を好きになっ

てくれるまで、今のままで......」

そう言いながらエルシアンは我ながら我慢強いと内心で苦笑になる。実のところ、早く彼女を抱きたいのは確かだ。だがナリアシーアの気持ちを優先すると最初に言ったのも事実だったし、それを反故にしようとも思わない。

「嫌ではないんです、ただ……」

ナリアシーアはエルシアンの肩に顔を埋めるように呟いた。消えた言葉の先をエルシアンは正確に知っていた。

「不幸の魔女」。彼女をそう呼ばせるに至った巡り合わせの悲劇を、未だに忘れていないのだ。

エルシアンはいいよ、と努めて軽い口調で言った。落胆は確かにあるのだが、それよりも彼女を傷つけたくないという気持ちのほうが大きかった。

エルシアンの様子が沈静したのが分かったのか、ナリアシーアはごめんなさいと小さく言って、自分から唇をエルシアンに押し当ててきた。ついばむようなキスを繰り返し、これでも最初の頃よりは大分ましだとエルシアンは自分を慰めている。

ナリアシーアの美貌が引き起こした数々の事件と必ずついてまわる死の影を、彼女が自分のせいだと思い込んでしまったことが一番の不幸だが、思い直させるにはまだ努力が足りないということだろうか。気にするな、君のせいじゃないと言ってみても彼女にとっては気休めにしか聞こえないのももう分かっている。

ナリアシーアは恐れているのだ。自分とつき合う男は皆死ぬと、そう思っている。

「ごめんなさい、本当に、ごめんなさい……」

泣き出しそうな声にエルシアンは首を振る。ようやく波だちが落ち着いていくのが分かった。急がない。焦らない。その二つをまた心に刻もう。

エルシアンはいいんだ、と言った。自分でもふと笑みたくなるような、柔らかな声だった。

「君に無理強いはしないと言ったよ」

既に体をまさぐるのを止めていた手で彼女の背中をかき抱いてエルシアンは深く呼吸をする。やはり花香の匂いは鼻腔から侵入してきて脳裏を僅かに白く染めようとするが、それを押し殺した。「好きだよ、ナリア......」

エルシアンの呟きに答えるように、ナリアシーアがこくんと頷いた。からめる指の細い冷たさが切

ないと思った。しばらく椅子の上で抱きあいながらエルシアンはいつか、のことを考えている。

いつか、彼女の全てを手に入れて幸福の水に溺れる日のことを。その頃自分は大人になっているだろうか、何かの仕事をしているだろうか。アスファーンが何故だか自分を構ってくれるのを、期待してもいいのだろうか。もちろんそのための努力は払う気がある。エルシアン様と呼ばれたのはその時だった。

「あの……わたし、とても……好きです……」

本当です、という声の細さも愛しかった。頷いてエルシアンは彼女にまた口付けをした。ついばむ唇のささやかな冷たさが衝動を僅かに引き止めている。体に触れたい、自分のものにしたい。だが、それはまだ「いつか」の物語だった。

突然固いものの音がしてエルシアンは体を放した。瞬間的に身が竦んだのだった。僅かの間をおいて、それが風に揺れた枝が寝室の窓を叩いているのだと気付く。ほっと落とした溜息は、心底からの安堵であったために却って本人をぎょっとさせた。

エルシアンは自分の身に巣喰い始めているこの微小な、対象の良く分からない不安をかき消そうと ナリアシーアの体を強く抱いた。彼女の肌から立ちのぼる甘い香りだけが、それを忘れさせてくれる ような気がした。

そして次にエルシアンがその音に気付いたのはそれから更に三日後、――運命の変わった夜。

扉を叩く音がしたような気がして、エルシアンは顔を上げた。

既に夜は深く、蒼月宮に放してある小鳥たちも静まり返っている。家族を持たない王子たちの部屋 は皆同じ作りをしている。先代、先々代と比べて父王は極端に子が多く、部屋を用意するために増築

するよりは客間を転用してしまったせいだ。だから王子であるといっても部屋の作り自体は簡素で

ある。居間、書斎、中庭に寝室。寝室には大きめの衣装部屋がある。

廊下

エルシアンは耳を澄ませた。今彼がいるのは自身の書斎、蒼月宮の回廊につながる扉までは、内扉 を二つ隔てている。特に物音もしないようだったが、エルシアンは首をかしげて立ち上がる。

に一番近い居間に出てからエルシアンはしばらく耳の痛いほどの沈黙に神経をさらす。確かに自分の

部屋の扉を叩く音がした気がするのだ。気のせいかと首をかしげた時、音がした。やはりそれは扉を 叩いているのだった。その音を聞いた瞬間、エルシアンは何故かぎくりと動きを止めた。

出てはいけない。そんな本能に近い声が止めているのが聞こえる。どくんと一つ大きく心臓が鳴っ て痛い。立ちすくんだままで扉の方向を見つめていると、もう一度、静かにそこが叩かれた。

エルシアンは息を飲み込んだ。喉がひりつくようだった。

こつこつという音がまだ続いている。迷い迷った挙句、エルシアンは扉に足を向けた。もし何かが あれば大声で近衛を呼べばいいだけだろうと考えたのだ。

細く扉を開くと、その前に立っている人物が誰だか分かった。嫌な不安が急に消えた。エルシアン

り鍛え抜かれて大きい。エルシアンにはない、強い意志と自負が兄を押しあげている。 アスファーンはエルシアンの様子に微かに笑うと奥へ行ってもいいかを目で聞いた。エルシアンは

はああ、と気の抜けたような溜息を漏らして扉を大きく開いた。するりと侵入してきた兄の体はやは

頷いてから扉をそっと閉め、先を行く兄の背を追う。こうしていつまでもその背を追うことができれ ば幸福だろうかと考えると何だか気恥ずかしい。

アスファーンがこの部屋に来るのは初めてだった。エルシアンは彼が自分の居場所にいるという怪 訝な違和感を、次第に押し上がってきた昂揚で握りつぶす。アスファーンはいつでも彼の目標であり

、指針であった。エルシアンに無いものを持っていて、その輝きで眩しい。 アスファーンも珍しげに部屋の中を見ていた。殺風景なのに驚いたのだろうかと思うとエルシアン

は羞恥に似たものに俯く。王族の部屋は大方その母方の親族を中心にした献上の品々で溢れていて、

骨董や美術品や豪奢な調度で飾られているのが普通だ。

アスファーンは自身のマントを外すと長椅子の背にかけ、腰を下ろした。エルシアンは何か飲むも のでも用意させようかと侍女たちの控室に通じる呼び鈴の紐に手を伸ばす。紐に手が触れようとした

とき、後ろからアスファーンがエルシアンを呼んだ。 振り返ると、アスファーンはゆっくりと首を振りエルシアンを手で招いた。人を呼ぶなと言われて

いるのに気づいてエルシアンは頷き、自分で酒とグラスを出した。時折はリュードとここで飲むから 置いてある。

手早くそれを並べながらエルシアンはそっとアスファーンを窺った。何をしに来たのだろうという のがまず最初だった。アスファーンは無駄なことをしない。いつでも彼のすることには筋と道理が

ある。こんな夜中に一人で、随従も連れずにエルシアンの元を訪れるなど確かに異常なことであった

。それを聞こうかどうしようかと迷っていると、アスファーンが不意に言った。

「……一昨日のことだが」

エルシアンは不思議な顔つきになる。一昨日はアスファーンに剣技の指導を受ける約束をしていたが、ラジール侵攻の件で兄は多忙を極めていたからエルシアンから断った。アスファーンもすぐに 頷いていたから同じことを考えていたのだろう。

一昨日の王族会議の席でラジールに対する施策の大まかな方針が決定したが、一報が入ってすぐに 布告文を書いたのか、アスファーンは既に声明の草稿の了承を父に得ているようだった。

結局、王族会議といってもエルシアンを含めて年少に属する者たちは追認の署名を入れるだけで何もない。父が自ら戦場に赴くのは珍しいが、これは先手を取られたことを挽回するための鼓舞策といってもいい。父が行くということならば、万一のためにアスファーンが王都に残るのも確定だった。

エルシアンはそんなことを思い出しながら、一昨日アスファーンと交わしたはずの幾つかの会話を 思い出そうと首をひねる。だが、特に何か思い当たるものもない。困惑して異母兄を見ると、ア スファーンは唇の端で笑った。それは、失笑と言うべきものだった。その笑みの暗さにぞっと背中が

粟だったのが分かった。 エルシアンは思わず腰を浮かしかける。父王の生誕の儀のときに感じた嫌な黒い予感が不意に肌に

張りつく。それを払いのけるように、エルシアンは兄上、と大きな声を出した。

「あの、何か……」

いや、と答えるアスファーンの様子は変わらない。ただこみ上がってくる笑みを押し殺すのに夢中に見える。エルシアンは今度こそはっきりとした悪い予兆を感じ取った。何かがおかしい。

アスファーンがゆっくりとエルシアンの出した酒を口に含んでいる。目上が飲んでいるときに自分 だけ無視する訳にもゆかず、エルシアンはつき合うように酒を舐めた。普段は好きな酒が、この瞬間 やけに舌に苦かった。

アスファーンは本当におかしそうに唇を震わせている。その様子が危険極まりない獣の余裕に見え てエルシアンは、少しづつ迫ってきた恐怖を予知する草獣のように、身をアスファーンから遠ざけた 。どうしていいのかわからない。アスファーンの暗く沈んだ笑みをあしらってしまうだけの度胸も

無かったし、流して勝手なことを喋ってしまうことも出来なかった。

「兄上……あの……」

とにかく今夜はここから帰してしまおう、とエルシアンは恐る

恐る口に出す。

「何かご用事でしたら明日、太子宮か公用私室のほうへ伺いますけれど……?」

公用なら執務室で、私用ならアスファーンの居宮でという提案をアスファーンは承知も却下もしなかった。エルシアンの脅える笑みを浮かべて小さく喉を鳴らし始めている。

エルシアンは次第にはっきりした恐怖を覚え始めていた。何かが確かにおかしい。絶対に変だ。

兄上、と声を上げるとふとアスファーンが笑みを収めてエルシアンを見た。正面からあった視線の 強さに射抜かれるようにエルシアンは凍え固まった。

「エルシアン、私を好きか」

質問の意図が掴めずにエルシアンは一瞬ぽかんとする。何を聞かれているのか分からない。好きか

、というのはどういう意味なのだろう。困惑しきってアスファーンを見るが、異母兄の視線は怖いほ どに真剣で、遊びを許されるものではなかった。

「あの……好き、というのはどういう意味で……」

エルシアンは口ごもる。基本的な箇所が噛み合わない会話だと、自分でも分かっていた。アスファーンはゆるく首を振った。それに答えるつもりはないようだった。エルシアンは更に強く激しくなってくる恐怖の風音を耳奥にやり過ごしながら俯いた。アスファーンは確かに優しげな人格者ではなかった。いつでも厳しい空気を漂わせていた。だが、こんな相手をなぶるような威圧だけは感じたことがない。何かが変だ、――今、自分は食われるのを待つ兎のように無防備なのかもしれない……

その考えが急に上がってきてエルシアンは立ち上がりかけた。それを止めるようにアスファーンが 先に立った。アスファーンはエルシアンよりも頭半分ほど背が高く、体格は遥かにがっしりとして おり、眼前に立たれると竦むような圧迫感があった。

アスファーンがゆったりと低いテーブルを回ってエルシアンの前に立った。エルシアンは気後れと 怯えの判別のつかないものについ後ずさった。

一怖い。とても怖い。身に降りかかる危険に小さな獣のように震えている。何かおかしい。そし て怖い。アスファーンはこんな嫌な笑い方をしただろうか。

あの、と言いかけたときだった。首筋を突然何かが這ったような感触にエルシアンは思わず体を揺 らす。一瞬遅れてアスファーンが自分の首筋をゆっくり撫でたのだとわかった。

「何を……」

「さて、どうするか......」

「兄上、あの、」

エルシアンは触れられた場所を自分の手で隠しながらアスファーンから遠ざかろうとじりじり後ろ

へ下がる。だが下がった分だけアスファーンもその差を埋めて、ほとんど向き合うような格好になっ た頃には背に寝室へ通じる扉が突き当たり、エルシアンは微かな焦りを感じる。

呟きがした。エルシアンは視線を上げて目の前にたたずむ兄を見た。

アスファーンの口元には相変わらずどこか歪んだ黒い笑みが張りついていたが、目が少しも笑って

などいないのにエルシアンはやっと気付いた気がした。

つけられる。軋みがぴりっと骨を伝い、脳裏に響いた。

とにかく逃れようと身をそらすとアスファーンの腕が背後の扉に突き刺さるようにしてそれを封 じた。エルシアンの膝が不意にがくんと落ちた。全身が怖がっているのだった。扉にもたれてずり落

ちそうな体をアスファーンの腕が支えた。 捕まれた二の腕が痛い。エルシアンは呻いてそれを放してくれるように兄の手を押しやろうとした

その手が捕まれてエルシアンははっとする。反射的に空いた手がそれを降り払おうとするが、それ が途中で止まった。アスファーンがそれをも手首を掴んで止めたのだった。腕力の勝負は分が悪か. った。エルシアンの渾身の力など問題にもならないほど呆気なく、両手首が吊り上げられて扉に押し

様子がおかしいのは分かる。だがアスファーンの全てを否定して叫び声をあげるにはエルシアンに はまだ覚悟が足らない。そして、恐らく足らないことを承知されているのだった。

だが、声をかけることで何とか好転しないだろうかと思った甘い期待はすぐに打ち砕かれた。

エルシアンは微かに悲鳴を喉で鳴らした。声にさえ、ならなかった。ぬるっとしたものが首筋を撫 でた。そこを唇が這ったのだと理解できるまで茫然とした時間は長かった。

なに、と言おうとした唇を塞がれて息苦しさにエルシアンは呻く。呼吸を求めて上向きに喘いだ

瞬間、ぬめらかなものが歯列を割って侵入してきた。

それが好き放題に口中を蹂躙するうち、エルシアンの口端から唾液が一筋落ちた。水滴むず痒さに

エルシアンの神経はやっと現実を認識した。自分が今、何をされているのかを。 エルシアンは自分に覆い被さるアスファーンを振り切ろうと身をよじった。唇が離れる。

お互いの絡んだ唾液が細い糸を引き、すぐに落ちた。

「なに、兄上、いったい、何を……」

動転というよりはひどい眩暈に近い感覚が脳幹を揺すぶっていて、あまりのことに一瞬怒りも恐怖

もわいてこない。アスファーンは相変わらず笑っていた。その笑みの穏やかな暗さにエルシアンは微

かに体が震え出すのを分かった。認識した途端に震えはあらわになった。おこりのように、膝が立たない。アスファーンはますます低く笑っている。その笑顔が教えてくれる。彼が本気で自分を手に入れるつもりでいることを......!

エルシアンは通りすぎた激しい眩暈をぎゅっと目を閉じてやり過ごした。何故、と声を出すとア スファーンは嫌な形に固まったまま笑っている唇から答えを囁いた。

「――愛している、私の......」

アスファーンは言いかけて止め、その代わりにもう一度唇を寄せてきた。エルシアンは顔を背けた。アスファーンの目には愛情を信じるための何もない。情欲であるというならましだとさえ思う。瞳に見えているのはこちらを傷つける意思そのもの、それがむら燃えているように見えるのはアスファーンが今の状況を快楽の前兆として引き延ばしているからだ。

遊ばれているのだと思うと目の前が暗くなるほどの絶望感が湧いた。アスファーンにとってエルシアンの抵抗などは余興でしかない。上背も体重も、遥かに兄のほうが上回っていて、差分で押さえ込めるはずだ。自分が気付くくらいだからアスファーンは当然知っているだろう。

思いを逸らしたのは一瞬だったが、その間にアスファーンの手が自分の上着の中へ潜り込んでくる 。体を扉に押しつけながら肌を手に馴染ませるように蠢いている嫌悪感を喉で呻き、エルシアンはア スファーンの肩を思い切りつき飛ばしてどうにか腕の中からまろび出た。

よろめく足で懸命に走ろうとした瞬間景色がぐるりと回り、床に身を打つ。足を掛けられて転んだ のだった。起き上がろうとした刹那、髪が捕まれて首が後ろへ反った。

ぐ、と喉が絞られるように鳴った。上着の襟にアスファーンの手がかかって引き上げられる。喉に 襟が食い込んで呼吸ができない。何かいう代わりにエルシアンは手を振り回したが、自分の真後ろに いる人間に当たるはずはなかった。

「い、いや、やめ……」

声を絞り出すと体が仰向けに反転させられ、口を手で塞がれた。

早そうだった。エルシアンは呼吸を深く吸った。

他人に聞かれることを望んでいないのを悟り、エルシアンは更に大きな声を出そうとする。深く呼吸をした瞬間だった。

突然息が詰まった。喉が絞められて、気管が潰されそうだ。何かを叫んだが声にはならず、かすれた呼気音になった。エルシアンは口を開けるが空気は一向に恵まれなかった。

目の前が白く霞む。鼻腔に血が集まり始めて痺れになる。エルシアンは必死で手を泳がせ、宙へ腕

を伸ばす。脳裏に薄くもやがかかり始め、すっと気が遠くなる…… 不意に首を絞めていた大きな手がそこを離れ、エルシアンは反射的に喉に手をやりながら肩で呼吸

をする。咳き込んでいたエルシアンの耳に金属の音が小さく聞こえた。アスファーンが寝室の扉を開 いたのだ。

エルシアンは顔を歪めた。アスファーンは本当に、本気だ。まだ痛む喉を押さえながらエルシアンは出来る限りに素早く起き上がろうとした。

扉を開けるか、侍女の呼び鈴の紐を引くか。どちらにしろ他人を呼ばなくては。声を出したほうが

それをアスファーンの手がまた塞いだ。そのまま床に頭を押しつけられ、アスファーンの手が鎖骨

を撫でて肌を下へ下へ、下がっていく。エルシアンはもがき、押しかぶさってくる兄の肩を掴んでも どそうとするが体重の差もあるのだろう、上からなくなる気配がなかった。

エルシアンは首を振る。それでも剥がれない大きな掌に噛みつこうとした。だがそれも唇の動きで察したのだろう。一瞬の差でアスファーンが手を離した。エルシアンは思い切り声を上げようとした。口から手が離れればどちらでも良かったのだ。

――次の瞬間、みぞおちに重い衝撃がきた。エルシアンは呻いて身を折り、床に崩れた。一瞬おいて胃の中が煮えたようにたぎり上がってくるのを肩全体で殺しながら口を押さえていると、震えるほど低い声が耳元でもう一度、愛していると囁いた。

首を振ろうとした体からふっと自重が消えた。アスファーンが彼を抱き上げたのだった。もがこうとしてもまだみぞおちの苦しみが熱く、体の神経を鈍く麻痺させていて体がうまく動かない。

寝台の上に放り投げられてエルシアンは衝撃で息を詰まらせる。肺が軋んで一瞬空気を吸えない。 両手首をアスファーンが片手でまとめ、エルシアンの頭上で寝台に押しつけるように固定した。エル シアンは身をよじる。

やめて、と言った声は恐怖か動揺かで激しくぶれ、小さかった。

アスファーンはそんなことには頓着せずに、開いた片手で器用にエルシアンの着衣を剥がしていく。 露になる部分が増える度、自分の中の何かを引き剥がされて踏みにじられている気がしてエルシアン はやめて、といいながら足をばたつかせたが、あまり効果はなかった。アスファーンの手が下衣のベ ルトにかかる。

背を恐怖が真実覆ったのはその時だった。やめろ、とエルシアンは掠れ声で叫んで腕を振り切った。勢いのついた手が強くアスファーンの首を叩いた。一瞬弛んだ力の下から這い出ようとしたとき、 耳の近くで激しい破裂音がして顔から寝台に打ちつけられ、頬がやけつくように熱くなった。口の中

でじわりと血の味がした。 何故、とエルシアンは言った。愛などという嘘を信じる気は毛頭なかった。アスファーンはそれには答えなかった。手首がまた掴まれる。強い力に負けたように首から下に力が入らない。愛している、という声が三たび降りそそがれた。

もがき、苦痛にのたうち、声にならない悲鳴を絞り出しながらエルシアンはアスファーンの所有物になった。

.....エルシアンはほの暗い早暁の底辺に一人、座り込んでいる。

何かに縋りたくて伸ばした指先がふと明かりのランプに触れて反射的に手を庇った。何故、と小さ く呟く。

(愛している.....)

そんなのは嘘だ。それは考えることでさえなかった。

体はこの夜の出来事を全て押し出そうとするかのように吐き気を訴えてくる。それを中庭で解放し

、部屋に戻ると床に転がった。

寝台には戻れなかった。どうしても。

床に押し当てていた耳に靴が床を打つ音が聞こえた。エルシアンは跳ね起き、床に沈んだ。足音の

んな現実を伴ってくるなどと考えてもいなかったのだ。 足音が近づいてくる。次第にこちらへ来る。やめろ、とエルシアンは喉を鳴らして起き上がろうと

連れてくる悪い予感はあった。数日前から妙に追い詰められているようで怖かった。だが、それがこ

した。 だが体は正直だった。長く明けない夜の残照が未だに筋肉に正常な力を戻してくれない。

足音がする。こつこつ一定の間隔をおいて寄ってくる。よるな。 エルシアンは呻く。こっちへ来る

な──来ないで。けれど懇願も抵抗も役に立たなかった......

う、と喉が詰まった。また吐き気が上がったのだった。固形物は殆ど吐いているから酸味だけが押

し寄せてくる。それを必死で押さえていると寝室の扉が叩かれた。 エルシアンの心臓がぎゅっと締まった。返答は出来なかった。恐怖で竦んで唇さえ動かない。怖い

。恐怖に彩られ始めたこれから先の時間を告げるように扉が鳴り続けている。

エルシアンは震えながら床に顔を押しつけ、耳を塞いだ。聞きたくない。何も聞きたくなどないし

、何もしたくなかった。

急に肩に手がかかり、エルシアンはそれを思い切り打ち払った。 触るな、と怒鳴ってから喉を塞ぐ空気の固まりを咳にして押し出す。もう一度肩が揺すられて、エ

いた。エルシアンの珍しい粗暴さにリュードは顔をしかめた。

ルシアンは癇性な叫びをあげてその先の体をつき飛ばした。溜息がした。 「なに、お前何なの? せっかく帰ってきてやったのに最初の挨拶がそれ? 犬だって三日も餌をやれ

ば尻尾を振るけど?」

呆れと苛立ちが半々に混じった軽い声がした。エルシアンは恐る恐る目を開いた。つま先から次第 に視線を上げて、最後に行き付いた顔にエルシアンは吐息を漏らす。彼の唯一の侍従である友人が不

機嫌にたたずんでいた。

「リュー.....」 エルシアンはゆるくその名を呼び、急激な安堵で深く呼吸をした。なにやってんだ、という声と共 に体が起こされた。寝るならあっちだろうと手を引かれ、エルシアンはついそれを乱暴に振りほど

エルシアンはリュードをそもそも部下として扱っていない。それでも許されているのはエルシアン

が利権から程遠い位置にいるからだが、リュード自身もエルシアンを友人だという認識でいるだろう

- 。友人から粗末に扱われて怒っているのだと分かった。
- 「ちょっと暑かったから。何でもない、少し……休みたいから一人にしてくれないか……」
- エルシアンはそんなことを言って大丈夫だというように起き上がって見せる。自分の頬がぴくぴくと動いているから笑って見せているに違いなかった。だがリュードはいつものように笑みを返したりはしなかった。ますます面を歪めてエルシアンの前に視線の高さを合わせて膝をつき、まっすぐに見据えてくる。
- 久しぶりに会うリュードは相変わらず造形が良かった。赤茶けた猫毛を後ろでまとめただけでも、 優美で繊細な顔立ちとそれの醸す気品が彼をいっそう端麗に見せる。
- それが眉を潜めると酷く嫌そうな顔になるのを本人も分かっているだろうが、エルシアンの前でリュードは自分の感情を誤魔化さなかった。彼は何かを面白くない。
- いや、不機嫌だというよりは真剣さのほうが勝っているだろうか。そこに至ってエルシアンはやっとリュードの視線が自分の顔に当たっているのに気付いた。
- エルシアンは慌てて触れるとまだ痛い箇所を手で隠した。唇の端が少し切れている。顔、と言われて咄嗟に何でもないと言ってしまったのは、この夜の出来事を誰かに告白するなど出来なかったからだ。
- 「何でもない、じゃねぇだろ? それ、どうしたんだよ。自分でやったとかいうヨタなら信じないからな?」
- エルシアンは首をようやく振る。誰かに知られると思うとその圧迫で胸が詰まる。体の中に抱え込んだ秘密の重さで潰されてしまいそうだ。
- 秘匿が尚更、自分の傷を深めることは分かっているが、口に出した瞬間にそれは悪い夢から修正のきかない現実へと転化する気がして怖い。今ならまだ夢だったと思えるだろうか。
- アスファーンの手が自分の肌を滑ったあの感触、無理やり開いた体の痛み、それから……思い出されること全てがぼんやりした遠景であるのと同時に、くっきりと感触を伴って蘇る記憶でもある。エルシアンは目を閉じた。気分が悪かった。

リュードはしばらくエルシアンの肩を揺すっていたが、友人から何も聞き出せないと諦めたようだ った。

とにかく、と腕が掴まれる。エルシアンはよせ、とそれを振り払った。アスファーンに捕まれたの と同じ位置だった。それだけで一瞬体が震えるのが分かった。これも反射と言えた。中天の月が傾く

だけの時間で自分の体の中には別の生き物が棲んだ。

泣きわめき、叫びながらも暴力に脅えて膝を折る卑屈なものが。

何だよ、というリュードの声がした。この声はもうはっきりと不快を示していた。

エルシアンは怪訝に友人を見て、それから自分が彼の手を半ば叩き返すように打ったのだと気付

に関係ないのだ。

「ごめん……あの、俺、本当に、気分が悪……」

るのだが、友人として同じ地平に立っていた。

ぽんぽんと軽く叩く。

言いかけてまた吐き気が襲ってくるのにエルシアンは肩を震わせた。リュードの険しかった雰囲気 がそれで甘く緩んだ。仕方のない奴め、という苦笑気味の呟きがしてリュードはエルシアンの背中を

嫌いだったし、エルシアンもリュードのことに口出しすることは少なかった。本来は侍従と主人であ

いた。エルシアンは顔を歪める。 リュードにあたってはいけない。彼は関係がない――そう、本当

エルシアンはまた首を振った。他人の手が触れる度にそこから火がつくように熱く、そして同じ箇

所を触れた手のことが皮膚の上に波立ち現れる気がした。

リュードが体を引き上げて寝台に戻そうとするのを、エルシアンはやめろ、と強い声で静止した。

リュードはふん、と唇を歪めた。もともとリュードは自分のすることに注文をつけられるのが酷く

「人の親切を断ってるとそのうち誰も助けてくれなくなるってね。ま、いいけど。気分悪いならどっ

リュードはぐるりと部屋の様子を見回して口元に曖昧な笑みを浮かべた。

「お前、女連れ込んでたろ? 換気しとけよ、気配がするぜ」

リュードはくつくつ笑っているが、エルシアンは血の気が引くのを感じた。濃い臭気に慣れたのは

かで転がるのが一番いいよ。寝台が嫌なら向こうの長椅子にいく?っていうかさ」

自分だけで、他人にはまた違うのだと思うと尚更怖くなる。 エルシアンの表情がこわ張ったのをリュードは素早く察知して何だよ、と薄笑いのまま肩をすく

めた。

「いいじゃないの、どーせお互いの素行は知ってるわけでしょ?今更繕わなくたっていいさ。あの

女じゃなけりゃ、俺は歓迎」

あの女というのはナリアシーアのことだ。リュードはナリアシーアにまつわる暗い噂を最初から知 っていて、彼女を嫌っている。

絶対に名前では呼ぼうとしないし、あの女と言うときの口調は激しい。エルシアンがナリアシーア と想いを通じたときもひどい喧嘩になったものだ。

リュー、とエルシアンは低く言った。気分もまだ回復しなかったせいで声は自分でもぎくりとする

ほど不機嫌だった。リュードは何も聞こえなかったように大きく伸びをすると、中庭に通じる硝子戸

を開け放した。

外を覗いたことでリュードはそれに気付いたようだった。

「ああ、吐いてるのか? 馬鹿だな、本当に具合が悪いならちゃんとそう言えよ。寝台戻れエルシ、医 者と侍女を呼んできてやるから。夏風邪は馬鹿がひくんだぜ、知ってるか?」

そんなことを口にしてリュードはエルシアンの腕を取った。エルシアンはそれを再び突き放した。

誰かに体を触られることが不快で仕方がなかった。リュードとアスファーンがまるで違うのを頭で理解していても、抑えがきかない。

リュードは何だよ、と低い声になった。彼もそろそろ苛立ちが募ってきたようだった。

「いいからどこか下の柔らかいとこで横になれよ。もうすぐ学院も新しい学期が始まるし、長引くと 王城から出られなくなるよ?」 エルシアンはやっとそれに頷いた。

ずっと部屋にいるのは恐ろしかった。アスファーンとのことを嫌でも思い出すし、足音全てが兄のものに聞こえる。どうしようもなく神経が過敏になっているのは承知しているが、どうにも抑えが効かなかった。

リュードの肩に怖々と掴まり、エルシアンは居間の長椅子まで歩いた。長椅子に崩れるように横になった様子が思っていたよりも酷く見えたのだろう。リュードが衣装部屋からエルシアンのマントを持ってきて上からかけた。

ありがとう、と呟くと額が軽く弾かれ、次いで手のひらが押し当てられた。どうやら熱をみているようだった。熱はないよ、というとリュードは首をかしげた。

「そう? 何だかちょっと熱っぽいような感じもするけどね。ま、そっちは専門に見てもらおうな。呼 んで来るから待ってろや」

医者、と悟ったその瞬間に顔がひきつったのが分かった。

「医者は呼ぶな!」

跳ね起きて叫ぶとリュードは眉を寄せた。

「だって、薬くらい出してもらえば……」

「いいから呼ぶな、絶対に嫌だ!」

怒鳴り立ててエルシアンは急な動作のせいの眩暈に額を押さえた。ほら見ろ、とリュードの苦笑が した。

「まともに動けないくせに。いいから寝てろ、すぐ戻って……」

「嫌だって言ってんだろ!」

リュードの言葉を遮ってエルシアンは叫んだ。鼻白んだ顔でリュードが黙った。エルシアンは嫌だと繰り返した。まだ体中にアスファーンの刻んだ、彼が愛情だと言い張ったものの痕跡が残っているはずだった。それを他人に見られたくない。絶対に嫌だ。

「エルシ」

「嫌だって言ってるんだよ! 余計なことするな!」

「……じゃあ、夏風邪で死ぬ馬鹿になっちまえ」

リュードの声が低く、そして投げやりに吐き捨てられた。エルシアンは顔を上げる。リュードの端

麗な美貌は苦々しく歪んでいた。馬鹿野郎と怒鳴ってリュードは背を返し、それから思い出したよう

に振り返った。

「お前、今日、変!」

確信を切り込まれてエルシアンは青ざめたままで鼓動が大きく一つ鳴ったのを聞いた。血の気がひく音がした。リュードはふん、と頬を痙攣させて乱暴に扉を開けて出ていった。

エルシアンは長椅子に横たわり、マントを顔まで被って目を閉じた。その時初めて、目の奥が滲んだ。

中央学院の後学期が始まった。一年を二月から六月までの前学期、八月から十二月までの後学期に 分けており、それぞれ二ヶ月間の休暇をはさむ。

基本的には王族は蒼月宮の中に専門の学問所を所有しており外へ出なくてすむのだが、エルシアンは外の学び舎のほうが肌に合った。異母兄弟たちとあまりに歴然とした隔たりがあって、そこに居づらかったのも確かだ。

戻ってきた日常の通りにリュードと共に王宮の門を出る。学院までは市街まで降りてからいつも辻 馬車を拾った。

歩いてもいいのだが、そうすると多少早起きを強いられる。エルシアンはそれでも構わなかったが 、リュードのほうは明らかに夜型だったから合わせているのだ。

リュードは馬車の中でうつらうつらしている。その顔を見ながらエルシアンは微かな苦笑になって、彼の滑り落ちた手を戻してやる。一瞬薄く目を覚ましたリュードが視線だけで礼を言ってまた目を 閉じた。喧嘩はするものの結局は仲が良かったし、曖昧なことは流してしまうことが多い。あの朝の

エルシアンはそれにほっとしているのを自覚している。あの後結果として熱を出し、本当に数日間 寝込んでしまった。

リュードはそら見ろとひとしきり小言を浴びせた後で、熱が引くまでは側にいてくれた。

侍従はあまり主人と離れないものとされているが、リュードは気の向いたときにエルシアンの相手をするくらいで普段はどこかに姿をくらましていることも多い。リュードが数日間エルシアンと共にいることは非常に珍しいが、それはきっとあの朝の喧嘩のせいだったろう。

エルシアンと同じように、彼も気にしていたのだった。

出来事もそうやっていつのまにかうやむやな記憶に紛れていった。

……そして、エルシアンは気にしている。リュードが側にいることで昨夜までは落ちついて目を閉じることができた。だが回復して学院に通い始めたら違う。本当に日常へ戻っていく。リュードはまた自分の側を離れて好きなように始めるだろう……

エルシアンは微かに身を震わせた。最近何をしても手についていないと皇太后に叱られたばかりだが、手につかないのでなくて頭の中が一つの事由で飽和しているのだ。

——何故。

何故アスファーンは突然自分のことを襲ったのだろう。あれから怖くて異母兄のいる場所へ近寄れないが、その疑問だけがずっと自分の中で回っている。あの時兄が言いかけた、「一昨日」とは何のことだ。

だが、いくら考えても自分の中に思い当たることはなかった。聞いて教えて貰えるなどという甘い 期待は既に抱いていない。エルシアンは溜息になる。

膝が軽く叩かれたのはその時だった。眠っていると思っていたリュードの瞼が開いて、薄氷色の瞳が自分を覗いている。

エルシ、とまだ寝起き気味の掠れた声でリュードが囁いた。

「なぁ、お前何かあっただろう? 最近絶対変だよ……今だって、すごい顔して前、睨んでた……」エルシアンは首を振った。他人には絶対知られたくなかった。

どんな顔をしてどんな風に言えばいいというのだろう。自分でもまだ夢だったと思いたがっている 、あの現実を。

リュードはエルシアンの返答に不満気にゆるい溜息を吐いた。今までもお互いに、秘密はあったが 隠し事はしなかった。それは二人の間の不文律に似ていたが、それを自ら破ろうとしているのも分か っている。

だが、唇が動かない。どうしても駄目だ。

けれどアスファーンも怖い。今度一人になった夜に足音が廊下の端に響いたとき、自分はどうしたらいいのだろう。泣いてわめいて許しを請うのか。逃げ回って最後には暴力の前に屈するのか。

どちらにしろ、結末は決まっているように思われた。

――あの苦痛。体を裂かれるその痛み、それよりもひりつく胸を絞られるような息苦しさと苦しみをどう処理したらいいのだろう。このままではいけないことだけが分かっていた。

エルシアンはリュードを見た。アスファーンもこの事実が他人に知られるのを歓迎していない。声を出そうとしたときに口を塞がれたのが証拠だ。リュードがいたこの数日間の凪を、エルシアンは思い返す。彼が側にいれば違うだろう。 「リュー、頼みがあるんだ」

言いながらどうやって理由をこじつけたらいいのかをエルシアンは考えている。リュードを動かす には理由、そして貢ぎ物だ。

には理由、そして貢ぎ物だ。 「あのさ……あの、この前のこと……朝の……あのときの女、しつっこいんだよ。しばらく夜は一緒 にいて欲しいんだけど」

リュードはふーん、と宙を睨んだ。 「どーしよっかなぁ」

「どーしよっかなぁ」 即座に断らなかったときはリュードは承知する気がある。エルシアンは自分の指にはまっていた銀

「俺の家のことは知ってるだろ?」

はリュードだけだった。

細工に金の蛇をはわせた指輪を抜いた。それをリュードの手のひらにぽんと落とすと何事もなかったようにリュードはそれを自分の指に押し込んだ。 リュードの造形はどこもかしこもきめが細かくてほっそりしている。その指輪はエルシアンが自分

の金で買ったものだが、エルシアンよりも良く似合っていた。 いいよ、とリュードは言った。エルシアンは安堵の溜息を心中で長くついた。だけど、とリュード が不意に低く暗い声を出した。その声は彼の中では珍しいほど真剣だった。

「……ラジールとの戦端が開いてるだろ? あれ、長引くとちょっとまずいかもしれない」「まずい……?」

エルシアンは頷く。リュードは男ばかり七人兄弟の末子だが、彼だけが庶子だ。父親は近衛を務め

ていたことがあり、他の近衛騎士たちやその子供たちの群れの中で二人は知り合った。 近衛騎士の子ならば将来は親の跡を継ぐこともあるし、平民層出身でも剣の腕を認められれば騎士 位を与えられることもある。

エルシアンは王族である異母兄弟や叔父たちには馴染めなかったが、騎士たちとはすぐに合わせてやっていくことが出来た。

リュードはその中でも存在が特殊だった。掴み所がなく気紛れで、しかもしばしば女性がらみの問題を起こす。庶子でも長男であれば立場が違うこともあるが彼は一番下で、上に嫡子の兄が六人もいたから家督とは関係がない。だが父親である騎士が領地から離れて赴任するときに連れてきたの

その理由ゆえに、エルシアンはリュードを侍従に召しあげた。

――本妻、つまりリュードの義理の母と半分血の繋がった兄弟たちからの執拗な虐待と日常生活で の完全なる無視。父親は陽気で気のいい男だったが、強権者ではなかったのだ。

兄弟たちからの苛めが相当リュードの心に深い溝を掘っていたのは間違いがないとエルシアンは

思う。六人いたはずの兄が知り合ってから次々と呪いにかかったように亡くなっていくが、どの兄が

死んだときもリュードは冷笑を鼻で鳴らしていた。

それが複雑そうな顔になったのはつい四ヵ月ほど前の事だ。既に五人が亡くなり残ったのが後一人 になったことで、微かに不安を漏らしている。

(まずいよ。奴までくたばったら俺、家に戻らなくちゃいけないかも。あのババァもついでにくたばるなんて都合のいいことはないだろうしなぁ……)

まずい、という言葉はその時の記憶を呼び戻した。お兄さんのこと、と聞くと渋い顔をするがそれが返答だった。リュードの実家はシタルキアの東端に近い地域だが、有事の際に駆り出されないと断言できるほど現地に遠くない。むしろ失った戦力を補強するという選択を父が下したならまず確実に

招集がかかるだろう。現地まで馬で三日から、というところだ。 「親父は戦争嫌いなんだよな。戦場には出たがらないし……近衛だってさ、くじで当番に当たったの もそうだけど、近衛になれば赴任期間中は従軍しなくていいって思ったんだぜ? たださぁ、残ってる 野郎はちょっと体弱くてさ。その分性格は歪んでたけど、あんなのが戦場に出たらあっという間に

これ、ね」 リュードは首の前で横線を引いた。異母兄を案じているのではなくて、家に呼び戻されるのが嫌な のだ。

エルシアンはそれを分かっているが、そのことは触れずにそうだね、と頷いた。リュードは実家に はいない方がいいと思ったからエルシアンはリュードを侍従に上げたのだ。

侍従や侍女は本来貴族の子女から選ばれるが、リュードは騎士の子でしかも庶子だった。不相応だ と父は良い顔をしなかったが、皇太后から取りなしてもらって何とかねじ込んだのだ。その代わり通

常の侍従よりも多少給金は少ないようだし、侍従長の役職を正式に認められていない。 それでもリュードは王都でずっと暮らせることを受け入れ、口には出さないがエルシアンに感謝を

抱いているようだった。 ラジールか、とエルシアンは溜息になった。父ではなく、アスファーンが出征すれば良かったんだ

と思うのを止められない。もしそうであったらこれほどの圧迫を感じないで済んだろうに。

「いつものこぜりあいだよ。すぐに収まるさ」

ラジールとの交戦は珍しいことではない。国境の大河ユルエリを挟んで金属と宝石の鉱脈が点在しているのだ。周辺は深い森で大規模な戦場たりうるのはユルエリの河川周辺に限られているから、押

しつ戻しつ膠着といって良かった。戦闘もそれほど長く泥沼に陥るまでは双方執着しない。 だがリュードの顔は晴れやかには戻らなかった。その理由もエルシアンは分かる。ただの小競り合

いだというなら父王が行く必要などないのだ。エルシアンの無視した部分とその気遣いをリュードは 正確に受け取ったようだった。なるようになるさ、と呟いて首を振っている。ともかくもエルシアン

学院で馬車を降りるとリュードはじゃ、と手を上げる。夕方またこの場所で待ち合わせるのだ。その間リュードがどこへ行っているのかは知らないが、エルシアンも学院の授業を抜けてしまえば自由

......日常がまた、同じように動き出した。

な時間になるから文句を言ったことはなかった。

はリュードの当直を取りつけてほっとしたのは事実だった。

それをエルシアンは安堵で眺め回し、ほころびがないだろうかとためつすがめつ、確かめている。

恐怖で背中を打たれているのが自分で分かっていたが、その震えは最早自分では止められないだろう



それは壮観であった。舞い散らされる夏の白い花は、王家の純白を祝福するように空中を吹雪のように埋め尽くしている。

国王陛下万歳の歓声が三度沸き起こり、手を挙げて応える父王の威厳整った姿はまさしく地上の栄 光を身に請ける者だった。

アスファーンが正装の白いマントに身を包んで深く父王に腰を折った。何か言っているのだろうがエルシアンのいる場所からは聞こえない。父の両隣にはこの出兵に同行する将軍が二人膝をついて

。普段は連れていくなら一人だが、彼が将軍としては初陣になるから父は更にもう一人、歴戦の将軍 を連れていくようだった。 夏の日差しの下できらめく揃った槍の尖端、日輪を意匠した旗印の揃いの幕、それらがうねるよう

夏の日差しの下でさらめく揃った槍の笑端、日輪を息匠した旗印の揃いの幕、それらかりねるようにひしめいているのが王城の壇上から見て取れた。

盛大で華やかな歓呼に見送られて父王の飾り馬が視界から消え、やっと散開になると同時にエルシ

アンは髪を解いた。リュードもやっきになって彼の髪をきつく縛ったのだった。 侍従の席は壇上から階層の違う場所へ作られている。更に侍従としてはリュードは一番下位だから

端の端だ。エルシアンのいるところからは姿さえ確認できない。 下へ降りよう、とエルシアンは急ぎ足でその場を出る。壇上を降りかけたところで呼び止められた

。振り返ると長兄だった。その名をウォーガルドという。アスファーンは側腹の三男であった。その 負荷を寄せ付けずに圧倒的な実力を示して勝ち上がり王太子に指名されたのだ。

ウォーガルドはアスファーンさえいなければ順当に太子となり国王となっていたはずで、その鬱屈 をアスファーンに抱えているが、直接アスファーンにぶつけようにもきっかけを彼が与えない。

結局、それを更に歪めてエルシアンにぶつけてくる。エルシアンを多少小突いたところで不服を申し立てて来る貴族などいないのを良く知っていた。

皇太后は父王にさえ意見をするほどの後宮の実力者だが、それを一々告げ口するのもエルシアン自身のためには良くなかった。

身元の不確かさ、血筋のよめなさ、後ろ楯のなさ。そんなものを話す度に自覚させられ、あげつらわれているようで、エルシアンはこの兄が嫌いだった。恐らく異母兄弟の中で一番嫌いだったのだ、

われているようで、エルシアフはこの兄か嫌いたった。恐らく異母兄弟の中で一番嫌いたったのた、 あの夜までは――いや。 エルシアンはそれに内心で首を振る。嫌いというなら今でも一番はこの兄かもしれなかった。ア

スファーンは違う。彼のことはこんな些細な悪意を問題にしないほど根が深いのだった。

「お前は初陣は済ませてあるのだったか」

エルシアンははい、と返事をして不機嫌になる表情を隠すために俯いた。戦場に出て王都から失せると言われているのだった。

それきり黙り込んでエルシアンはじっとウォーガルドの苛立ちの相手をしている。下手に返事を返すと本当に父の後を追うはめになるし、口答えすればそれはそれでうるさい。黙っているのが一番

良かった。それは密やかな反抗と言うべきだった。

ウォーガルドにもそれは分かっているのだろう。こうしたエルシアンの不遜な不服従が更に彼の心に爪を立てているのは知っているが、こちらに関わってくるのは向こうなのだから仕方ない。こちら

が不愉快な分、ウォーガルドにもその思いを渡さなくては。

ひとしきり言葉を浴びせるとウォーガルドは背を返した。彼の不満は獣の本能に近く、ある程度を 発散すれば収まるものだ。じっとそれを待っている時間は苦痛だが、頭の中で他のことを考えていれ ば良かった。

アスファーンは既にいなかった。もう執務に戻ったのだろう。彼は日中は執務で多忙だ。父王を送り出した後は国政の代理人たる地位を得ているのだから尚更だった。

エルシアンは王族専用の通路へと降りた。城の中は通常の回廊に加えて王族専用の通路が設けられているのだ。

儀式の王族席に入るにはこの専用通路しかない。城内の大抵の場所へ行くことができるが、侍従さ え伴えないために使用している王族はそれほど多くない。立ち入ることができるのは王族と掃除のた めの侍女たちだけだ。

通路はそのほとんどが吹き抜けの硝子天井を持っている。光が溢れ、足元の白いタイルにも反射し て美しい場所だった。

回廊を早く出てしまおうとエルシアンは足を速めた。リュードとは回廊の出口で待ち合わせてあるのだった。

馬車の中での約束をリュードは守ってくれている。一度交わした言葉は彼は律儀というほどよく尊重してくれた。そのかわり、取った言質には必ず何かの抜け道があったりもするのだが。

不意にエルシアンは足を止めた。何か聞こえた気がしたのだった。何だろうと思うより前に膝が軽く笑い始めた。急に周囲の温度が下がって暗くなった。

エルシアンは驚いて上を見上げた。太陽が雲に隠れたせいだということに気付いて視線を下へ戻し たが、その途端、今度はくっきりと耳に音が響いた。足音だ。全てが凍りついて固まった気がした。

ぷつっと背の辺りが毛羽立ち、次いで波打つように全身に広がった。振り返れない。怖くて。 エルシアンは棒になってしまったように無感覚な足を動かして何とか先へゆこうとする。だがうま

壁にもたれかけた瞬間、体が後ろから抱きとめられた。鼻をかすめた僅かな汗の臭いが記憶のたがを はずす。

一度寝た相手の体臭には敏感になるのか、それが誰だか振り返らなくてもよかった。

く歩くことができない。よろめくようにして走り出すと、すぐに足がもつれた。

「蒼月宮へ戻るのか、エルシアン。私に会いに来るつもりならば夜の方が都合が良いのだがな」 低い声に囁かれて、エルシアンは答えず身をよじる。振り切った腕を叩き返そうとした拳は鮮やか

に空を切った。アスファーンが反応を予測していたように後ろへ最小の仕種で下がったのだ。

「あ、兄上、どうしてここに……」

「ここは王族専用の通路だから私がいても構わないはずだが?」

意図してエルシアンの質問を無視し、アスファーンは薄く笑った。あの夜の笑顔とよく似た表情だとエルシアンは思い、思った瞬間に微かに体が震え出すのを感じた。

体中があの夜のことを思い出し始め、苦痛の苦い味を追想して嫌悪と恐怖で竦み上がっていく。何



に願うなら」

ろう!」

「受け入れるというか」

「愛しているという言葉だけ……」

「――嫌だ!」

アスファーンは余裕のある仕種でエルシアンの前髪をかき回した。よせ、とエルシアンは声を上げ たがそれは震えと緊張のためにかすれ、小さかった。

「よせ、か。全くつれないことだな。一度くらいの関係ではまるで認めてくれないというわけか。そ

れならお前が納得するまで抱いてやろうよ」

「違う、そんなこと言ってな……」

「愛している、と言ったろう? お前は私のものだよ、何もかも。どこにいても誰といても、お前は

私のことを考えていただろう、このところな。休暇は楽しかったか? 熱を出したと聞いて少し最初か

のだ。それに気付くとエルシアンはますます自分が蒼白になっていくのが分かった。

ら無理をさせすぎたと反省していたのだよ。今度はもう少し優しくしてやってもいい、お前がそう私

エルシアンは顔を背けた。閉じた瞼の裏にあの夜の様々な姿態が蘇ってきて、悔しさで眩暈がする

。顎をつまんだアスファーンの手を振り払い、まともに動いてくれない足で後ろへ下がった。

「お、俺は、嫌だ、いや、いやだ、愛なんて嘘だ、嘘をつくな、そんなのに騙されない、そ、それに

一息に喋って苦しくなった呼吸を継ぐと、やっと思う通りに口が動くようになった。エルシアンは それに、と額に浮いてきた冷たい汗を拭いながら渾身、アスファーンを睨み据える。

「それに、愛だって言うのなら俺の嫌なことをどうして強要するんだ。そんなの、信じる訳ないだ

アスファーンは首をかしげた。ゆったりした仕種が彼の落ち着きと優位を教えてくれた。 アスファーンはエルシアンの言葉も抵抗も表面だけのものだと受け流していくだけの自信がある

「それは私がお前を愛しているということを信じた上での話だな。仮定になら意味がない」 意味だって、とエルシアンは顔を歪める。こんな問答にさえ、意味があるとは思えなかった。

だが、愛しているという言葉を受け入れればそれを言質にできるだろうか。そんな計算を吟味しな がらエルシアンはアスファーンを見た。アスファーンは変わらずゆるい笑みを浮かべていた。

「……兄上が俺を愛している、というのが事実なら」

言いかけてエルシアンは言葉を口の中に立ち消えさせた。何か嫌な沼に踏み込むような気がしてな

ンの中のそれが一致しているという保証などどこにもないのに気付いたのだった。

「言葉だけなら、か。真実を受け入れるときにまた新しいものも見えるかもしれんがな。まぁいい、 お前が必死であの侍従に頼み込んでいるのも可愛いものだ。――気紛れな恋人というのもたまには刺 激になる。妻たちは揃って私の機嫌をとるばかりだからな」

アスファーンは独身ではない。有力貴族達や神官族の娘など、合わせて八人の妻がいる。子はまだ いないが彼の後宮は豊かな恵みの中にあって不満があるとは思えなかった。アスファーンはきっと言

らなかった。愛しているなら相手が嫌がることはしない、というエルシアンの中の常識とアスファー

ってみているだけなのだろう。

「だからって、俺は関係ない!関係ないんだ!」

エルシアンの叫びは悲鳴に近かった。アスファーンが何を言い出すのか予測がつかない。何をされるかはもう分からなくなっている――理解など出来なかった。

確かなのはアスファーンがエルシアンを再び同じように無理やりにでも自分のものにする気がある ということだ。エルシアンがいくら泣いても叫んでも、撤回も後悔もしないということか。

「関係ない、ということはない。いつかお前に私の言ったことを分からせてやる日も来るだろう。─ ─それまでもう少し体力でもつけることだ。あの程度で寝込まれたらかなわん」

そう言ってからアスファーンは軽い笑い声を立てた。それはエルシアンが彼を茫洋とした目で見ていた頃、心底から憧憬を掻き立てられていた芯の太い明るさを持つ声だった。

泣きたい、とエルシアンは思った。涙が全てを連れていってくれるなら。

軽く肩を叩かれて、エルシアンはびくりとして後ろへ下がった。アスファーンが笑みを口元で押し 殺しながらゆっくり側を通り過ぎ、通路の奥へ消えていった。

エルシアンは座り込みそうになる膝を叱って歩き始めたが、足元は柔らかなものを踏むようでおぼつかなかった。時折、同じ式典に出ていた王族達が追い越していくがエルシアンに目をとめたり様子を見る者もいない。

エルシアンは王族の中にあって一族の離れ島だった。それでも良かった。アスファーンだけがエル シアンに目をかけ、言葉をくれたから。

たとえアスファーンが王太子でなくても自分は彼を追いたかっただろう。少年期の始めアスファーンを皇太后から紹介されたときに、一目で圧倒された。引き寄せられた。自分に無いもので輝いている姿が眩しかった――なのに。

エルシアンは片手で顔を覆った。アスファーンは無闇に優しくはなかったが、不公平ではなかった。エルシアンだけを特別に扱いはしなかったが、蔑んだりもしなかった。アスファーンだけがエルシアンを他の兄弟達と変わらぬ扱いをしてくれた。

いつもいつも、年長者としてエルシアンを正し、叱り、導こうとしてくれた。学院へ行きたいといった時も父王に取りなしてくれたしリュードのことでも一度配慮を示してくれた。筋の通らないこと以外は年長者としてエルシアンの甘えを聞いてくれたし間違っていることは穏やかに諭し、手を差し伸べてくれた。

エルシアンはアスファーンにとって特別な位置につきたいとずっと思っていた。それが未来図であり、希望であり、全てだった。兄を支える駒の一つでもいい、役に立ちたい、兄の示す未来を近くで見つめていられたら、どんなにか幸福だろうかと。

――今、エルシアンは確かにアスファーンの中に特別な位置を占めているらしい。但し、エルシアンが望んでいなかったどころか想像すらしていなかった方向で。

それは悔しさだけでも怖さだけでもなかった。

何故。エルシアンは呟く。

納得できる理由が欲しかった。自分が何かしたとでもいうのか、それともアスファーンは最初から こうするつもりで自分を育成していたのか。エルシアンが指針として自分を見つめているのを承知し ながら? ――いや。

エルシアンは低い自嘲を喉で鳴らした。何もかもを疑わしく見るのは自分達の過ぎてきた幸福な過去を、全て否定するのと同じことに思われた。

アスファーンがくれた沢山の言葉たち沢山の配慮たち、そんなもの全てが嘘だったとは思えない。 思いたくない。そんな風に思いたくなどなかった。

だが、とエルシアンは恐ろしい疑問につき当たって目を閉じた。その理由がアスファーンにとって もエルシアンにとっても正当で納得できるものだとしたら、自分はおとなしくアスファーンのものに ならなくてはいけないのだろうか。――それだけは間違っている……恐らく。

断言できない自分の弱さが疎ましかった。人を憎むのが怖い。

誰とでもうまくやっていけるのが自分の一番の長所だと思っていた。好意を向ければそれはどんな 形にしろ返ってくるものだと単純に信じていた。人を憎むゆえに憎まれるならば、その反対も成立す るのだと思っていた。

リュードは皮肉に笑いながらそれは人から憎まれたことのない奴の甘い考えだと言ったが、その意味を真実分かっていなかったのだろう。

根の弱い優しさは、現実に太刀打ち出来ない。

食いしばった歯列から嗚咽に似た呻きがもれた。ふらふらとリュードの待つ回廊の出口へ向かいながら、近い内に再びあの悪夢を自分は受け入れるのだとエルシアンは思った。少なくともアスファーンはそんな意味のことを言った。

自分はその時何か出来るだろうか。アスファーンの心をどこに捜したらいいのだろう。彼に憎まれているのだという感触はますます胸に広がり、消えてくれそうにない。

その染みを持て余しながら、エルシアンは回廊の出口へ歩いた。

まっすぐ歩く道が今残されている最後の楽園であることを理解してなお、ここを出て現実へ戻っていかなくてはならかった。

「どうした」

鳥籠の小さな扉を開けると小鳥は黒い瞳でまっすぐにこちらを見上げてきた。無垢な視線が可愛かったが逃がしてやらなくてはいけない。

去年の夏に祖母が手に入れた色の珍しい小鳥、けれどそれを長兄の妻が欲しいと言い出して、取り上げられる寸前だ。大切にしてくれるならいいのだけど、と溜息になる。実は長兄にはもう一人妻がいて、そちらが猫を四匹も飼っているのだった。

いて、そららが猫を四匹も飼っているのだった。 「お行き、ほら、」 なかなか出ようとしない小鳥に焦れて鳥籠を揺すれば、小鳥は驚いたように鳴いて籠の中をめちゃ

くちゃに飛び逃げる。 溜息をついて鳥籠に手を入れ、どうにか捕まえようとしていると後ろから名前を呼ばれた。振り返ると兄だった。

近寄ってくる兄に首を振り、慌てて鳥籠を後ろに回す。気が向いたのか小鳥が歌い始めて羞恥で俯 いた。

「ああ、あの小鳥か。兄上も奥方には頭が上がらないと見えるな。……逃がしてしまうつもりか」 兄の言葉にますます下を向いた。これを見つかったら良くないのは確かだった。

だが兄の言葉は叱りつけるものではなかった。あそこは猫がいるようだしな、と軽く笑っている。 顔を上げれば苦笑気味の明るい笑顔がそこにあった。兄がこれを他人には告げないだろうという確信

「蒼月宮では目立つから、池の近くの森がいい――お貸し」

を唐突に得て、やっと安堵で笑顔になることが出来た。

「僕も伸びるかな……で、しょうか……」

ころへ伺う途中だったよという言葉があった。それで安心して兄の後について歩いていく。 広い蒼月宮を子供の足は辛い。小鳥を逃がすためにこの日は蒼月宮の禁園近くまで出てきたが、普

兄が自分の手から鳥籠を取り、先に立って歩いていく。ご用事では、と聞くと丁度皇太后陛下のと

段は殆どこの王城の一番奥にある祖母の構える館で過ごしている。よく来るのは近衛騎士の詰め所くらいだが、警備の関係上、蒼月宮の中程の位置に鍛練所と一緒になっていてそこから先は殆ど行かなかった。

歩きながら兄の背を見上げる。高い場所にある肩に広い背中、とても大人びて手の届かない遠い憧 れと同じようだ。

自分を見上げる視線に気付いたのか、兄が視線でどうしたのかを問うてきた。気恥しさで微かに笑いながら背が高いんですね、と言った。つい半年前に祖母に紹介してもらったばかりで知り合ってそれほど間がない。けれど、その全てが高い水準にまとまっていて憧れを誘わないものが何一つなかった。

「この四、五年で急に伸びたからな。私もお前と同じくらいの年の頃は、そうだな、ちょうどそれくらいか……もう少し低かったかもしれない」

「敬語は必要なときに必要な分だけ使いなさい。卑屈なことと敬意を払うことは違うから……が、ま ぁ背は多分伸びるだろう。父上は同じだし、王陛下はそれほど低い方ではないだろう?」 はい、と頷くと兄が目を細めて笑った。兄に対して自分はまるで子供なのだった。もう少し兄に面白い話が出来たらよかったと思うが、それが何であるのか全く見当がつかない。普段じゃれている若い近衛騎士達や同じ年くらいの騎士の子供たちとするように、池で釣った魚の数自慢ではいけないことくらいが分かる。

この手持ち無沙汰の沈黙を察したのか、兄のほうから沢山の言葉を紡いだ。普段は何をしているのか、勉強はどうしているのか、剣は得意か、弓は、馬は。何か苦手なものがあるなら少しなら見てあげられるから言いなさい……

その言葉一つ一つが本当に嬉しかった。元々母親がいないことで沢山いるはずの兄弟達は自分を馬鹿にしている。だからこの兄が初めて自分に笑みをくれたとき、やっと兄弟というものを手に入れた気がしたのは事実だった。

普段暮らしている祖母の館は蒼月宮の一番奥にある。最後の丘を越える手前には王族の船遊びに作られている人工の池があり、隣にはやはり散策用の森が整えられていた。広大な森ではないが、柔らかい草と木の香りがして居心地の良い場所だ。

ここでいいだろうと兄が足を止めたのはその森の手前だった。水と緑の揃った地形が良いのだろう。最初に放してやろうとした禁園は父専用の美しい庭園だが、人向きの美しさよりももっと大切なことがあるのだった。

- 鳥籠を渡されて扉をあけると、小鳥は今度は素直に手に乗ってきた。鳥籠の外に出して手を振り上げると一瞬驚いたように手前に着地し、それから身を囲うものがないのに気付いたのか羽を広げて飛び立っていく。

それを見上げると同時に遮るもののない空も目に入った。美しい場所だった。この蒼月宮よりも広く、この城のどこよりも自由だ。この場所の中で守られてさえずっているしかない今を越えて、飛んでいきたい。

あの小鳥が逃げて行けたように、きっと自分もいつか空を飛ぶための力強い翼を得て、自由の空へ 。遮るもののない場所へ。きっといつか。その未来の偶像は焦点を結ばないが、希望に満ちていて、 解放感の匂いがした。

いつまでも空を見上げていると、兄が軽く肩を叩いた。それで自分が放心していたのだと多少赤面になった。兄は柔らかに笑って鳥になりたいか、と言った。口にすると少女趣味のようだった。

下を向くと、恥ずかしがることはない、という穏やかな声がした。兄も同じく小鳥の消えた空を 見遣って何かの幻に目を細めていた。それは自分が焦点のあわない未来を見ていたときと同じような 顔だったから意外だった。



兄は王太子を長兄と争っていると祖母から聞いた。自ら望んでこの息苦しい籠の中に入るのと引換 に地上の栄光を望んでいる。

兄の持つ圧倒的な存在感と前を見つめる視線の強さは確かにそれにふさわしく思われた。

「お前はここから出たいのだな……」

その呟きに思わず兄を見た。自分の考えていたことが分かるのだろうか。そんなことを思ってい ると、兄は苦笑しながら前髪をくしゃくしゃとかき回してきた。それが親愛の印だと素直に信じるこ

とができた。 「僕は……ここにいてはいけないんだと思うんです。母上は分からないし……父上は僕のこと、あま

り好きでないみたいだし……お祖母さまはとても可愛がってくださるけど、でも、いつかはいなくな ってしまうでしょう? 今みたいなことがずっと続くなら、それはとても……気が重くて」

兄はしばらく答えなかった。だがその視線がゆるみなく自分に当てられているのは分かった。兄が

真剣にその回答を紡いでくれているのが理解できたし、それだけで嬉しかった。 「……外に出ることがすなわち解放ではないよ。私たちにはどこへ行っても責任と義務がついてくる

。生まれというのはそういうものだ。奴隷に生まれついたらその暮らしがあるように、お前も私も王 子であったことが運命なのだから……だから、逃げ出すことではなくて立ち向かうことを覚えなさい

「立ち、向かう......」

兄は頷いた。その頬に浮いているのが優しい笑みだったことで、ほんの少しだけ肩の力を抜くこと ができた。

立ち向かうこと、と再び口の中で繰り返すと、魔法のように鮮やかに口腔で溶けて消えた。麗しい 言葉であった。あるいは、初めて出会った示唆の言葉であったかもしれない。

「そう。何事も最後の瞬間まで諦めてはいけないし、逃げてはならない。その二つは自分をとても弱

くする。一度自分を許してしまうと際限なく許したくなるからね。いつか……」 言いかけて兄は黙り、そして空を見上げた。小鳥の姿は既にどこにもなく、ただ広がる青くつき抜

「いや……」

揚があった。

けた天があった。

兄は何かを口の中で呟いた。何を言ったのかは聞こえなかったが、兄が自分と同じ感慨を抱いてい るのだろうかと思ったのはその時のことだった。兄の言葉は抽象と言うには深いものが籠っていて抑

「兄上は逃げたいんですか?」

そう聞くと兄は苦笑した。兄の大きな手が自分の肩を抱くのに緊張する。その手の力強さと暖かさ 、それがそこにあることが嬉しかった。

「さあな……だが、困難から逃げたくなるときは自分に問うよ。本当に後悔しないか、他に方策はな いのか、逃げることでしか自分を救えないのか、抗えないのか、本当にそうなのか。そうやって考え

ているうちに大抵いい方法を思いつく」

自分はずいぶん神妙な面持ちで重々しく頷いたようだった。私の真似をすることはない、と兄は背

中を撫でてくれるのだった。

もう一度空を見上げると、あの小鳥の声が朧に聞こえた気がした。待って、と手を伸ばすとそれは もう届かなかった。空が青く、そして高い。そこへ駆け上っていく小鳥の翼の羽ばたきが耳に鳴って いて、とても、とても

小鳥。飛ぶ空の。蒼穹に消える、

――自由の翼。

待って。

エルシアンは手を伸ばし、伸ばしたことで目を覚ました。ずいぶん昔の夢を見たのだった。背を撫でた優しい手の感触が皮膚に残っているようだった。アスファーンの大きな手が。

だがもうそれは歓喜を呼ばなかった。感触を背に思い返した途端に、強烈な吐き気が襲った。エル シアンは顔を歪め呼吸を荒くつきながら寝返りを打った。

嬉しかったのだ。その手が自分の背を撫でて優しい言葉をかけてくれるのが、肩を叩いて笑ってくれるのが。兄のようになりたいと願い、自分たちの持つ資質があまりに異質であることに気付いてからはせめて役に立ちたいと望んだ。……望んでいた。

「逃げるな、か……」

その言葉がそれから暫くの間、自分を支える崇高なものだった。そんな時代さえあったのに。兄上 。どうして。けれどその答えはきっと与えられない。アスファーンは愛と嘯くことで、回答をいつも 拒否した。

エルシアンは寝台から抜けて鏡を見た。首にはうっすら絞められた痕跡が残っていた。アスファーンは加減を承知している。エルシアンの意識がほどよく遠のいた辺りで手早く服を剥いで愛していると囁きながら、エルシアンを蹂躙し始めるのだ。

また胸がむっと違和を訴えた。エルシアンはそれを飲み込み、襟元に学院の制服のスカーフを押し 込んだ。侍女が朝の支度を告げる前に沢山のことを誤魔化しておかなくてはならなかった。

この首に残った跡も、手首に残る爪跡も、部屋中に充満している青生臭い空気も。

寝室と中庭を繋ぐ硝子戸を開けると、清涼な外気が雪崩込んできて、その清潔さに泣きたくなる。 どうして自分はアスファーンの放恣の後始末をしているのだろう......

なし崩しに事実が積み重ねられていく。体も多少慣れてきたのか、最初の頃のように熱を出したり 暫くまともに動けないほどの軋みに襲われたりということはなくなってきた。それが自分で受け入れ られない。せめて、全くの無感覚でいられたらいいのに。

エルシアンは少しでも空気を入れ換えるために、レースから絹の二重地に変わったカーテンをはた きながら視線を下へ流した。

暴力に脅えて身動きは出来ない。ぎこちなく震えているだけの自分の扱いを、アスファーンも次第 に承知していくようだった。身を以て抵抗すると酷く殴られ、従順に任せると打って変わって優し くなった。

その隔たりの広大さに揺すぶられ押し流されている。快楽は感じないのに苦痛だけは打ち込まれて 体を引き裂き、泥沼に沈むような窒息感をつれてくる。

順応し、どうにか楽を見つけようとする体と必死で抗おうとする精神の均衡点が見つけられない。

緊張と緩和、恐慌と弛緩、激しい苦痛か激しい恐怖のどちらかにめまぐるしく塗り潰される夜はそれ だけで消耗した。

そして、その事実ごとを塗り込めて隠匿する作業を自ら行っている。埋めてしまった沢山の涙を吸って秘密は大きくなり、いつかその重みで自分を殺すかもしれない。そう思うと体が震えた。怖かった。

夏は既に過ぎ、秋を迎えた。リュードは変わらずエルシアンの側にいることを努力してくれるが、 それでも絶対に無理な日がある。公休日だ。侍従も侍女も、月に一度か二度後宮を下がらなくてはな らない。王族も人であるから好悪があるが、それを少しでも均すための制度であった。

アスファーンの余裕の意味が分かった。自分を可愛いと言ったことも。侍従がもう一人いれば別だったろうに、その公休日のことをすっかり念頭から消して友人に縋っていたのだから確かに頭の悪さが可愛いに違いなかった。

昨晩のようなリュードが公休で下がった夜の暗い祝祭は、いつもと同じく身の上に起こった。それはもう予定調和とも言えた。

風に乗って朝の小鳥の声が聞こえてくる。王宮の庭には沢山の美しい声をもつ小鳥が放してあるのだ。エルシアンは空を見上げる。秋の空は澄んで一段と高く、薄い色合いが颯爽と軽やかだった。羽ばたく小鳥の幻が、まだそこにある気がした。

あのときアスファーンが自分の肩を抱いてくれたことをずっと幸福に暖めていた時代は過ぎた。それは自分の手をこぼれ落ちて消えてゆき、代わりに激しい苦痛が今、そこにある。

秋の冷たい風が梢を揺らす音と小鳥の声をぼんやり聞いていると、やがて朝の支度を始める侍女の 足取りが扉の向こうに聞こえてきた。エルシアンは寝室を抜けて居間へ出た。

侍女がおはようございますといつもと変わらない挨拶をする。それに自分は上手く答えているだろうか。上手く笑っているだろうか。そつなく毎日が過ぎていくほど自分の中身が腐って死んでいく気がした。

「お召し替えはもうお済みなんですね。殿下は朝がお早くて助かります。お食事はいつものように?」 」

食事は特に理由がなければやはり王族用の食事室を使う。エルシアンはいや、と首を振った。体の 痛みがすっかり消えたわけではない。それにアスファーンと過ごした次の日の朝は酷い頭痛と吐き気

で食事など殆ど喉を通らなかった。

「今日は、朝は、いい……リュードが来たらすぐに学院へ行くから……もう、ここはいいよ」

鏡の中にいた青白い顔を少しでも見せたくなかった。真実をいえば誰にも会いたくない。それが侍

女だろうがリュードだろうが同じだ。他人の前に姿を晒したくない。触れられたくない。

以前は友人たちがいることもあって頻繁に顔を出していた近衛騎士の詰め所にも、もう殆ど行か

ない。剣や弓の鍛練はしなくてはならないが、アスファーンの穿った痕跡が消えるまでは肌を外へ露 出することさえできなかった。

侍女が下がっていくのを見送り、エルシアンはもう一度制服の釦やスカーフの位置を確かめる。髪は解き流して頬にかかる分だけをまとめた。飾り紐の美しい模様を見ると切なくなる。ナリアシーアにさえ触れられないのだ。白い肌に触れても強烈な吐き気と眩暈がする。自分の手が肌を滑る音を聞

いた瞬間に、もうどうにもならなくなる......

て運が良かったというものかもしれなかった。

エルシアンはまたため息になった。誰かに触れられること、他人に触れること。この二つが出来ない。無理を殺していると本当に気分が悪くなってきて、いつも貧血のような症状を起こして座り込んでしまうし、酷いときにはしばらく立てない。特に相手が騎士たちのときは顕著だった。鎧に染みついた汗の臭いや彼らの鍛えられた体付きが駄目なのだろう。リュードが典型的な騎士のようでなく

ふとそれでエルシアンはリュードがまだ姿を見せないのに気付いた。寝坊かなとも思うが、公休日

明けは遅れたことがない。彼は確かに朝が強くはないが、仕事だけはきちんとしていたものだ。 おかしいと首をひねっていても仕方がなかった。あまり待ち惚けていても遅刻してしまう。リュー

ドには悪いが先に行ってしまおう。最後にいつもの時間落ち合えればいいのだ。念のためその旨を伝

える簡単な手紙を机において、エルシアンは蒼月宮を出た。 学院の授業が終わっていつもの場所で彼を待ったが姿は見せなかった。おかしいと思いながらエル

シアンは王城に戻った。

太陽宮と蒼月宮は厳密に隔てられているが、それをつなぐ唯一の出入り口を黄昏門という。太陽と 月の移り変わる場所、ということらしい。門手前で戻ったことを表示する名札をかけていると、警衛

の騎士が殿下、と言った。 「戻られたらお部屋ではなく執務室へ来るようにと、王太子殿下からお言伝が」

一瞬、ぎくりと体が固まったのが分かった。エルシアンは震え出す体を叱る。嫌だと喉まで出かかったのをエルシアンは宥める。執務室ということは、秘書やこの時間なら政務官も残っている。他人

がいれば。 それにアスファーン本人に言われたなら無視してもいいが他人を介されるとむげには出来ない。自

分がその言伝を無視したことが伝言を伝えた者の責任になるからだ。エルシアンはやっと頷いて鞄を

黄昏門の詰め所に預け、執務室へ向かった。 アスファーンの執務を行う建物は太子職を務めるものが代々入ることから太子宮と通称されている

。王の執務室がある太陽宮の中心、執政宮と呼ばれている場所のすぐ横だが、今は父王の不在でこちらの太子宮に中心が移ってきていた。執務室の前にはまだ懸案を抱えた担当者が並んでいた。その全てが判断を仰ぐための謁見者であるのにエルシアンは肩をすくめた。人によって出来ることと出来ないことがある。アスファーンは誰にも非難されぬほどの実力と指導力で父王と変わらず国政を指導し

アスファーンは執務中だった。兄の執務の姿を見るのは初めてだった。判断は早く指示は簡潔だが 、納得して担当者が下がっていくから的確なのだろう。

ている。父が今戦場に倒れてもアスファーンが登極して混乱はないと思われた。

どうやら急ぎらしい用件だけを片付けるとアスファーンはエルシアンに座るように言った。秘書が 茶と共にペンとインクをエルシアンの前に置いた。意味が分からなくてアスファーンを見ると、異母 兄は秘書に視線を転じた。

秘書が頷いて先に作ってあったらしい羊皮紙を差し出してくる。羊皮紙ということは公文書であった。視線を内容に落として僅か数行、エルシアンは顔を上げた。

「何だよ、これ? 俺は聞いてない!」

リュードを侍従から解任する旨の命令書であった。

「そういうことになった」

アスファーンの答えは簡潔だった。エルシアンはそれを叩き返した。破り捨ててしまいたかったが それが容易にできないからこそ羊皮紙が公文書に使われているのだった。

「お、俺は何も聞いてないし――そうだ、本人は? 本人は何て?俺はこんなの認めな……」

言いかけるとアスファーンがエルシアン、と強い声を出した。語調の厳しさに一瞬息が詰まった。 アスファーンには既に昨晩の残酷な威圧は消えているが、それでも声を荒げる兄の言うことを咄嗟に

受け入れたくなる。

「これは、本人の実家からの要請を受けて、国王たる父王陛下の代理人として私が決定したことだ。

お前の一存でどうこう出来ることではない」 「実家……?」

アスファーンは頷いた。

「ザンエルグ家は先のラジール戦役の際に当主たる王国騎士が負傷を負った上、嫡男たる騎士を失った。家督相続のため可及的速やかに、残された最後の子息の身柄を戻して欲しいと朝、誓願の一報を受けた」

あ、とエルシアンは声を上げた。リュードは顔をしかめながら確かにそれを危惧していたのではないだろうか。

最後に残った兄が結果戦線に巻き込まれて亡くなり、父親は負傷して騎士の務めを完全には果たせない。リュードの実家は広大というわけではないが領地を持っており、財産がなくはない。それを受け取り伝えていくことが出来るのが、リュードしかいなくなったのだった。

だが、リュードは実家に戻らない方がいいと思ったから侍従として無理を言って召し上げたのに、

「でも……本人はなんて……」

リュードがそれを承知するはずがないと思いながらエルシアンは口を開いた。アスファーンは首を振った。

「ザンエルグ家からそう申告があった以上、当人が何を言ってもそれは無視できるものではない。他に男子がいるというなら侍従としての職務を優先するようザンエルグ家に私個人として提言してもいいが、他に子がいないとなるならその余地はない」

「でも……」

「いい加減にしろ、エルシアン。何れにしろ、あの者を侍従に推薦したのでさえ皇太后陛下のご尽力の賜物、例外であることを解らぬ訳ではないだろう」

エルシアンは言葉に詰まって唇をきつく噛み締めた。アスファーンの言うことは正しい。リュード以外に後継がいないのなら、それは侍従職よりも嗣子たる義務を優先させるのは当然だった。領地があるということは領民がいる。戦場で功績を示し、領地を維持することが今後リュードの歩くべき道なのだった。

署名を、と差し出された羊皮紙を前にエルシアンは沈黙した。理屈を理解した上で納得しなくては ならないことを解っていてさえ、それには躊躇があった。せめて本人と相談をしたかった。今この場 で署名をしたら本当に遮るものなくすんなりとリュードの離職は決定してしまう。

エルシアンがごねても最終的にはアスファーンの判断でそれを無視できるが、形は整うにこしたこ とはない。だからアスファーンもエルシアンを無視せずにこうして呼び出している。

「ともかく本人と相談して」 言いかけたエルシアンにアスファーンは首を振った。

「彼は王都にはいない。昨晩迎えが来て、実家へ戻ったと聞いている。離職の申請を持参した従者が

そう言っていたよ」 黙り込んだエルシアンの前にアスファーンはもう一通の羊皮紙を差し出し、それにも署名を入れる ように言った。それを見た瞬間に、リュードの身の上に起こったことが真実であるのだとエルシアン

「リュード・アレク・エイン・シュルアルド・ルゥ・ザンエルグ 彼の者を王国拝領騎士ザンエルグ家の嫡子たることを認む。 ザンエルグ家の所有するものについて、正当な子としての全ての権利を有することを認む。

生誕に溯り王国騎士に準ずる資格を有していたことを認む。

以上の資格を以て王国騎士に叙する。 若年の身に於いて侍従職に精励した功績により、第十三王子エルシアン・クリス・ルゥ・エリエア

ルの侍従長に任ずる。

同日を以て退職とする。

れ戻ってくるはずだ。

は心底から思い知った。

筆記された全ての事柄について、地上における神の代理人たる王の名を正当に代行し、ここに宣言 する

アスファーン署名、王太子押印」

リュードは庶子だった。庶子は相続を認められないが、嫡子と認めるという書き付けが出た以上は 問題にならない。侍従長としての役名の追加も、騎士への正式な序列も、全て彼がザンエルグ家を継

署名を、とアスファーンが言った。 エルシアンは首を振った。リュードの望みがこんなことではないことを、エルシアンはよく知って

ぐための餞別の装飾であり、格を添えるためにエルシアンの署名を入れろと言われている。

いた。彼は嫡子として認められたいなどと言ったことはなかったし、ザンエルグ家を継ぎたいなどと 考えてもいなかったはずだ。兄が亡くなったのなら葬式のために帰省したのだろうが、それならいず

それまでは自分が署名してはいけない。リュードを実家に帰しても彼のために良い事は恐らく無い

だろうし、それに……アスファーンは自分からリュードを引き剥がしたいのは確かに思えた。 リュードの公休日にエルシアンを自分の暗い情熱のはけ口にしているが、彼のいる日は絶対に姿を

見せなかった。邪魔に思っているのは間違い無い。リュードをこの際追い払ってしまおうと思ってい

るのだ。自分を好きに食らうために邪魔だから? そんなこと、絶対に耐えられない......

エルシアンはぶるっと身震いし、それから兄を思い切り睨んだ。睨まれたほうはそれを涼しげな顔で流し、署名を促した。それに再び首を振ってエルシアンは席を蹴って立ち上がった。

殿下、という声がしたのはその時だった。アスファーンの秘書であると思われた。

「ここで殿下のご署名をいただけなくても、何れ国王陛下も同じことをお命じになります。殿下から の手向けにしてやるのが肝要かと存じますが」

アスファーンがよい、と遮った。

「俺は署名はしない」

エルシアンは強く言った。

「本人の意志を確かめるまでは絶対に認めない」

「――今は私が父王陛下の代理人であり、私の決定は陛下のご裁断と同じ効力を持つが?」

「でも、父上のご命令じゃない」

父に不調があって摂政の役職をアスファーンが得ているなら別だが、父王が不在時の不服は父が帰還してから直接訴えることもできる。しばし睨みあった視線の痛さにエルシアンは目を細めた。アスファーンと目を合わせるのも怖かったが、逃げるなと叱る声がどこかに聞こえてくる。

自分を力付けるのがアスファーンの言葉であることは微かに皮肉に思えたが、今は自分を駆り立て てくれるものになら何にでも縋りたかった。

いいだろう、とアスファーンが溜息をついた。

「ただし、父上への奏上はお前が自分で行うように」

エルシアンは頷いた。父の決定以外にリュードの送還を超的に覆すことができる方法など思いつかなかった。それに賭けても勝てるかどうか自信はないが、それしかないのも事実だった。

リュードのため、そしてそれは自分のため。どちらの比率が大きいのかは、自分でも判然としない 。境界が曖昧なことにエルシアンは顔を歪める。

部屋へ戻ると机上には自分が朝書いた伝言がそのまま残っていた。エルシアンは紙片を握り潰しながら深く、長く溜息をついた。

は苦笑になる。

リュードが最初に戻ってきたのはそれから一ヶ月ほどしてからだった。兄が死んだこと、父親の怪 我は命に関わるものではないこと、その二つを話したあとは沈黙であった。後継のことは彼の思うよ うには進んでいないのだろう。

何度かエルシアンは彼に兄のことを話そうかと思い揺れたが、どうしても踏ん切りがつかなかった
リュードのほうま自分のことで手一杯らしく。まとまに相手をしてくれない。

。リュードのほうも自分のことで手一杯らしく、まともに相手をしてくれない。

ラジールとの戦線は膠着した。一時は押されぎみであったようだが、かなり持ち直したらしい。どうやら終局に向けて水面下に折衝が始まったようだった。大河ユルエリという絶対地形を挟んでいるのだから国境は動かしてもあまり意味がない。賠償金あたりで決着になるだろう。

「あら、もう要らないのエルシアン? 最近あまり食べないわね」 皇太后に言われてエルシアンは無理やり笑顔を作って見せる。

「お前が成績など気に病む子だとは思わなかったけどね」

……部屋に帰るのが怖い。リュードがいるときはその訪れを予測できたものが、もはやアスファー

を繰り返している。 眠れない。食べられない。人に触れられない。全部揃ってまるで潔癖で神経が繊細だとエルシアン

ンの気紛れのまま、兄の思うままであった。いつ訪れるか分からない恐怖の足音に夜通し脅えること

皇太后は心配して色々な美味を工夫したものを用意させては夕食に呼んでくれるが、それも殆ど喉

を通らないか、夕食後すぐに部屋で吐いてしまうかどちらかだった。 「少し……成績が落ちてきているので……」

同じ言い訳を何度も口にしている。だがこれも事実ではあった。それほど惨憺とした成績ではなかったはずだが、勉強など手につかない。法律学だけは王族の顧問として上がっている老教授に指導を仰いでいるからまともな成績になっているが、他は自分で見るのも辛い。

皇太后の言うことは尤もだ。エルシアンは苦笑しながら俺は神経が細いんです、と言った。それも 今となっては事実に言葉が追いつきつつあった。

泊めて欲しいというエルシアンの願いはやはり断られた。十五の成人以来皇太后はエルシアンがこの館に入り浸ることは歓迎しても、夜はあちらに戻ることを筋としている。

曖昧な時期もあったのだが、ちょうどその頃務めていた侍女と愚にもつかないことが色々......あった挙句それにリュードが首を突っ込んで大惨事、となってしまった。二人揃ってかなりこってり油を

しぼられ、泊まりは禁止になったのだ。……今更後悔しても取り返せないが。

- 泊まることを諦めてエルシアンは蒼月宮に戻った。ゆきあった侍女に酒をいいつけ、部屋へ入る。 部屋はいつもと変わらず殺風暑でがらんとしていた。リュードはここと実家をしきりと往復していて

部屋はいつもと変わらず殺風景でがらんとしていた。リュードはここと実家をしきりと往復していて いない日の方が多かった。

今日はアスファーンは来ていないようだった。彼はこの部屋の鍵を持っている。何故と思ったのは 一瞬で、巡り合わせの悪さを落胆するしかなかった――王は、全ての部屋の鍵を管理できる。そして

父がいなくなれば火急の可能性を否定できないゆえにアスファーンが管理することになるのだった。 これほど父を待ちわびているのは今まで無かったことだった。リュードのこともあるし、アスファ ーンが鍵を持っている以上は部屋替えを頼んでみなくては落ち着けない。物音に過剰に反応する状態が良いはずがなかった。

エルシアンは溜息をつきながら髪を結んでいた紐を解いた。剣の下げ緒にと皇太后から貰った品だが、身に付ける機会が殆ど無い。こんなものを自分が持っていても不相応だといわれるだけだ。もしかしたら相応しく他人に認められるようにと言われているのかもしれなかったが、境遇は好転しない。学院の成績が良ければ父王に多少認めてもらうこともできたかもしれないが、今のままでは絶望するしかなかった。

紐の端で宝飾の飾りが揺れている。エルシアンはそれを手の中で転がしながら寝室へ入った。

「遅かったな」

声がかかってエルシアンは驚愕してそれを取り落とした。

「あ......か、勝手に人の、寝室に入る、な......」

言いかける言葉はいつものように喉の奥に消えた。アスファーンが密やかに笑い出したのだった。 エルシアンは顔を伏せながら後ずさった。やはりそれは恐怖なのだった。

「逃げることはないだろう? この昼に父上から伝令が来てな。ラジールとの戦役が終着されたよし 、後三週間もすれば王都にご帰還になる。私よりお前のほうが心待ちにしているだろうと教えに来 てやったのだから、感謝くらいしてくれても良いだろう」

父が帰ってくる、という言葉にエルシアンは俯いていた顔を上げた。リュードを呼び戻すことができるかもしれない光明の糸口がやっと見えた気がした。

明らかにエルシアンの表情に安堵が出たのだろうか、アスファーンは可笑しそうに笑った。リュードの件は覆る訳がないと兄はたかを括っている。それが悔しかった。

エルシアンは出ていけよ、と顎をしゃくった。アスファーンは動く気配がなかった。エルシアンは 舌打ちをして自分から出ていこうと背を返す。一晩くらいならどこかに潜り込むこともできるかもし れない。駄目なら駄目で、どこかで夜が白むのを待とう。アスファーンは妻たちとも関わりを持たな くてはならない。毎晩が必ず空いているわけではないのだ。

エルシアンと言う声がしてアスファーンが座っていた寝台脇の椅子から立ち上がり、エルシアンの側を通過した。自分の言葉がすんなりと彼を動かすのは初めてだった。今日は本当にその事実を告げに来ただけなのかもしれない。

そう思いながら体をずらしてやり過ごそうとするとアスファーンは薄く笑いながら扉に手を掛け、 大きく音を立てて締め切った。エルシアンはその音にはっと首をすくめ、そしてぎゅっと目を閉じた 。俺は馬鹿だと思った。 アスファーンの手が頬を触り、顔が近付くのが気配で分かった。唇を噛んでやろうと眉を寄せて待ち構えていると、兄のそれは唇ではなく睫毛と頬をかすめていつものように首筋へ降りていく。もがいて逃れようとするとアスファーンの手が顎をつかみ、エルシアンの後頭部を扉に押しつけた。ごりこりと頭皮が鳴った。

「今、噛んでやろうと思っていただろう? お前の考えることはとても分かりやすくて素直でいい.....」

かあっと頭に血が上るのが分かった。思考を見通されていた口惜しさとそれをからかわれたことの 屈辱、これから始まる激しい緩急の波への恐れがぐるぐる脳裏を回って目が眩む。

「……愛しているよ」

指して怒鳴った。

いつもの嘘を呟きながらアスファーンの手が自分の肌に滑り込んでくる。エルシアンはやめて、と呻きながらもがいた。 「お願いだからやめて、愛しているならどうして俺が嫌だっていうことばかりするんだよ、何でだよ

「お願いたからやめて、愛しているならとうして他が嫌たっていうととはかりするんだよ、何でたよ ? あ……や、やだ……いや、やだ、やだ」 エルシアンは体を寄せてくる兄の厚い胸を押し退けようと腕を割り込ませ、思い切り突き飛ばそう とした。アスファーンが僅かに体を離した隙にエルシアンはそこから転がり出て扉を開け放し、外を

「そうしたらお前は私に会ってくれないだろう?」

「出てけよ! ここは俺の部屋だ! 勝手に入るな!」

「当たり前だろ! そ、そうだ、父上、父上に訴えてやる!」 父が帰ってくるという事実がこんなときに都合のいい言葉に化けて口からすらすら出てくるのが驚きだった。

アスファーンは微かに頬を歪めた。この言葉は確かに彼の中の何かを動かしたようだった。エルシ アンはこれだと勢いを得て、続きを口走った。やっとアスファーンの弱みを掴んだと確信した。

「父上に言って、廃嫡にしてやるからな!」 アスファーンが面伏せた。表情は分からなかったが兄が自分の言葉に動揺を見せるのは初めてだっ

たから、それで十分に思えた。 エルシアンはやっと荒くなった呼吸を押さえ込みながら低く、父上に直訴してやるからな、と繰り

エルシアフはやっと無くなった呼吸を押さえ込みなから低く、文工に直訴してやるからな、と繰り返した。

何かをアスファーンが呟いた。エルシアンは何だよ、と吐き捨てた。不意に顔を上げたアスファーンの表情は、だがエルシアンが想像していたどれとも違っていた――彼は、笑っていた。心底から可 笑しそうに。

「父上に言う、か……脅迫から覚えるとは悪い子だな、エルシアン。言いたければ言えばいい。お前のしたいことを止める権利は私にはないし……したいことを邪魔しようとは思わないよ、お前を愛し

ているからね」 「ほ、本当に言うからな! そしたら王太子なんかすぐに廃嫡になる、ウォーガルドの兄上が立太子

されて、お、お前なんかあっという間に失脚して……」

喉を鳴らしてアスファーンが笑ったのはその時だった。その声に遮られてエルシアンの言葉は細く 消えた。

「だから言えばいいと言っている。父上に訴えたいならそうすればいい。それを止めはしないさ」

エルシアンは悔しさで唾を飲み込んだ。アスファーンは可笑しそうに笑いながらエルシアンの服をはだけ、首筋に舌をまつろわせてくる。

やめて、と喘いだ声はもう元の媚と懇願の入り混じったものだった。アスファーンが扉を閉め、エルシアンの肩を掴んで強く押しつけた。その瞬間に絶望のために目の前が霞む。

愛撫にエルシアンは喉をのけぞらせて喘いだ。耳の奥で誰かが言うことを聞いておとなしくしていれば優しくして貰える、そうひどいことはされないですむ、と囁いているのが聞こえる。相克と嫌悪に揺れながら、恐怖の余りに屈服する瞬間がじりじり近づいてくるのが自分でも分かった。涙がこぼれた。

(最後の瞬間まで諦めてはいけない、逃げてはならない、一度自分を許してしまうと際限なく許して しまう......)

けれど、どこに出口があるというのだろう。

酷く難しい法律の論文でも書かされている気分だった。

論旨を行きつ戻りつし、論理の枝に迷い込み、先例法と慣習法の資料の山の何処に回答があるのか 、自分は本当に回答に向かっているのか、本当は戻っているのじゃないか、間違ったところへ迷い込 んでいないのか......

アスファーンが喉に噛みつくようにキスをした。それはまさに食らわれているのだとエルシアンは思った。やめて、と掠れた声で訴えても、いつもと同じく返答はなかった。

「扉に両手をつきなさい」

アスファーンに命じられるまま振る舞うのは怯えているからだ。何が起こるか知っているのに、抵 抗すれば圧倒的な暴力に晒されることを知ってしまった恐怖で、いつもいつも折れてしまう。

体をはい回る気味の悪さをエルシアンは喉で啜り泣いた。

この瞬間に頭の中を巡ることはいつも同じだ。何故、何故、こんなことをしなくてはいけないのだろう。被害者なのは自分のほうなのに、さっきまでほんの少し優位にいたのは自分のはずなのに、

何故、いつも決まって許しを請うのは自分なのだろう......

「お願い、もう、こんなこと、やめて......」

涙で潤む声を絞り出してもアスファーンはいつもと同じくその気配を見せなかった。慣れるほど馴れた絶望が体をゆっくり末端から支配し始めるのが分かる。

閉じた目の端から涙がぼろぼろ零れて頬から滴り落ちた。それをアスファーンが指で軽く拭い、そ して動きを止めた。

口が塞がれる。エルシアンは薄目を開けた。目の前には寝室の扉が広がるばかりだ。ざあっと風に 外の木々が揺れる音が硝子越しに小さく聞こえ、それとは別の方向から小さな音がした。

金属の小さな音――部屋の扉が開いた? エルシアンは身を竦ませる。誰か入ってきたのだ。エルシアンの口を押さえる手に力が入った。

時を置かず、エルシアンの体が押しつけられている扉が外から叩かれた。最初は迷いがちに小さか

ったが、返答がないせいだろうすぐに普通の音調になった。

「殿下こちらですか? 火酒をお持ちしましたが?」

侍女だ、エルシアンは息をのんだ。アスファーンが耳元で返事をしなさい、と囁いた。エルシアンは兄を振り返る。アスファーンは妥協を許さないというように首を振った。

「ああ……さっきの……居間に置いて……」

扉越しに少し声を張り上げると、はい、と返事があった。部屋に戻る際に確かに寝酒代りに侍女に それを言いつけたのだった。すっかり忘れて果てていた。アスファーンが呼吸で笑ってエルシアンの 首を吸った。背中をぞくりとする感触が駆けていって思わず呻くと、侍女が殿下、と声をだした。

「お具合でも? 典医をお呼びいたしましょうか」

エルシアンはいい、と咄嗟に答えた。言い訳を考えようとしたが、思考は空回りするばかりで何も 出てこなかった。

侍女の声が訝しげにでも、とためらっている。間を置いて殿下のお声がとても苦しそうに聞こえますからという声がした。

それを言われた瞬間、脳裏に電撃が落ちたようにエルシアンは身を強張らせた。他人が、今、扉の向こうにいる。助けを乞えば届く位置に!

助けて、と言いかけてエルシアンは一瞬、躊躇する。アスファーンにまさに今凌辱されかけている この姿をどうやって繕ったらいいのだろう。迷いを受け取って唇は半開きになったままぴくりともし なかった。 アスファーンが呼吸で笑った気配がした。首筋に軽くキスをし、とめていた愛撫を再開する。軽く 耳を噛まれると反射で涙が出た。扉の外で殿下、と困惑の声がした。

「――駄目だ!」

エルシアンは叫んだ。その途端に涙が滝のように流れ落ちたのが分かった。

「駄目だ、医者はいらな……いや、何でもない、何でもないから、医者はいらない、別に、大丈夫だから、酒をそっちに置いて、出ていってくれ……」

「殿下? でも、本当に……」

「大丈夫だったら!」

返答は悲鳴に似ていると自分でも思った。

「今はとにかく嫌だ、何でもないから、もう行けって」

「お薬だけでも、決まった薬がおありなら取りに……」

「帰れよ!」

エルシアンは扉を殴りつけて怒鳴った。侍女が脅えたように沈黙したのが扉を隔てても分かった。

「……いいから、お願いだから、今日は帰って……」

エルシアンはそう言って詰まってきた呼吸を啜り上げた。侍女の返答は少しの間なかったが、やが て諦めたような声が聞こえた。

「本当に、お加減が悪くなったらすぐお呼び下さいね」

念を押され、分かったとエルシアンは叫んだ。投げやりだと自分でそう思った。やがて再び来たのと同じような金属の合わさる音がして、音は止んだ。侍女は出ていったのだろう。

その瞬間に緊張の糸がぷつりと切れてエルシアンは座り込んだ。涙が止まらなかった。

涙を拭っているとアスファーンが笑いながら耳をつねった。痛いと呻くと低い声が押し殺した笑み

を滲ませて囁いた。

軽く打ち返した。

「……で、誰に訴えると?」

エルシアンは兄を見た。やはり兄は薄く笑っていた。エルシアンは首を振った。

父上に、と呟いてその絶望的な困難さに顔を歪める。他人に知られるのが極端に怖いくせに、本当に父に話すことなど出来るのだろうか。アスファーンはそれを笑っている。

たわめられていくもので煮えるように胸が痛み、そこが熱い。ひし曲げられていくものに凍えるように体が痺れ、とても寒い。

相反するもので激しく攪乱されて、惑乱の中で論理的なことなど何一つ出来ない。後は多分、腐って死ぬだけの気がした。

「泣くな、女のような泣き方をするのだな、お前は……立ちなさい、続きは寝台の上だ」

手を引かれるのをエルシアンは振り払う。やめて、と呻いてもう一度手首を掴もうとした兄の手を

「もう、いやだ、こんなこと、本当に嫌なんだ、もう、いや、こんな、お願いだから、許して」

困ったなとアスファーンが苦笑を装った溜息をついた。

「こんなに愛していると言っているのに、お前は私を嫌いだと?」

エルシアンは震えながら必死で首を振る。アスファーンの目は見られなかった。今兄を見上げている目がどれほど卑屈なのか、知りたくない。彼の目の中に映る自分がどんな顔をして言葉を紡いでいるのかなど、分かりたくなかったし見たくもなかった。

「兄として認めてます、尊敬できる兄上だと思ってます、弟として兄上のためにお役にたちたいと思ってます、だからもう俺のことは放っておいて、兄上として敬愛してますから!」

その言葉は少しもアスファーンを動かさなかった。会話で中断されていた愛撫をアスファーンは黙って始めた。エルシアンはやめて、とその肩を掴んだ。がっしりした肩の厚みが、自分の懇願が如何に無駄なのかを無言に示してくる気がして目を閉じる。

寝台に行きなさいと言われてエルシアンは首を振った。掴まれた手首に手をかけて、お願い、とやめて、だけを繰り返した。強い力が体ごと引きずった。絨毯を擦れる肌の痛みにエルシアンは唸り、

足を突っ張って抵抗した。頬が軽く打たれたのはその時だった。痛みは殆どなかったが、打たれた事 実だけで抵抗する気力が萎えるほど怖かった。

溢れる涙をアスファーンが丁寧に拭っている。撫でる指が頬をゆっくりよぎった瞬間、エルシアンは咄嗟にそれに噛みついた。手の骨の上を皮膚がずるりと滑った。アスファーンが一瞬呼吸を殺したのが分かった。

兄を見上げようとしたとき、先ほどとは比較にならない程の手酷い痛みが頬に炸裂して、エルシアンは体ごと横に倒れた。起き上がろうとした瞬間、腹が蹴り押さえられた。あまりの衝撃で呼吸がつまり、次いで吐き気と痛みによる眩晕でエルシアンは声も出せずにうずくまった。

まり、次いで吐き気と痛みによる眩暈でエルシアンは声も出せずにうずくまった。 「……本当に、噛み癖の悪い子だ……甘やかしていた私も悪いということかな、エルシアン?」

エルシアンはおぼろにかすむ視界をやっと上げ、アスファーンを見た。アスファーンは手首近い場 所を押さえていた。エルシアンは思わず湧いてきたものに突き出されて吐息だけで笑った。少しも体 に力は入らなかったが、確かに報いた実感はあった。

アスファーンが横たわったままのエルシアンを押えつけて腕を後ろにねじあげた。関節が軋んでエルシアンは微かに悲鳴を上げた。アスファーンの手が何かを拾い寄せた。エルシアンは目を開けてそれが祖母から貰った下げ緒であるのに気付いた。それは、と言いかけるとアスファーンはもういつものような余裕を含んだ声で大丈夫、と言った。

「私は恋人のものを取り上げたりはしないよ。よい品だな、エルシアン。皇太后陛下辺りから頂いたか……お前には良く似合うと思うが……試してみるか?」

何を、とエルシアンは途切れがちな呼吸を肩に任せながらアスファーンを見た。アスファーンはいつもの嫌な笑みを浮かべていた。エルシアンは咄嗟に首を振った。この笑顔を見て良いことがあるなどと信じることは出来なかった。

ねじられて後ろに回されたままの手が取られた。もう片方の手も手首で合わされて、そこを何かがきつく縛った。あ、とエルシアンは声を上げた。自由を奪われると思っただけでもう膝が笑い始めた。もがいてみたが、下げ緒の紐は金と白金をより細く糸状にしたものを寄りあわせて出来ている。と

。もがいてみたが、下げ緒の紐は金と白金をより細く糸状にしたものを寄りあわせて出来ている。と てもどうにかなるものではなかった。

「やめて、やめて!」

声は何かのためにかすれ、震えている。アスファーンはエルシアンの縛った手首から体を吊り下げ

て寝台に放り出した。上着が引き剥がされると急に寒気が襲ってきてエルシアンは身震いした。それ はいつまでも体の奥から溢れてきて、少しも止まる気配がなかった。

「今お前が何を考えているのかをよく分かる」

アスファーンが指先で肌をそろ撫でながら呟いた。エルシアンは顔を背けた。アスファーンの声が 小さく笑った。

「私に抱かれるのが嫌で嫌でたまらないか。すげないことだな。だがそうやって焦らされるのも嫌いではないよ。お前をこんなに愛しているのに」

アスファーンは言いながら手首の戒めを引き寄せた。エルシアンは寝台の上を転がされ、無理な姿勢に身をよじった。背中の皮膚がひきつり、肉がよじれた。

「――つれない、意地悪でわがままで焦らしたがりの恋人もいいが、多少我儘が過ぎるな、エルシアン?」

「ご、ごめんなさ、許して、もうしないから、だから酷いこと、しないで、お願いだからもう、い、 痛いのは、いや、いやで、」

「お前の言葉は嘘が多いな。本当は私から逃れたくて仕方がないだろう? 繕うことはない。私を愛していると言えるか、言えないだろう。……ああそうだな、それが聞きたい。言ってみてごらん、エルシアン。私を愛していると」

エルシアンは口を開いたが、そこからは何もこぼれてこない。暫く唇を震わせていた後、エルシアンは代わりに嗚咽を漏らした。

アスファーンがくつくつと喉を鳴らして笑った。

「これが言えるようになったとき、お前が本当に私のものになって可愛い恋人になっていることを望んでいる……が」

アスファーンは低く、限り無く優しく言った。

「それが分かるまではお前に愛を教えないといけないな。お前がいつか歓喜と陶酔に身を焦がし、自 ら足を開くまで」

アスファーンが笑みを浮かべたままエルシアンの足首を掴んだ。エルシアンはかたく目を閉じた。 他人に向かって裸の腹を委ねて足を開くという姿勢の無防備さを身に感じながら。 王都の冬は大陸の北寄りに位置していることもあって遅くはない。更に北のジェア王国などは一年の半分を雪の煙幕の向こうに隠しているからそれよりはましとはいえ、十月半ばにもなると霜が降りた。

カーテンはまた変わった。分厚く光と熱を通さない重い布が、紺に雪を縫い取った模様ごとゆらゆら揺れている。揺れているのは自分がふらついているからだろうか。それとも風のせいか。

カーテンの隙間からこぼれ落ちてくる空気は鋭く冷たい。エルシアンはぼんやりしながら中庭へ続く硝子戸を開けて、そこにもたれて座り込んでいる。

(──まだ……気を失うんじゃない、終わってないだろう……いつも私一人をおいてゆくつもりだな、

やめて。

(――そう、素直なのは美徳だ)

やめて、許して。

(――怖いか? いや……怯えるお前も好きだよ)

やめて、許して、何でもするから。

「何でも……する……」

、エルシアンは立ち上がった。

本当だ、とエルシアンは低く笑って座ったまま膝を抱え、額をそこに押し当てた。何でもする。

兄のあてがう苦痛から逃れるためだけに取りすがり、啜り泣いては懇願し、這いつくばるように機 嫌を伺い、結局は何も聞き入れられずに彼のものになる。その繰り返しだ。

目を閉じると初冬の薄い日ざしが瞼の裏に多少は感じられた。涙は昨晩に流し出してしまって、今は一滴も残っていないようだった。もうどうしていいのか分からない。臣籍に降下して王族から外れ

ることが出来れば蒼月宮を出ていけるが、自分はまだ学生で、年限は後一年半近く残っている。-一年半も。期間は永久に近い長さに思われた。

しばらくそこで外気に身を晒していると、朝の支度を整えるために侍女が入ってきたのが扉の向こうの気配に知れた。エルシアンは身繕いを始めた。体中に点々と残る痴態の痕跡を、沢山の布たちをかぶせて隠してしまわなくては。

父王はこの日帰還する予定になっていて、その出迎えのために正装とはいわないまでも格式のある 衣装にするようにと一昨日通達が来ている。

格式ある、とエルシアンは唇だけをゆるめて笑った。礼装も正装も、高位になるほど体は布の中に 「ない、イルのスカーナ

隠れていくものであった。

肌を首まで覆い隠すような服をどうにか整え、エルシアンは居間へ出た。いつものように侍女が朝の挨拶をした。おはようと返してエルシアンが椅子へ座ると侍女が櫛を手にして後ろへ立つ。礼のある服装というなら髪は絶対にひっつめておかなくてはならないのだった。

丁寧に櫛を使っていた侍女がふとその手を止めた。エルシアンも部屋の入口を見た。扉が開く音がしたのだった。まだ朝が早い。侍女が前室から続く扉を開ける。そこに立っている人影を認めた途端

まっすぐにこちらを見る薄氷色の瞳が、赤茶けた癖毛の髪が、ひどく懐かしくて嬉しかった。

リュー、と呟いた声は歓喜と驚きで震えている。

彼に会うのは二月振りであった。久しぶり、という声はエルシアンが知っている、僅かに斜に構えたいつもの皮肉さ加減を持っている。リュードは侍女の手から櫛をするりと抜き、後は俺がやるからいい、と鮮やかに追い払った。

「……戻ってきたんだ、リュー」

エルシアンは櫛をくるくる手の中で回しているリュードに言った。往復する日数が次第に長くなっていって一月を越えた時、エルシアンは諦めたのだ。嬉しさが実感になって浮いてきたのはその時だった。リュードの離職はあれから宙に浮いたままだが正式に免じられたわけではなかった。

「……エルシ、色々……すまなかった。ありがと……」

リュードが小さな声で言った。エルシアンは首を振った。彼の姿をもう見られない気がしていたから、再会は意外ではあったが嬉しかった。

「よかった、本当に……」

何かを言いたい気がしたが、何をどう喋っていいのか分からずにエルシアンは言葉を濁した。言葉はもしかしたら要らないかもしれなかった。リュードはいつものように軽く笑い、すぐにそれをしまい込んだ。何か他のことを考えているような、そぞろな空気だけが残った。

エルシアンは真顔になった。リュードの様子は普段と違う。実家のことを彼自身で解決して戻ってきたなら散々その手口の解説をした挙句に「俺が戻ってきて嬉しいくせに」の一言くらいはある男だ

「リュー、家のことどうなった?」

気が戻ろうとしている。

しれなかった。

たちまちリュードの顔から張りついていたいつもの人を煙に巻く空気が消えた。こんなに苦しそうな彼を見るのはいつぶりだろうとエルシアンは思った。彼のこんな表情を見るのは本当にここ数年無かったはずだ。エルシアンは過去二回だけの特別を思い返してリュードに座るように言った。

リュードはその言葉を聞こえなかったのか、痺れたように立ちつくしていた。視線がきつく、宙で 焦点を結んでいる。リュードは今目の前に無いものを睨んでいるのだ。

リュー、とエルシアンは促した。リュードはエルシアンを見たが、やはりすぐに目を伏せてしまった。その瞼が微かに震え、痙攣しているのにエルシアンは気付いた。

「――俺、本当に、あの家に……ずっといて……」

リュードが苦しく呻くような声を出した。酷い声だとエルシアンは思った。座りなよ、とそれを遮って長椅子を指し、彼を座らせるために自分が先に腰を下ろした。リュードは小さく頷いてエルシアンの隣に座った。

しばらく二人とも黙っていた。沈黙の長い時間をエルシアンはリュードの整った横顔を眺めること に費やした。彼は僅かにではあるが痩せて、目付きがきつくなっている気がした。彼のことを猫科の 生き物だという言い方は的を得ていたが、気品のある飼い猫から毛を逆立てる野良猫へ、わずかに空

彼の身の上に起こったことは彼には十分負担で、それを背負いたいなどと思っていないのは明白だった。

リューと言いかけたエルシアンの言葉よりも、リュードの声が早かった。それは「頼む」と聞こ えた。

エルシアンは苦いものに押されて目を細めた。リュードは気位が高く、めったに他人に頼らない。

誰も信じていないようだと思ったことさえあった。

リュードは自分で出来ることは全てやったのだとエルシアンは悟った。王都に戻ってくるために、 思いつくことは全部試したに違いない。手紙にそれを書かなかったのはそれが本当に成功するのかど

うか、本人も自信が無かったからだ。

それに気付くとエルシアンもまた、沈んだ顔になるしかなかった。リュードは自分の手の届かない 節疇へほともど関心を振り向けない。彼が出来ると言ったことは木当に出来ることで、出来ないと言

範疇へほとんど関心を振り向けない。彼が出来ると言ったことは本当に出来ることで、出来ないと言ったことは本当に駄目だ。──自信がない、などということは殆どない。リュードは王都に戻る手段

を探し、少なかった可能性を広げるためにあがき、どんなものか想像もつかないが手当しだいに試した挙句——それらは全て徒労となったのだ。それは初めて見るリュードの万策尽きた姿であるのかも

本当に、初めてだ。彼が勝ち目のない賭に打って出て、無様に転んだ姿を見るのは。

頼む、ともう一度リュードが呻くように低く言った。エルシアンは友人に視線を戻した。リュード

は俯いて膝の上で両手を固く組んでいた。組んだ指先、爪が白い。 「俺は、戻りたくない。あそこに戻っても何もないんだ。嫌だ、エルシ、俺は、どうしても嫌なん。

「俺は、戻りたくない。あそこに戻っても何もないんだ。嫌だ、エルシ、俺は、どうしても嫌なん

だよ......」

リュー、とエルシアンは言いかけた。何を言おうとしたのか自分にも判然としなかった。ただこの瞬間、彼の話を聞いているのが自分なのだということを教えたいだけだったかもしれない。

リュードは首を振った。彼の声が僅かに潤み始めているのにエルシアンは気付いた。リュードが額を膝にあてがって身を半分に折った。顔は完全に隠れたが、表情など見なくても良かった。

……泣いているのか、それともそれを耐えているのか。どちらでも同じことであった。

その背を撫でてやろうとエルシアンは手を出し、自分自身の逡巡の為に空中でとめた。

他人に触れるのが怖い。自分から誰かに触れることが出来なくなりつつある。リュードでも駄目な のか、とエルシアンは自分の弱さを噛み締め、やがて手を下ろした。リュードを居残らせたいのは自 分も同じだが、根拠は空虚な程遠い。

ー俺は、自分のことしか考えていない。エルシアンは顔を歪める。リュードを残らせたいのはア スファーンの恐怖を閑減してくれるから、彼が側にいれば少しでも逃れられるから、アスファーンに

対する盾に使っている......

「辞令がおりてこないから親父が王太子殿下に詔請を送ったら、お前の承諾が得られないから国王陛 下のご裁断を待つって返事があって……それで、俺」

リュードが必死で押し隠そうとしている震えが、声の端々を揺らしている。リュードは不意にエル シアンの手を取った。

エルシアンは思わず手を引きかけたが、リュードの手はしっかりそこを握りしめていてどうにもならなかった。

リュードはアスファーンとは違う。違うのを分かっているのに体はやはり反射する。それに半ば絶 望的な暗さを見て、エルシアンは震え出そうとする自分の体を懸命に叱った。

「助けて」

てよ……!」

リュードがそう言って、握りしめた手に自分の身を折りつけた。エルシアンの膝の上に伏すような 格好で微かに肩を震わせる。リュー、と呟いた声は自分もぶれて揺れていた。

「俺は帰りたくない、嫌だ、もう一度だけ助けて、お前のためにいつか死んでもいいから助け

エルシアンは希求の激しさに気押されて黙り込んだ。リュードを見捨てる気はなかったが、安易に

大丈夫と言うことも出来なかった。気休めにしかならない約束をリュードは欲しがっていない。

、 どう答えていいか分からないまま、エルシアンは空いていた方の手をリュードの髪に伸ばした。触

れる一瞬、どうしても指が降りない。エルシアンは深く呼吸をして手を友人の肩を縁取る髪に置いた 。どうしても体には触れられなかった。

「父上にお願いしてみるから……お前が帰りたくないのと同じくらい、俺もお前を返したくないから

、もう、泣くなよ……」

リュードは膝の上で小さく頷いたが、言質をくれとは言わなかった。その困難さと筋の通らなさを 誰より承知しているのは本人なのだった。 エルシアンは緊張して感覚さえ無くしかけている手でリュードの髪をずっと触った。

った。

父は僅かな疲れをにじませていたが、それほど消耗した様子はなかった。事後処理のために残った 将軍の家族に対する恩賞を出す旨をアスファーンに口頭で伝え、あっさりその場から去った。王が視

線を与えたのは不在の期間中に生まれた王女とアスファーンにウォーガルドの三人だけで、その他は

集まった王族の間を抜けて父の背が王族専用の回廊の向こうへと暗さに滲み、消えていく。

エルシアンはそれを追って数歩行きかけて、諦めた。父はアスファーンと何か話しているようだった。留守中の報告を聞いているのだろう。同時にアスファーンの施策を確かめて指導することもあ

るに違いない。それに割り込むのは機嫌を損ねるどころの話ではないことになる。

林立する木々のようなものらしい。エルシアンも含めて。

つき従っているし、不用意な発言を許す父でもなかった。 厳格で厳質、威厳に溢れた父の姿を見る度に、自分が本当に血を分けた息子なのかどうかさえ怪し

やはりここでは駄目だとエルシアンは溜息になる。公式の場となると王の側に必ずアスファーンが

いと思う。……だが顔立ちは似ていた。父親と全く同じ、黒髪に暗い紫の瞳を持っているのは自分だ けだ。

リュードはエルシアンの部屋で苛々と時間を噛み潰していた。彼の処遇は中途半端に浮いていて、 エルシアンに随行することもできなかったのだ。

礼服から平服に着替え、夕方までエルシアンはリュードと話をした。ザンエルグ家の親戚や遠縁の

男子はいるが、血は薄い。リュードの義母はリュードの相続に強烈な拒否を示していて、そのせい

もあって相当内輪で揉めたようだった。 帰宅した日に食事にと階下に降りていくと、義母は犬の餌を皿に盛ってリュードの足下に置いたと

いう。それを戸外でうろついていた野良犬に食わせたら死んだ、とリュードは鼻で笑った。警告としては最大のものであろうと思われた。 「食事は危なくて食えないし、親父は寝込んだままだしさ、大体領地が掛かってるから親戚も俺を追

こそ死んじまえば良かったんだ」

死んだあの野郎が懐かしいね、といってリュードはその言葉をまるで信じていないのを自分で笑

い出すことでは一致してんだよ。あの女を将来自分の稼ぎで養うのかと思うと吐き気がする。あっち

エルシアンは黙りこくったままリュードの置かれている環境の悪さを思った。

義母がリュードを嫌うのが理不尽だとは思わない。彼女から見れば夫が他所の女に産ませた不義の

子で、見るだけでそのことを思い出すのだろう。だが、それと執拗で陰湿な苛めを許すかどうかは別 のことだ。

父親はリュードをそれなりに庇ったようだが、目の届かないことは沢山ある。見ているようでどこ いずれている大人たちの日をくぐり、日弟たちからも同じような虚符を受けていたようだ。

かずれている大人たちの目をくぐり、兄弟たちからも同じような虐待を受けていたようだ。 リュードはエルシアンの表情を見て取ったようだった。気にすんなよ、と軽い口調でエルシアン

に笑った。それはもう見慣れていた彼の飄々とした一面だったが、エルシアンはそれに微かに強張っ た笑みで返すのがやっとだった。

日が暮れて一斉に王宮に火が点された。エルシアンは適当な時間を見計らって立ち上がった。髪を

、とリュードが言った。

父王の規礼に対するに対する厳しさを彼も知っている。王宮では髪をまとめるのが作法だったから 、そうした方が良いと言われているのだ。エルシアンは頷いて自分で始めた。

適当に整えてから髪紐を目で探していると、リュードが衣装部屋から髪止めのしまってある小箱 を持って戻ってきた。

「こんなのなんかいいんじゃない?」

差し出されたものを見てエルシアンは顔を思わずしかめた。皇太后から貰った剣の下げ緒だった。 あれから触るのも怖くて箱の奥に押し込んだままだ。

エルシアンの嫌な顔を見てリュードは綺麗じゃない、と言ったが同意する仕種は凍えたまま、ついに出てこなかった。

「じゃあ……こっち?」

リュードは何故とは聞かないで、別の紐を差し出した。安堵で頷きながらエルシアンはそれを受け 取り、髪を結んだ。

結ぶと途端に身が引き締まるような気がした。父の元に自分から行くのはこの五、六年には覚えの無いことだった。

二人で会話らしいものをしたのは三年前、成人を迎えたときに慣例として父との会食に呼ばれた時以来だ。その時何を話したかなど、殆ど覚えていない。父の隣にいたアスファーンが沈み切った空気を察してエルシアンに細やかに話しかけてくれたが、それ以外に言葉を発した覚えがなかった。

回廊を宴の催されている小宮へ向かって歩きながら、この道の遠く暗いことをエルシアンは感じた

リュードのことをどうにか出来るという自信は全く無かった。何故か父には避けられている、意図的に無視されているような気さえするのだ。そんなことで果たして自分の願いを聞いて貰えるのだろうか—— いや。

エルシアンは身震いのように一つ、首を振った。それは聞いてもらわなくてはならないのだ。

小宮にいたのは殆ど王族だった。皇太后の姿は見えない。元来父と皇太后は懇意ではなく、公式以外の場に列席することは非常に珍しかった。

父はゆったりと椅子に背を預け、自らの妃たちと何か話していた。傍らに寄り添うようにいるのは アスファーンだ。アスファーンも妃の一人を連れている。公式の場合には妻帯しているものは妻を連

れていくのが慣例だ。ここは公式ではないが、準じるとするならそれも道理だった。
父の側に行かなくてはいけないと思いながらもそのきっかけの言葉を今更どうしたらいいのか考え

あぐね、エルシアンは溜息を漏らした。 それが聞こえたわけではないだろうが、アスファーンがふと視線を流し、エルシアンに気付いたよ

それが聞こえたわりではないたろうが、アスファーンがふと税縁を流し、エルシアンに気付いたようだった。アスファーンが腰を屈めて父王の耳元で何か言っているのが見える。ちらりとこちらを見たから自分のことだろうか。

たから自分のことだろうか。 エルシアンは一つ呼吸を深く吐いてから父の座る部屋隅へ徒歩を進めた。父が軽く頷いて妻たちを 手で払い、立ち上がった。王の突然の移動に一瞬動きかけた場を何でもないと手振りで示し、ア

スファーンを伴って露台へ出ていく。アスファーンが振り返った。エルシアンは呼ばれているのを

悟り、急いでその後を追った。 露台は暖かな場所から出ると鳥肌が頬に立つほど冷えていた。

路口は吸がな物別がり出ると局肌が規に立りはと冲えていた。

父王はそこに置かれている籐椅子に腰を下ろし、手にした金の酒杯に口をつけていた。一瞬通りすぎた風が父から吹きつけてきたような錯覚に捕らわれてエルシアンは僅かに視線を下へやった。やはり父は彼と相対するとき峻厳としていて、取りつく島などなさそうに思えた。 「話があるそうだな」

父が口を開いた。エルシアンは頷いた。駄目だとは言われなかったから、聞いてくれる気はあるようだった。エルシアンは父の数歩前まで歩いてそこで深く一礼した。深く血の繋がっている唯一の肉親のはずが、誰よりも遠い。

「侍従のリュード・ザンエルグのことで……」 父は眉をしかめた。アスファーンが近衛騎士の庶子を侍従に推薦されたことがおありだったでしょう、と補足したからリュードのことなど脳裏から消していたのだろう。

それが何だと促されてエルシアンは事情を大まか説明した。言葉に詰まるところはアスファーンが 助けをくれた。

兄が何を考えているのか本当に分からないとエルシアンは思った。リュードがいなくなったほうが 彼にとっては都合が良いはずだが、こうしてエルシアンの不手際には救いをくれる。

もしかしたらそれは余裕なのかもしれなかった。エルシアンの言葉など父が承知するはずがないと いう見下しなのかもしれない。そう思うと余計に語尾に力が入った。

話し終えてエルシアンは俯いた。父王は話の間と同じく黙っていた。その静けさが重く、怖かった

父がエルシアン、と言った。顔を上げると父はすっと立ち上がった。父はエルシアンよりもやや身 長は高い。アスファーンは父よりも更に上背があるが、父も長身であった。

ならぬ、という短い答えがあった。エルシアンは目を閉じる。驚愕も狂乱もやっては来ない。分の

悪すぎる賭であることは承知していた。お願いします、とエルシアンは深く腰を折った。

父は黙っていた。父上、とエルシアンは胸の底から絞り出すような声を出した。それは本当に切 迫し、泣き出しそうな震えに彩られていた。父の返答はやはりなかった。

「お願いです、父上、――あ、」

だがエルシアンの声を無視して父は部屋の中へ帰るために背を向けた。待って下さい、とエルシアンは父のマントの端を掴んだ。

「今まで、俺が父上に何かお願いをしたことがあったでしょうか。お願いです、彼のことだけは父上 のお慈悲を」

言いかけた言葉をエルシアンはやめた。父の手が頭上にかざされ、次の瞬間たっぷりと降りそそがれた葡萄酒が父の冷たい怒りを伝えてきた。髪をしたって葡萄酒の甘い香りがした。

「頭を冷やせ」

言い放って父がエルシアンの手をマントから降り払った。エルシアンは父上、と叫んだ。

父は僅かに顔をしかめ、エルシアンの頬を打った。痛みで一瞬耳が遠くなる。やっと前をみると父 王の怒声が落ちた。

「――アスファーン!」

それは自分よりもアスファーンに向かったようだった。

「このような下らぬ事由一つ、そなたの裁事でどうにもならぬはずがあるか! 馬鹿馬鹿しい話に私 を付き合わせる前にそれを除けるのもそなたの役目であろう、違うのか!」

「いえ。父上のおっしゃることが正しいと存じます」

- 兄の返答は短かった。父はアスファーンに手をあげることはしなかったが、何よりも冷たい一瞥を 与えた。

アスファーンは黙って深く腰を折った。申し訳ありませんでした、という呟きが兄の口から漏れた

父はそれに頷き、来たときと同じ急速さで怒りを静めて歩を進めた。父上、とエルシアンは言いかけた。父は振り返らず、かわりにアスファーンと静かに吐き捨てた。

「その馬鹿者に道理を説明してやれ」

アスファーンがはいと返事をした。父の背が露台から消える。エルシアンはその時になってやっと 打たれた頬が痺れ始めているのに気付いた。

「理由は以前執務室で説明した通りだ」

「でも」

「もはや手立てはない。明日にも父上の名で彼に対して功労賞を出そう。明朝、私の執務室へ来るように。署名が残っている」

アスファーンもそれだけ言って背を返した。エルシアンは揺らめき燻るものに突き刺されてその場に立ちつくした。

父の言葉は全否定だった。痺れるような悲しみ、凍えるような胸の痛みだけがした。

リュードになんて言おう。それをやっと思い出した時、葡萄酒の跡がべたついてむず痒くなっているのを感じた。

騎士の正装をまとったリュードは優美で華奢な造りとあいまって、男装の麗人のようにも見えた。 すまない、とエルシアンはもう何度目かも分からない言葉を紡ぎ落とした。

いや、と軽く笑ったリュードの顔は全てを受け入れて通り越した者の落ち着きと諦めで、却って穏 やかだった。

エルシアンは詰襟になった正装の胸元に揺れる、正式な騎士であることを示す乳白色のチーフを見つめた。下賜された剣は細かく彫刻を施された鞘と鋭利な刀身を持ち、片刃の背の部分にはリュードの家の紋章である蔦薔薇が金で描かれている。実用できるものではないが、家宝にできる品だった。

王太子からの直接の下賜であったから尚更だろう。リュードはでは、と皇太后に膝をついた。王族 に対する最敬礼は叩頭と決まっている。まず膝をついてからだった。

皇太后はそれを手で制止し、リュードに優しい声を与えた。

「よく家を盛りたてて礎とするのですよ。そなたの活躍を心より祈っていますからね」 リュードは立ち上がっていつもの笑みになって見せる。

「城門まで送ってきます」

エルシアンは祖母に告げてリュードの後ろを追った。外は既に風の冷たい季節であった。二人とも 言葉すくなだったせいで、その間の空気は澄みかえり、更に冷気を増した気がした。

「……元気で……」

月並みなことをエルシアンは言った。リュードはエルシアンをちらりと見て微かに笑った。それが 恐らくは永久の別れになることをお互い承知しているのだった。

リュードは領地に帰り、一騎士として生きていかなくてはならない。エルシアンは父の死の前後に

臣籍に降下して、役職を得て王都に残ることになるだろうが、いずれにしろ関わりは途絶する。

皇太后は何かあればエルシアンを頼りなさい、この子だって王子なんですからねと言ったが、それは言質にさえならない餞別以外の何物でもない。

最後に綺麗な言葉や小物たちで飾られてリュードはますます華やかな眩しさを強めているが、その 顔は済まし込んだ作り笑いのまま、ついに崩れなかった。

「エルシアン」

不意にリュードが呟いた。

「俺はさ……お前が国王陛下に頼んでくれると言ったとき、全部諦めてもいいと、そう思った……」 エルシアンは友人の顔を見る。華やかな空気は既に北風に連れ去られ、素地に戻って感慨深げに穏 やかだった。リュードは何だよ、と軽く笑った。エルシアンの視線に首を振ると空を見上げる。リュ

ードにつられるようにエルシアンも同じことをした。

空はよく晴れていた。鳥が雲のない青い背景を、ふうわり横切って南へ飛ぶ。鳥になりたい。エル シアンは目を細めた。

そんなことを子供の頃に思ったことがあった。無邪気で愚かな望みであったことはこの年になれば 分かる。自分には王族としての義務があり、かせがある。その責任を果たさずに出ていくことは、許

されることではなかった。

エルシアンは溜息をついて空を眺めているリュードを見た。リュードはエルシアンに視線を戻し、

柔らかく笑って首を振った。

いいんだ、と言う声がした。エルシアンがでも、と続けるのを、リュードは下賜の剣についた叙勲 の色房をいじりながら遮った。

「いいんだって。俺は……あの女とか実家の兄たちはみんな嫌いだったけど、実はくそ親父のことは そんなに嫌いじゃないんだよ」

エルシアンは曖昧に頷く。リュードは確かに父親を頼りにはしていなかったが、嫌っているわけで もなさそうだと思ったことはあった。近衛として出仕していた頃何度か話をしたこともあるが、陽気 で大らかで、決して悪意のある人間には思えなかった。父親も自分が王子であることに全く気付いて

おらず、息子に初めて出来た友人としてエルシアンを歓迎してくれたのだ。 「あのくそ親父はさ……根が臆病で女に弱くて頭悪くて決心の続かない、どうしようもない奴なんだ けどさ……少なくとも憎めない奴であることは確かなんだよ」

リュードはそう言い、ふん、と鼻で笑った。

「お前も似てるよ、それにさ。どんな相手でもそれなりにまるめちまう。何だろう、感化みたいな... …親父なんかよりずっとずっと強くそれを感じる。どこにいても誰といても、きっとみんな、お前が 好きだよ......」

エルシアンはありがとう、と言って俯いた。

けれど、と心の中が泣き始めるのを聞いている。人から憎まれる怖さを知ってしまった今、他人の 好意を今までのように素直に身に付けていくことが本当に自分にできるだろうか、と。

「だから、今のお前がいい状態じゃないってことは俺にも分かる」

エルシアンははっとして顔を上げた。リュードは苦さと甘さの入り混じった笑みを浮かべていた。

風が一瞬増してエルシアンは頬を叩いた髪をかき戻した。体が微かに震えているが、これを寒さの せいだと言い張ることが出来るだろうか。

「……なぁエルシ、お前本当に変だよ。夏辺りからさ。でもお前が変なときは大抵、嫌なことがあっ

たときだったから、今も何か嫌なことがあるんだとは思う。俺はもう何も出来ないけど……でも、こ れだけは言っておく。自分自身を変に歪めてまで我慢しなくちゃいけないことなんかないよ。お前 はもっと我儘になってもいいんだよ。だからしっかりしろ。いいな。俺は、……このまま放ってお くと、お前が何だか自殺しそうで、怖い……」

その言葉に鞭打たれたようにエルシアンはぎくりと身をすくめた。何もかも見透かされたような感 覚に一瞬陥り、そんなはずはないと思い返して首を振った。

リュードはエルシアンの様子に何も言わなかった。今自分を問いただしても何も聞けないと諦めて いるのだった。

「本当に我慢できないくらい嫌なことがあったら……もっと自分の望む事を考えろ。なぁ、元気でっ

て言いたいのは俺のほうだよ、全くさ......」 エルシアンは唇だけで笑って頷いたが、顔が強張っているのが分かった。ありがとうと言うとリュ

ードは笑い、ここでいいよ、と言った。

リュードの目の端が僅かに赤くなっているのにエルシアンは気付いた。ここから蒼月宮の中心部に 至るまで丘を二つ越えていかなくてはいけないが、その間人影は殆どなく、広大な敷地の中をぽつん と歩いていくだけだった。

リュードは一人になりたいのだ。

エルシアンは分かった、と言った。じゃあ、とリュードは軽く口にしたが、それは軽さを装った万 感に聞こえた。

最後の握手にと差し出された彼の手を握るのに、一瞬の躊躇がある。こんなことではいけないと思う側から、肩から下が感覚を無くしたように動かない。必死に命じる筋肉の相克で、微かに手が震えているが、遂にそれが出来なかった。

「そらみろ」

リュードが言った。エルシアンが顔を上げれば彼は穏やかな、そして哀しそうな顔で笑っているのだった。リュードは気付いている。自分に何かが起こって内側が移り変わりつつあることを。 それが何かを聞かないのは、せめての彼の気遣いなのかもしれなかった。負担に掛けない、掛けさせない、そんな軽やかさを今自分は永久に失うのだと思うと涙が零れそうになる。エルシアンは慌てて上を向いた。変わらぬ蒼穹が目に痛かった。

「俺に触るのは嫌だ? 違うだろ、お前は他人に触れないんだ。――どうにかしろ。死ぬなよ」 答える言葉がなかった。リュードは差し出した手をひらひらと自分の顔の前でエルシアンに振って 見せた。

「この握手はまた、ね。いつかまた……それまでには俺にべったり抱きつけるようにしっかり鍛練しとけよ、いいな」

リュードの声も心持ち上気しているようだった。エルシアンが頷くと、しばらく沈黙になった。 風が枯れ草を渡る、ざあっという音がした。

「またね、エルシ」

リュードは自分を切りつけるような鋭い声を出して背を返した。丘をゆっくり上っていくリュード の後ろ姿はしゃんとしており、まっすぐに伸びた身長のすがしさばかりがあった。

彼は泣いているのだろうか、それともこらえているんだろうか。たった一つ分かることは、それが 見える位置では決して振り返ってはくれないだろうということだった。

リュード、と陸の向こうに消えようとする人影に呟いたとき、まるで聞こえたように相手も振り 返り、何かを投げた。

きらりと光ったものが落ちた場所へ駆け寄ると、それはいつか彼に渡した金の蛇のついた指輪だった。

(側にいてよ)

自分は、そう言ったのでなかったか。それを守れなくなる義理にこれを返してきたのだとその時 分かった。

指輪にはまだリュードの体温が残っていた。指にはめ直しながらエルシアンはそれを額に当てて、 自分を守ってくれない気配を探そうとした。



それはリュードが身辺から消えて間もない初冬だった。学院への通学は城からの馬車に切り変わり 、否応なしに王子であることが知れ渡ってエルシアンはやや窮屈をなめている。

元々女受けが悪いほうではなかったが、ひっきりなしに寄って来られればうんざりするし、古くからの友人たちはにやにや笑っているだけで助けてくれもしない。口を聞いたこともない同期生は明らかな克服の対象として見るか、恐れ入ってぎこちなくなるか、さもなくば大小取り入ってくる連中か。このどれかだ。

これだから嫌なんだとエルシアンは溜息になる。それでも変わらず付き合ってくれる友人もいる、 ということが貴重なのだろう。

こいうことが真重なのたろう。 - 愚痴を聞いてやるからと連れ回されて遊び歩く夜が増えた。飲んでいるとその時だけは沢山の出来

事を忘れていられる気がして楽だったのも事実だった。本来外泊には許可が要るが、それも無視した 。王宮の夜を迎える事自体が怖くて仕方がなかった。

その日もいつものように王都の中央学院で授業を受け、友人達と散々遊んで王宮へと戻ってきたエルシアンを、待ち構えていた近衛が形ばかり丁寧に連れていったのは後宮の奥、王の居宮に近い区域の一室だった。

高院の制服のまま部屋に連れ込まれてエルシアンはその場の空気に立ちつくす。部屋には父王やアスファーンを始めとした王族がほぼ揃っており、事実上の王族会議とでも言うべき体裁が整っていた。王族会議なら王の執務宮で開催するのが常である。嫌な予感しかしない。

「何か申し開くことはあるか」 長兄のウォーガルドが言った。訳も分からずエルシアンはぼんやりと周囲を見回す。一体これはど

うしたことなのだろう。アスファーンが小さく溜息をついて父王を見た。

その視線につられてエルシアンは父を見やり、顔をしかめた。父の顔に憤りとしか言い様のない表情がある。何かあったのだということだけをようやく理解し、そして次の瞬間自分が犯人扱いされているのに気付いて慄然とした。——申し開くこと、とは言い訳なら聞いてやろうという意味であろう

エルシアンが茫然と立ちつくしていると、アスファーンが低い声で言った。

「昨晩、後宮の書庫に不審火が出た」

事の宝庫というわけである。

エルシアンは首を振って後ずさった。不審火、と列席している王族から密やかな非難の言葉が漏れ てきて、事の重大さに殴られるような衝撃を感じ、エルシアンは必死で首を振った。

「俺じゃない、何でそんなことしなくちゃいけないんだ」 言いながら何故自分が真っ先に疑われたかをエルシアンは理解している。後宮の書庫は公の文書を

言いなから何故自分が真っ先に疑われたかをエルシアンは埋解している。後宮の書庫は公の文書を 管理する場所ではない。主に王族の血縁や出生の記録を保管しておく場所なのだ。つまりは宮中の秘

鍵は成年に達した王族に渡され、王宮を出るときに返還する。今王宮にいる王族の内、成年の者は

エルシアンを含めて僅かに十名、正妃以外の妻達は王族には含まれておらず、候補者を絞るとエルシ

「昨晩はどこにいたか、証明できるのか」

アンくらいしか残らなかったに違いない――が。

ウォーガルドに言われてエルシアンは俯き、床を睨む。昨晩は友人と飲みに行って朝帰りし、すぐに制服のシャツだけ変えて学院へ行ったため、殆ど王宮にはいない。侍女たちは見かけているだろうが、こちらが誰と指定しない限り証人には出来なかった。

「……昨日の蒼月宮の在中証明といっても……そんな、何も」

言いながらまずいとエルシアンは思う。なにより自分には理由に見えるものがある。母親の名を知りたかったのかと言われれば一見十分に思えてしまうのだ。

実際はエルシアンはそんなものに興味はない。どうでもいいし知りたくもない、というのが率直な 気持ちだった。母の不在で随分と今まで不都合を被ってきたし、今更それをどうしようもない。憎ん ではいないが、鼻白むような気持ちになる。

それに成人してすぐの頃、エルシアンは書庫で自分の出生の記録を探したことがあった。結果からいえば母の記録は一切残っていなかったのだが、それを知っていることを話すのは藪蛇だ……

思案に沈むエルシアンの耳に、張りのある声が届いた。

「昨晩はわたくしの所にいましたよ。ね、そうよね、エルシアン」

全員が声の主を見た。毅然とした態度で老女がエルシアンに向かって微笑む。急いでエルシアンは 頷いた。嘘だと分かってはいるが、救ってくれるのなら何でも良かった。

「皇太后陛下」

王が渋い顔で呟くように言った。

「非公式とはいえ王族会議の場で作り話はご遠慮ください」

「あら、わたくしが嘘をついているとでも、カルシェード?」

じろりと睨まれて王は渋面をする。亡き先王の正妃であり立太子されたときに後押しをしてくれた 恩があって、父は皇太后には最大限の配慮を見せる。しかし、と食い下がろうとする長兄に

「お黙りなさいウォーガルド! そなたが口を出すことですか!」

とぴしゃりと言い放ち、エルシアンに頷いて見せた。

ほっとエルシアンは息をつく。疑いは晴れてはいないが、当面の危機は去ったように思えた。

「.....エルシアン」

アスファーンの低い声が言った。

「王子としての誇りにかけて違うといえるか」

「本当に俺は知らない。誓えというなら何にでも誓ってやる」

エルシアンは渾身の全てを込めてアスファーンを睨む。そうか、とアスファーンが頷いた。

「父上、私もエルシアンを信じてやりたく存じます。これは浅薄かも知れませぬが、嘘をついて回るような者ではございません」

そう言ってアスファーンが軽く頭を下げた。皇太后が頷き、父が深く溜息を落とすのが聞こえる。 まるで父は自分が放火をしたのだと信じたいようであった。

「……もうよい、お前ではないというならば仕方なかろう」

投げやりに王が吐き落とし、ウォーガルドが不満気に眉をしかめた。エルシアンを侮蔑する一番はウォーガルドであった。

「しかし、これ以外に誰がおるというのです、父上」

ウォーガルドの言葉にアスファーンが軽蔑の視線をやり、兄上と落ち着いた声を出した。

「ならば不明、ということにするしかございませんでしょう。とりあえず......そうだな、今回の件は 不問にする替わりに所在不明の件について一筆書かせ、口頭注意ということで処分してよろしいでし

ょうか」 処理の提案に父が頷いたのに続き、エルシアンも同じようにする。実務に通じたアスファーンの提

案は合理的で無難だった。

差し出された羊皮紙に文言を入れながらエルシアンはちらりと長兄を見た。怒りで青黒くなった表情に、嫌な気配を感じて眉を寄せる。ウォーガルドには関わりたくなかった。

王と皇太后を筆頭にした年長者たちが揃って退席し、その場が若い王子や王女達だけになると空気は意外とゆるくほどけた。エルシアンは兄弟姉妹たちに軽く会釈して自分も部屋へ帰ろうと扉に手をかける。その背をウォーガルドが呼び止めた。

「本当にお前じゃないのか」

「……知りません」

露骨に顔をしかめながらエルシアンは言った。それは本当のことだが、頭から決めてかかられると 不快としか表現できない。

誰も知らんのだしな、と呟く兄の言葉にエルシアンは聞こえるように舌打ちした。次の瞬間、肩が 突き飛ばされる。ほんの少し後ろへ下がり、エルシアンは長兄を睨んだ。

「何か言いたければ許すが、どうしたい、エルシアン?」

ウォーガルドが鼻で笑う。エルシアンは目を閉じて深く息を吐いた。侮辱に慣れてこの苛立ちをす んなり自分で押さえ込めるという事実は苦笑するしかないが、いつものようにやり過ごそうと目礼し 、部屋を出ようとした手をウォーガルドが掴んだ。

「まだ話は終わっていない」

「離してください、俺にはもう話はありません」

強く手を引くと、ウォーガルドも負けじと引き返し、二の腕が引きつって痛んだ。

「兄上、もうそれぐらいになさっては」

いいかげんうんざりしていた様子でアスファーンが割って入ったが、それは逆効果だった。もとも とアスファーンへの劣等感に苛まれているウォーガルドには嘲笑に聞こえるらしい。

「黙れアスファーン。こやつ如きに私は恥をかかされたのだぞ」

ろくに根回しもせずに何を、とエルシアンがつい溜息になると、ウォーガルドはエルシアンをじろりと睨んだ。エルシアンは目線を反らし、唇をぎゅっと結ぶ。

「こやつごときとおっしゃるのならば、エルシアンごとき放っておけばよろしいではありませんか。

何も本気になって年少の者を詰問することもございますまい」

「駄目だ、これが本当のことを言えばいいだけのことだろう」

「俺は本当に何も知らないんだよ、いい加減に離せって!」

そう怒鳴りながらエルシアンは捕まれた左手を大きく振り払った。あっ、という驚愕の声が上が

った。

目の前でウォーガルドが頬を押さえて信じられないものを見るようにエルシアンを茫然と見ている

エルシアンは急に動きを止めた兄を不思議に見つめた。頬に置かれた兄の手がゆっくりと下ろされて、そこに走る一筋の赤い線にエルシアンは息を飲む。

おそらくは手を払ったときにエルシアンの指にはまっている王族の紋章の指輪が掠っていったのだろう。

ー瞬部屋の中がしんとして、その直後どよめきが起こった。怒りのあまりにウォーガルドが頬を紅 潮させて震えている。まずい、とエルシアンは後ずさった。上下関係の厳しい社会で目上の者を傷つ けてただでは済まないし、顛末の流れはともかく自分が長兄を傷つけたことは逃れようがない。

「謝れ、エルシアン!」

アスファーンが厳しい声で言った。エルシアンは我に返ってウォーガルドを見た。ウォーガルドの 考えていることはすぐに分かった。自分に逆らうはずのない目下に傷を付けられたのだ、痛みよりも 屈辱に震えているに違いなかった。

「エルシアン、聞こえなかったのか、謝れ」 アスファーンが再び言った。

「申し訳ありませんでした」

低く呟いてエルシアンは頭を下げた。発端は、などと言い出せばまた揉めるし、こうでなければ結 局収まらない。

「エルシアンも謝っておりますし、偶然かすってしまっただけで傷は大したことはございません。ど うぞ兄上の寛大なご処遇をお願いいたします」

ウォーガルドが何か言いかけるより早くアスファーンが言って長兄に深く一礼した。許すとしか言 えなくなったのを悟ったウォーガルドの顔に黒い憎悪が広がってゆくのをエルシアンは見た。

「……許す。ただし」

言ってウォーガルドはつかつかとエルシアンに歩み寄り、腰の剣を抜いた。王女たちの小さな悲鳴が上がる中、エルシアンの髪がつかまれて次の瞬間、弦の弾けるような音と共にエルシアンの黒い髪が切り捨てられて床にぶちまけられた。

髪が短いのは犯罪者の証だ、受刑者は例外なく髪を切られる。万一の脱走の際にもその短い髪が何よりも目印になるし、それに王宮では後ろでまとめるのが作法だ。伸びるまで出てくるな、という意味もあるだろう。

さらりと耳の後ろをかすめて落ちてきた髪の感触に、エルシアンは茫然とした。物心ついて以来、 初めて首筋に髪が触る。恐る恐る首に手をやると、こぼれた髪がぱらぱらと落ちてきた。

急激にこみ上げてくる怒りを押し殺してエルシアンは深く頭を下げ、背を返して脱兎の如くに逃げ

出した。 逃げ込む先は皇太后の館くらいしかなかった。いずれにしろ庇ってもらった礼は言わなくてはなら

ない。エルシアンは短く首筋を揺れる髪に手をやって、皇太后の元へ歩きながら唇を歪める。 —— 一瞬、自分がやりましたと言おうかと思ったことを否定はしなかった。些細な罪を得て臣籍に落とさ れれば王宮を出ていかなくてはならない。大事には至らなかったこともあって、自裁を命じられるということにはならないだろう。そんな計算を組み立てて躊躇をしなかったろうか。咄嗟のことで判然としなかった。

皇太后の元へ出ると、あっけにとられた顔を祖母がした。きつく叱りつけるつもりだったろうが、 こちらの髪に茫然としている。

無理もない。この髪は罪人の証明と同じことだった。せっかく庇って不問にしたのにという怒りと 疑問が交互に表われては祖母の表情を変える。これは、と言いかけると皇太后は細い悲鳴に似た溜息 を長く吐いて、椅子に崩れるように腰を下ろした。

「なんてことです、それは……誰が一体そんなことを! 私からカルシェードに伝えておくから名前をおっしゃい」

「これは違うんです」

「違うも何もありますか! 全く、なんてことなの......!」

皇太后は何度も首を振る。エルシアンが違います、と強く言って顛末を説明すると今度は溜息であった。祖母の嘆きも分かるだけに、エルシアンはすみませんというしかなかった。

「でも、俺も不用意でしたから……」

ウォーガルドを口先だけでも庇うのは、この皇太后の怒りが叱責に変わって長兄のところに行くのが嫌だったからだ。父王に対する影響力というのなら、父の正妃でウォーガルドの母である女よりも、皇太后のほうが遥かに勝っている。それがまた揉め事の種になると、父王は「下らないこと」をアスファーンの裁量に任せてしまおうとするかもしれない。

エルシアンはいいんです、と首を振った。これから先の立場のことを考えると持って生まれたものの少なさが更に際立つだろうと思われた。

だが、そんなものは自分は欲しくなかった。安穏に暮らせる落ち着いた日常と、自分に見合っただけの愛情、その幸福さを完全に脳裏に描くことは出来ないが、想像は出来る。自分にはきっとそれが向いているのだ。

皇太后は一しきり愚痴を言った後、仕方がないと溜息になった。どうしたところで髪がすぐに伸びるわけではなかった。

それが終わった後、エルシアンは所在を明らかにしないまま勝手に遊びに行ったことをこんこんと 叱られた。それは確かに自分が悪いのだった。

「ま、今後は絶対に守るんですよ。規律も規則も、無意味に増えているわけではありませんからね。

そのことをよく分かったらもう寝なさい。多少落ち着いたらカルシェードの所へ行っておいで」

父の、とエルシアンは首をかしげる。今日も父は不機嫌を隠そうとしていなかった。目の前に出ていけば更に怒りを煽るだけに思われた。皇太后はエルシアン、と強い口調で言った。

いりは受に思りを煽るたりに思われた。皇太后はエルファフ、と強い口調で占った。 「お前が無実であることを私はもちろん信じていますよ。でもね、きちんとした形で謝罪をしておく のは悪いことではありません。放火のことは無視していいから、時間を無駄にさせて済みませんでし

たくらいのことを言ってらっしゃい」 はい、とエルシアンは素直に頷いた。損はないはずだった。父は不意の訪れを嫌うから、先に連絡 を入れておかなくてはならない。手続きの面倒さを思うと溜息になるが、父に穏便に会ってもらうに

を入れておかなくてはならない。手続きの面倒さを思うと溜息になるが、父に穏便に会ってもらうに はそれが一番良かった。

皇太后がこの夜は泊めてくれると言ったので、エルシアンは従った。蒼月宮に帰らなくて済む方法を手当り次第に試している最中の事件だったから、しばらくはここしか逃げ込む場所がないのは確かだろう——アスファーンは、今日は来ているだろうか。それを思うと背が冷えて寒気が襲ってくる...

皇太后の館の二階の一番端にエルシアンの部屋はある。子供時代はここが暮らしの本拠だった。向かいの小さめの扉を開ければリュードが大抵寝台に寝そべりながら本を読んでいて、多少面倒そうに何だよ、と言う──彼の不在が今、心から寂しかった。

首筋をやっと覆うくらいになってしまう。 - この影は日立つだるう、誰も短影にしている者など、王宮では見ないからだ、今日の出来恵も伝わ

エルシアンは鏡を見た。髪はぶつ切られていて長さが揃っていない。一番短いところに合わせると

この髪は目立つだろう。誰も短髪にしている者など、王宮では見ないからだ。今日の出来事も伝わって、誰もが髪を見る度にそのことを思い出すだろうか。......居づらくなりそうだった。

扉が控えめに叩かれたのはその時だった。エルシアンはいいよ、と言ってやる。ふわりと白金の淡

い陽炎がすり入ってきたようだった。エルシアンは肩から力を抜いて少し笑う。やっと自分の笑みに 自然なものが戻ってきたのがわかった。ナリアシーアもまた、エルシアンの髪を見て痛ましそうに目

を伏せた。 いいんだとエルシアンは笑い、ナリアシーアの後ろで扉を閉めた。振り返るナリアシーアの髪から

花の香が立ちのぼった。いい匂いだとエルシアンは思った。 透明で光溢れる髪の色そのままに、美しくて優しい、心地の良い匂いだ。アスファーンと会ってい

るとき、愛を囁かれているときに自分にまとわりつく腐臭とはきっと正反対のはずだ。

エルシアンはナリアシーアの髪を手に取った。ナリアシーアは俯いてエルシアンのするままに任せ ている。ここ半年、アスファーンと寝ることの代償にエルシアンは他人に触れる感覚を失いつつあ

って、ナリアシーアにも殆ど触れない。ナリアシーアが身を寄せてきても駄目だ。

それをついに理解して、ナリアシーアは身体を寄せてこなくなった。お互いの肌が体温を感じるほ

ど近くにいるくせに、僅かに開いた隙間をエルシアンは埋めることができない。

それは哀しいことなのか、それとも自分にとって痛ましいことなのか分からなかった。彼女の仄かな温もりに包まれることをどこかで激しく求めているくせに、思い出されるのは暖かな色の過去でなく、激しい闇に塗り潰された夜だった。

アスファーンは愛を苦しみの小道具として使っている。囁きながら自分を痛めつけるためのものなら欺瞞のそれだ。

アスファーンのやり方に体と感覚がおもねるように反応するのも、愛ではない。愛ではない、決

して。

幸福の匂い、抱きしめるといい匂いがしてキスをすると深く香る匂いがして、触れ合うだけで喜びを思う、あの匂いとは違う。絶対に違っているのは、それは分かっているのに。

ナリア、とエルシアンは呟いた。返事の代わりにナリアシーアはエルシアンを仰ぎ見て微笑む。ほ

ンは急に溢れてきた涙を手でこすった。こらえ切れない嗚咽が唇から漏れた。

んのりした唇と瞳の許しが優しかった。 光煙る白金の髪。穏やかな青灰の瞳。艶やかな赤い唇。全てが見つめるだけで幸福を連れてくるほ

た煙る日金の爰。穏やかな青灰の哩。艶やかな赤い啓。全てか見りめるだけで辛価を連れてくるは ど美しく、そして愛しい。

ナリア、とエルシアンは繰り返した。名を呼ぶだけで少しは自分の中に荒れる波が収まっていく気 がしたが、抱き寄せたくて伸ばした手は途中で止まっている。抱き合えばきっと何か癒されるものが

あるだろうに、それ以上ぴくりとも出来なかった。 エルシアンは唇を噛んだ。悔しさよりも、愛しい者にさえ触れられない自分に焦れて涙が一つ落

ちた。それが頬を伝って落ちていくのを拭い、エルシアンはナリアシーアの名を呟いた。 ナリアシーアが微かに不安そうな顔をして、エルシアン様、と言った。それに首を振ってエルシア

「好きだよ、ナリア……」

喘いだ声が深く、自分で捕らわれそうになる。 「とても、とても、君を……」

言いかけてエルシアンは熱を持った吐息を落とし、額を手で押さえた。何を言っても彼女に触れる ことさえできない、それが現実であった。

愛したい。愛されたい。何のためらいもなく相手を見つめて確かめあって、抱きしめあって触れあいたい。そうすれば彼女の花香が自分に満ちて幸福なはずだ。たかがそれだけを、立ちすくんだまま

震えている...... 「エルシアン様......」

ナリアシーアの細い声がしたのはその時だった。エルシアンは無理やり涙を押し込んで笑顔に似た ものをつくって見せた。ナリアシーアは少し迷い、迷いながらエルシアンの頬に指を這わせた。

瞬間背が緊張するのを必死で殺す。それが喘ぎになって口から漏れた。ナリアシーアは丁寧にエル

シアンの涙を指で拭った。 最初、触れられる度にひりつくようだった軌跡が次第に落ち着き、すべらかに変わり、先端の体温

が火照るように感じられるようになった頃、ようやくエルシアンの涙も止まった。

エルシアンは彼女の手を掴んだ。手に伝わるナリアシーアの肌の水気がしっとりと馴染むようだ

った。このまま触れたところから繋がって一人になれたらずっと触れていられるのに。繋がり、繋がられて一つになれたらそれはとても幸せなことである気がするのに。

握りしめた手にはやはり他人に触れることを怖れているのか、微かに痺れが上がってくる。エルシ

アンはそれをやり過ごし、ゆっくりナリアシーアの唇に自分のそれを合わせた。久しぶりに触れる唇は、肌と同じく水気をたっぷり含んで優しい味がした。

唇を合わせたままでじっとしていると、やがて脳天から力が抜けていくような感覚に襲われてエルシアンは体を放した。目の前がじんと滲むように歪み、視界が狭くなって明度が落ちる。エルシアンは目を押さえて扉を背に座り込んだ。

エルシアン様という声にエルシアンは首を振った。胃の辺りに渦を巻き始めた吐き気も、この一時 的な目の不調も初めてではない。しばらく一人でじっとしていればいつも直った。

「……いいから、今日はもう部屋へお戻り。あまり帰ってこないと他の侍女たちの手前も悪いだろう……俺は平気だから」

目を押さえながらエルシアンが言うと、ナリアシーアが不安そうに溜息をついた。彼女にとっても 初めてではないのだった。

もう行っていいよ、とエルシアンが言うとナリアシーアはためらいながらもおやすみなさいませと 呟いて出てゆきかけ、不意に足を止めた気配がした。

どうした、とエルシアンは言った。ナリアシーアは少しの間黙っていたがエルシアン様、と細く言った。

「わたし、わたしのこと、エルシアン様がとても気を使ってくださるのは嬉しいんです。でも......お願い、私のことはお気になさらないで......エルシアン様のなさりたいこと、好きなことを追いかけてください......」

ほんのすこし、すすり泣くような声がした。エルシアンはナリアシーアを振り返るが、彼女の表情は見えなかった。

「お願いです、ご無理をなさらないで……最近、沢山のことを我慢されているように見えます、だからわたしのことを気にして、無理に笑ったり触れたりしなくていいんです。お願い、もっと、ご自分を楽にしてあげて……」

何か言おうとエルシアンは口を開き、そして言葉を失って沈黙した。ナリアシーアはお休みなさいませと同じことを言ってエルシアンに深く一礼した。エルシアンと彼女の間には確かに広大な身分の差があるのだった。

ナリアシーアが消えて取り残され、座り込んだままで俯くと、短くなった髪が首筋を触るのが分かった。それがアスファーンの愛撫と重なり、吐き気が跳ね上がってエルシアンは呻いた。

明日にでもこの髪はきちんと切ってしまおう。揃えてしまえば今のような触れ方だけはしなくなる。自分がアスファーンを思わせる全てから逃げ回っているのは理解していたが、他にどうする術も見

つからなかった。

ている。

父王の執務室は以前行ったアスファーンのそれよりも更に混み合っていて、回廊などはほとんど喧噪といっても良いほどだった。エルシアンは秘書たちの前室で来訪を告げる。秘書の案内のまま、初めて父王の執務室に入ると、そこにはウォーガルドがいた。

エルシアンは顔が一瞬頬が引きつったのを感じたが、ウォーガルドは別の用事のようだった。彼も 公職を務めている。

ウォーガルドはエルシアンの顔を見た途端に不機嫌な顔になった。頬の傷はかすったものでもう殆 ど消えかけているがそれよりも兄を傷つけた事実の方が重いのだった。

「どうした、エルシアン。父上にこの前の言い訳でもしに来たのか。それとも王宮に居辛いから学院 寮に入れて下さい、か? だが居辛いのはお前の素行の悪さが招いたことだと忘れるなよ」

憎々しげに言われてエルシアンは黙って会釈をした。この兄の悪意は頭を下げてやり過ごせば遠く

なる嵐に似ていた。 だがアスファーンは違う。彼は周到で狡猾で、何より悔しくなるほど理性的だった。エルシアンの 様子も過敏な反応も言葉も全てを切り刻むように観察していて、その積重ねでエルシアンを縛り上げ

ウォーガルド、という声がした。父王が退出を促しているのだった。それは自分やアスファーンに掛けるよりは余程穏やかな声で、父がこんな声音を持っていたことさえエルシアンは知らなかった。ウォーガルドがではまた、と父に会釈して出ていく。頷いた父の目は確かに薄く情愛の色を灯して

いた。 さて、と父王がゆっくり椅子に身を預けた。秘書が茶を入れて出ていった。エルシアンの用事は公 務などではなかったから、忙しい王の束の間の休息になるのであった。

「皇太后陛下に言われて私に謝りに来たか。ウォーガルドはお前を蒼月宮から放り出せと言っていたがな」 俺は、と言いかけると王は手をあげた。

「よい。お前も不用意だがウォーガルドも公正でない。他の子らからも話は聞いている。正式な謝罪

文は出す必要を認めない」 事務的な口調で父は言った。エルシアンはありがとうございます、と頭を下げた。

「ウォーガルドはしばらくそれを言い歩くだろうがそれはお前の招いたこと、自分の責任は自分で取 るように」

エルシアンはまた頷いた。父の前に出るとただ頷くか首を振るか、定形の文言を呟くかのどれかの 気がした。

せめて父が、先ほどウォーガルドに与えたような仄かな親としての面を見せてくれれば違っていた だろうか。アスファーンにさえ向けない優しい目だった。父はアスファーンよりもウォーガルドのほ

うが好きなのだろう…… エルシアンは不意に何かが耳元を掠めた気がして顔を上げた。それははっきりとウォーガルドの声 で言っていた。

(王宮に居辛いから学院寮に入れて下さい、か?)

無いのは居場所だ。王宮に求めるのはもう辛すぎて無理筋にしか見えない。学院に寮はあるが、王宮じゃなければどこでも——

瞬間、揺らめく旗が逆風でひるがえるように、突然一つの答えが裏返った。

――どこでもいいのじゃないか?

それは目の醒めるような、明快で単純な答えだった。

どこでもいいじゃないか......そうだ、どこでもいい。

(ご自分を楽にしてあげて.....)

――逃げよう。逃げればいい。

「用事が済んだら」

言いかけた父の言葉を、エルシアンはいいえ、と強く遮った。父が目線をエルシアンにまっすぐに 与えた。エルシアンはそれを見返した。自分と同じ色の瞳がそこにあった。

「いいえ。本日はそれよりもお願いがあって参りました」

父は眉を寄せて呼び鈴に手を伸ばした。アスファーンを呼ばせるつもりだとエルシアンは悟った。 待って下さいとエルシアンはそれを遮る。父上の許可が欲しいのですと食い下がると父は溜息にな った。その溜息の意味も分かった。

父が自分を含めた兄弟たちに関わる件をアスファーンに任せるのは、アスファーン自身が沢山いる 異母兄弟たちの内から自らの手足となりうる同族を選ぶのに必要だからだ。内容で仕分けると収拾が つかなくなるから一括してアスファーンに一任している。

だがアスファーンに相談することは出来ない。今ここで、父の言質が欲しい。そうでなければ自分はまた暴力に屈してそれを撤回した挙句、学院をやめてアスファーンの下で働くなどということになりかねない。その口実を許すきっかけになるほど成績は下がってきている。エルシアンはお願いします、と言った。

「聞くだけ聞いてアスファーンに任せるなら同じことでないか」

父は冷静な表情を崩さずにそう言った。エルシアンはお願いしますと繰り返した。父は呼び鈴に伸ばしかけていた手で茶のカップを掴んだ。聞いてくれる気になったのだった。

「……転校したいんです」

エルシアンはその最初を口にした瞬間、それがいかに希望に満ちた計画であるかが目の前に広がっていくような錯覚を覚えた。

学院は国の最高学府だが、王都に存在しエルシアンの通う学び舎を「中央学院」と呼んだ。中央、 とは地方に対する言葉である。その通りに王都の南の商業都市メルリィと、北部シタルキアの中心都 市ラストレアの二ヵ所に学院は存在する。どこも王立の学府だが、格式は王都の「中央」がやや抜け ていた。が、水準が高いことはどこも折り紙付きだ。

転校、と父王は意外な申し出にそれを呟いた。王族が外の学院に通うのも珍しいことであったが、

転校となると聞いたことがない。公務もあるから王都から離れることは不可能にも思えたが、そんな ことはない。メルリィもラストレアも、収めているのは大公の称号を持つ元王族だ。公務といっても

「ウォーガルド兄上には俺が王宮に居ることも面白くないようですし、俺も正直、居心地がよくあり

エルシアンに回ってくるのは式典への列席や格付けのための名貸しだから問題ない。

ません、学院でも……」

ウォーガルドと揉めた事件のことはあっという間に広まって、もう知らないものなどいないほどだ。身辺は騒がしくてとても学院に通うどころでなかったのも事実だった。父は黙っていた。話を遮られないのはまだそれを続けてもいいということだとエルシアンは口を動かし続けた。

――将来は法学を修めて何かの形で国に貢献したい、蒼月宮の学問所では王族のしがらみから解放されず、中央学院は既に自分にとって落ち着いて学べる環境ではなくなっている。地方であるなら顔は知られていないし、環境が変わってもっと腰を据えて勉強に励むことができる。成績も下がりぎみだが、取り戻して頑張りたい……懸命に尤もで完璧な理由を振りかざし、エルシアンは喋った。自分でもこんなに沢山の言葉が出てくるのが驚きだった。

――逃げよう。逃げなくては。逃げてもいいんだ。

アスファーンのあの苦痛から逃れてどちらでもいい、遠く離れて身を休めよう。このままでは確かにリュードの言った通り、発作的に首を吊ることがないとも限らない。それほど圧迫は強く、きつく体と精神を苛んでいる。逃げるしかない。それでもいい。負けたのでも、屈したのでもいい。アスファーンから逃避して狂った自分の均衡を戻してやらなくては。他人に触れない、他人が怖い、好意の裏を勘ぐっては怖がっている、そんなのが正しく自分の道であるはずがない……!

自分のために、少しはわがままを言おう......

言葉が尽きるように語り終えて、エルシアンは深く呼吸をした。父の沈黙は恐ろしく長い気がした

ふと父の声が耳に届いた。

「メルリィとラストレアと、どちらがいい」

「――いいんですか?」

「自分で願っておいて何を言うか。どちらがいい」

メルリィと言いかけて、エルシアンはどちらでもと修正した。メルリィは工芸品などの産地を近く

に抱えた商業流通の中心地で華やかな都市だが、比較してラストレアは軍事的意味合いが強く、地味 な印象がある。生活全般のことを思えばメルリィのほうが面白そうなのだが、勉強したいのだと言っ

た手前、控えた方がよさそうだった。父王は頷いて呼び鈴に今度こそ手を伸ばした。その鈴の高く澄

んだ音に紛れて父の声がではラストレアだ、と言うのが聞こえた。

ラストレアには父の実弟で大公位を得ているサラーラ叔父が居る。その方が父の目が届くというこ

とのようだった。あの、とエルシアンはアスファーンを呼びに行かせた父に向かっていった。 「寮に入りたいんですが.....」

「好きにしろ。但し、かかる不具合は自分で解決する旨をサラーラに念書で出しておけ」

あっさりと自分の願いが聞き届けられてエルシアンは不思議に目をしばたいた。父に何かを願うの はこれが二度目だが、最初が最初だっただけにするするとうまく運ぶことが信じられない。ありがと

うございます、と口にした言葉はぼんやりとした、現実味をうまく掴んでいない声だった。

アスファーンを待つ間、やはり空間を満たしたのは沈黙だった。父は今までと同じく、エルシアン

に甘い顔をしてくれはしなかった。その方が今まで知っていた父の像に近く、エルシアンは俯いた。 この父のほうに慣れていることがとても悲しいことのような気がしてきたのだった。

「お前は……いつも」

不意に父が呟いた。父の視線は窓の外の禁園に向けられていた。美しい庭は冬を迎える装いに変わ っている。寒椿の群れがここからでも赤く萌えているのがわかった。

「――突然来て、突然去るのだな……」

何の事か一瞬わからなかった。突然来て、がどうやら自分が王宮に連れてこられたことを指すのだ というのに気付いたのはかなり経ってからだ。

自分の生まれた正確な日をエルシアンは知らない。産み落とされた子供は恐らく唐突に父の前に突 きつけられたのだろう。それを認知して父は自分を引き取った。ほとんど目をくれたことは無かっ

たが、それでも生活一切を保証し、今エルシアンの願いを聞いてくれたのは事実だった。 父上、と声をかけても王は答えなかった。それに僅かにエルシアンも安堵する。何を言っていいの

かわからなかった。

扉の向こうからアスファーンが現れると転校の手続き、入寮の打診、そんなものを父はアスファー ンに引き継いだ。それを終えて思い出したようにエルシアンに聞いた。

「時期はいつから」

「出来れば今月中に」

進級の試験が来月の半ばから始まる。落第するはずはなかったが、王都の学院ではもう試験勉強な

ど出来る環境ではなかった。王はちらりとアスファーンを見た。アスファーンは無理ではありませ

んが、と答えた。新学期からでは遅すぎるとエルシアンは慌てて父に頭を下げる。父は溜息と共に本 人の望みにそってやれ、と言って手を払った。もう行けと言われているのだった。

執務室を出るとアスファーンはエルシアンを見下ろしたが何かを言おうとはしなかった。底冷えする視線の冷たさが肌を凍えさせるほど焼いたのを感じたのも一瞬だった。アスファーンは望みが叶ってめでたいことだと低く呟きを捨て、まっすぐに回廊を自分の執務へと戻っていった。

回廊を曲がって消える瞬間、アスファーンはエルシアンを振り返った。エルシアンはその視線を睨み返した。お前から逃げてやる。来月には自由だ……!

エルシアンは口元を弛めた。するとアスファーンもまた、同じような表情をした。

それがどういう意味なのか掴めず、エルシアンは一瞬背を伸ばす。アスファーンの笑みは自分より も懐が広く余裕があった。

あれは、とエルシアンは思った。自分がラストレアへ行くまでの、残された三週間ほどをたっぷり 使う気でいるのだろう。その時にでも撤回させればいいとでも思っているのか。

そんなことはさせない!エルシアンは一つ深呼吸をすると、回廊を急ぎ始めた。

自分は、もっとわがままになってもいい。リュー、お前の言う通りかもしれない。自分を歪めてまで屈しなければいけないものなんか早々ないんだから。

皇太后に願ってしまおう。残りが僅か三週間、それを言い訳にして孝行したいと言えば何とかなる 。祖母の愛情を疑ったことはなかった。

蒼月宮の広大な庭園を横切り、池まで来てエルシアンはそこから空を見上げた。いつか空へ消えた 小鳥の幻を探したかった。

つき抜けて青く高い空に飛んでいく、視線のなんと希望に満ちていたことか。まっすぐに、遮るもののない空へ。

高く遠く、……もっと、もっと。蒼穹へ羽ばたく翼を今手にしたのかもしれない――エルシアンは零れてきた笑みに気付き、今度こそ破顔した。リュードがいれば抱きつけたかもしれなかった。

あと三週間。エルシアンはこみ上がってくる歓喜を声にして軽く笑った。だがその三週間を自分は 手に入れることが出来る。アスファーンの好きになど、もう二度とさせてたまるものか。

エルシアンは呼吸を整えてゆっくり皇太后の館へ歩き出した。北風が吹き抜けていって、冷たいものを初めて感じる首をすくめる。ばらけて頬を叩く髪を押さえながら、エルシアンはまっすぐに前を見つめた。未来がすぐそこに見えている気がした。

われているのだろう。

……学生寮は思っていたよりも清潔だった。掃除や手入れが行き届いているのだろう。そう思って 階段を上りながら見回していると、案内で先導する寮監督が掃除は半月に一度、公共部分を全員です

るのだと言った。特に掃除のやり方を知っているかは聞かれなかったから、自分は平民層出身だと思

自分は上機嫌で、もっと言うなら浮かれている。ナリアシーアや皇太后エレイナ、王都の学院の友

人たちと離れるのは辛いことだったが、それよりも解放感のほうが大きかった。

部屋は三階の左端だった。寮は原則二人部屋だが、それには流石に叔父が難色を示した。父も固い

がこの叔父はもっと固い。しかも父よりもよほど説教が好きで辟易するが、ともかく寮へ入ることも

出来たのだから、満足しなくてはならないだろう。

家はラストレア近いが、肝心の母が既に故人であることと本人が多忙を極めているせいで、アスファ

ーンは滅多にラストレアには立ち寄らなかった。 来たとしても、とエルシアンはまた笑みになる。寮にいる限り安全は保証されているも同然だ。ア スファーンは良くも悪くも人目を引く。接触する機会があるとするならラストレア城内だが、それも

寮の厚い扉が閉まったとき、それが自分を守ってくれる安全な籠に思えた。アスファーンの母の実

城に泊まらなければいいだけの話だった。

部屋の鍵を渡すと寮監は役目を果たしたと忙しく階下へ降りていった。それを見送り、エルシアンは床に一度置いた荷物を担いだ。それほど荷物は持ってこなかった。制服と私服が何枚か、それに使い慣れたペンと履き慣れた靴。そんなもので十分だ。

鍵を差し込むとどこかで引っかかったように上手く入らない。眉を寄せて鍵をがちゃがちゃと押し

込んでいると、階段を上がってくる足音がした。鍵を間違えたのを気付いて寮監が上がってきたのかと思ったがそれは外れで、姿を見せたのは同い年くらいの亜麻色の髪をした少年だった。そちらもすぐにエルシアンに気付いたようだった。ああ、と軽く声を上げてすぐに笑みになる。人好きのする穏やかな表情だった。

「今日、新入寮が一人来るって聞いてたけど、君?」

エルシアンが頷くと少年もまた頷き返して鍵、と言った。

「鍵、死にかかってるんだよ。寮も古いからね」

そう言って少年は差し込んだままの鍵を握っていたエルシアンの手を取った。心臓が跳ねるのが 分かった。眩暈か、吐き気か。どちらにしろその襲撃に耐えるつもりで一瞬目を閉じる。

---だが、どちらもやってこない?

の温かみだけが伝わってきて、それ以外のものは何も襲ってこなかった。

エルシアンはゆっくり目を開けて、自分の手に軽く添えられるように握る手と、持ち主を見る。肌

エルシアンはそれでも遠くから潮騒のようにやってくる変調の兆しを探し、ついに見つけられずに

思わず口元を緩めた。 もう何にも怯えなくていい。怖がらなくてもいいんだ……!

こみ上がってきたのは喜びだった。きっと食事も出来るし夜もよく眠れるだろう。少年が不思議そ

うに自分を見上げたのが分かったからエルシアンは緩く首を振った。

「少し押さえぎみにして、......こう......」

少年の手に導かれて鍵がすんなりと型にはまった感触がした。右に回すとピンが跳ねる音が小さく した。なるほど確かにこつがいるのだった。ありがとうと言ってからエルシアンはまだ名乗ってもい ないのに気付いた。

「エルシアン・クリスです。法学、五十六期……よろしく」

「ケイ・ルーシェンです。同じ法学で同期になるのかな。こちらこそよろしく」

微笑み返してきた表情の毒気のなさにエルシアンは深い安堵を覚える。ケイという少年もまた、自 分と同じく環境と他人にしっくり馴染んでいくのだろう。自分と同類の臭いがする。

きっと仲良くなれるとエルシアンは思う。この予感は多分、外れない。よろしくと差し出されてきた た手をエルシアンは握った。それをためらいなくできることが、何より嬉しかった。

ケイはエルシアンの持ってきた荷物に目を留めてそれだけかと聞いた。本や資料の類いはどうしたのかと聞かれている。長期休暇中ではないから明日も授業があるのに、エルシアンの荷物は本が入っていないせいで小さいのだった。

「ああ、こっちで本とかは全部買うから。急なことであまり荷造りをしている暇、なかったし」

ケイが半ば呆れたような感嘆のような半端な顔をした。本は安いものではなかったが、正直エルシアンには値段は関係無い。もし小遣いに困るようなことがあれば、持ち出してきた幾つかの装飾品を換金すればいいことだった。

「本は今から? 邪魔でなければ市街まで行くから本屋くらいなら案内しようか?」

有難いことだとエルシアンはすぐに頷いた。荷物を入れてしまいなよ、と言われて部屋を開ける。

窓を閉め切る鎧戸を開けるとすぐ外に大樹の枝があった。夏は芽吹いて清涼な香りを部屋に満たして くれるに違いない。

エルシアンが少ない服をクロゼットに放り込んでいると、ケイが着替えを済ませて戻ってきた。荷物の整理を見ながら簡単に寮生活や学院のことを話してくれるのは根が親切なのだろう。

どこか垢ぬけないぼんやりした雰囲気とにこやかな表情が素直な育ちの良さを感じさせた。寮にいるということは貴族なら下位、平民なら豪商の子息というところだろうか。家名を名乗らなかったからきっと、後者だろうけれど。

俺の部屋隣だから、と言われてエルシアンは振り返った。ケイがエルシアンの寝台脇の壁をこつこ つ叩いた。

「何かあったら呼んでくれていいよ」

頷いてエルシアンは心からの笑みになった。良い場所だ、と思った。ラストレアの澄んだ空気も、 この寮に流れているどうやら安楽な雰囲気も、窓の外の木も。

全部が王都に無かった暖かな色だ。豪奢で重厚な天蓋付きの寝台も、美しい曲線を描いた足を持つ 机も、極楽鳥の羽をあしらったペンも何もないが、そんなものたちよりも遥かに美しい。

全部が、きっと上手く回る。その予感を得てエルシアンはますます機嫌よく笑みになり、持たせてもらった現金を服に押し込んだ。行こう、とケイの背を押す。何の躊躇も苦痛もなく他人に触れることができる——元どおりだ。

エルシアンはひそかに笑い、ゆっくりと寮の階段をケイについて降り始めた。

Epilogue

.....だが、一度逃げたことが後々ついてまわる屈辱と忍従の最初の環だとエルシアンはまだ知らない。

アスファーンの理不尽な行為に流された短い期間は確かに一度幕を閉じた。だがこの半年で二度と 抜けぬ楔を打ち込まれたことをエルシアンはまだわからない。一生エルシアンの中から傷は癒えず、 何度も蘇っては苦しむことなどまだ知る術もなかった。

けれどその傷がやがて彼を未曾有の歴史を誇った大帝国の創始者にする。エルシアンの決して長くはない生涯に落ちる影をアスファーンと呼び、二人は終生寄り添わず、憎しみあいながらお互いの運命の輪転車を食い合った挙げ句エルシアンは「兄殺し、一族殺し」の代償に登極者としての栄光を戴冠することとなる。

だが、それはまた別の機会の話だ。今のエルシアンは年若く実績も後背もない王子であり、ただ安 穏に暮らせることだけを望むだけの存在であった。

エルシアンの人生の中で、最も温かく柔らかな追憶に彩られたたった半年の休暇が今、始まろうとしている。

自由の翼・シタルキア創国記序章

http://p.booklog.jp/book/76196

TitleDesign:ひめのゆか

『乙女チック★官能小説』ジャンルを提唱し、らぶえっちの道を突き進む恋愛脳作家。ブックオフを心から愛し、 今日も買っては積んで満足。甘くて辛目の小説と、可愛いデザインの両刀使い。桃野ゆかこ名義で電子書籍配信中

http://www.papy.co.jp/sc/list/credit1/_xe3M7qTmpKuksw

Illustration:シサム

おかずだけでは駄目だ、お米も欲しい。口の中をさっぱりさせるお味噌汁も必要だ。バランス良く野菜のおひたし 、箸休めのお漬物も。食後のデザート、シメのお茶もあるような…定食みたいな絵を描きたい。

http://www.pixiv.net/member.php?id=1677970

Text&Infrastructure:石井鶇子

失笑脱力ぬるユル短編から胃もたれゲンナリ長編ファンタジーまで、文字を書き散らすことに意味を感じるモジ スキー。蟹を心から愛しているが、蟹は私を振り向かない。年に1度か2度でいいんだけどなぁ。

http://p.booklog.jp/users/birdcage123/profile

http://syobon-novels.com/

感想はこちらのコメントへ

http://p.booklog.jp/book/76196

ブクログ本棚へ入れる

http://booklog.jp/item/3/76196

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー(<u>http://p.booklog.jp/</u>)

運営会社:株式会社ブクログ